

JICA横浜 海外移住資料館

# 研究紀要

20

2025年度

## 〈特別寄稿〉

われら新世界と日本社会に参加す

中牧 弘允

## 論文

先住民族アイヌの「忘却された〈痛み〉」・権利・表象に関する授業へ  
— 人の移動が示す多様な思考と生き方から —

福山 文子・中山 京子

第二次世界大戦後の日本人カナダ移住の一樣相  
— 在日カナダ移民事務所開設をめぐる —

木野 淳子

---

## 【第六回 JICA 海外移住「論文」および「エッセイ・評論」論文部門 最優秀賞】

秋深し五七五交わす加奈陀かな  
— 戦前カナダにおける日系人俳句コミュニティの社会学的考察 —

天野 剛至

---

# はじめに

独立行政法人国際協力機構 横浜センター 海外移住資料館は、ハワイを含む北米及び中南米地域を中心に、日本人の海外移住の歴史や日系人・日系社会についての資料の展示・収集・保管、教育普及、調査研究を行っています。

本号では、テーマが多岐にわたる論文3編を掲載しました。また、20号の発刊を記念し、当館の開館時よりご尽力いただいている中牧弘允先生（国立民族学博物館名誉教授・海外移住資料館学術委員）の特別寄稿も掲載しております。これらの論考が、多くの研究者や実務家の方々にとって、新たな発見や関心を深める契機となれば幸いです。

本研究紀要は2006年より発刊を開始し、第20号という貴重な節目を迎えることができました。長きにわたり、本紀要が継続的に発行できたのは、ひとえに、研究に取り組んでおられる学術委員の先生方をはじめとする数多くの執筆者の皆様、本研究紀要の編集に関わっていただいております皆様のご支援とご協力の賜であり、ここに深く感謝申し上げます。

海外移住資料館開館後、調査・研究、資料収集、展示、教育普及といった活動成果や関係者の方々の研究成果を広く国内外に紹介することを目的として、本紀要を創刊しました。この20年間で100編を超える研究成果を紹介してきましたが、テーマは多様でありながらも、執筆者の皆様の海外移住の歴史、日系社会への関心や探求心は、時代を経ても揺らぐことなく、当館の発展にも大きく寄与してきました。これらの研究成果は、私たちを取り巻く環境が急速に変化する時代においても新たな視座を与えてくれます。今後の20年も、本紀要が豊かな研究の蓄積とともに発展し、読者の皆様により深い理解につながることを心から願っています。

当館といたしましても、これまでの活動を一層推進し、今後も来館者のさらなる学びの場となるよう努めて参りますので、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2026年3月  
JICA 横浜 海外移住資料館  
館長 大野 裕枝

---

---

## 『研究紀要』第20号の発刊によせて

海外移住資料館『研究紀要』第20号が、多くの方々のお力添えを得て完成いたしましたので、お手元にお届けいたします。学術委員会が中心となって立ち上げ、進めてまいりました研究プロジェクトの成果に加え、第六回 JICA 海外移住「論文」および「エッセイ・評論」論文部門応募作の中から最優秀賞に選ばれた論文を掲載しております。海外移住資料館の目的である「海外移住と日系人社会に関する知識の普及」と「移住に関する資料・情報の整備と提供」を達成するための努力が、本年度もこのような形で立派に実ったのです。この成果をここで皆様と共有でき、関係者一同、大変うれしく、誇らしく思っております。

特別寄稿「われら新世界と日本社会に参加す」からも、『研究紀要』が、第1号の発刊から20年の歩みを経て成長してきたことがお分かりいただけると思います。皆様のご協力、ご尽力に、心よりお礼申し上げます。

本年度、学術委員会が中心となって立ち上げ、現在、進行している研究プロジェクト（2024年度-2026年度）は、以下の6つです。それぞれの研究概要は、本号の65～69ページに記されていますので、ご参照ください。

- 1 日系カナダ人の経験を通してみる戦後の日加関係
- 2 「帰国」をめぐる個人史 —祖国・故郷・家—
- 3 出移民・入移民の構造変容に関わる研究
- 4 1940-50年代の北米・ハワイにおける日本人移民の経験を再考する
- 5 多文化共生社会に向けた教材化の可能性と魅力 —人の移動と生成された固有の文化からの学びを通して—
- 6 海外移住資料館『学習活動の手引き』（第三訂版）の普及・実践及び教材開発

どの研究プロジェクトも極めて活発に活動し、多様な側面から「移住・移動」について研究を深め、成果を挙げてきました。その成果をもとに、公開講演会を開催した例もあります。また、コロナ禍対応から始まったオンラインでの研究会や講演会も有効な形態として定着し、多様な活動と成果につながっています。プロジェクトの活動の一環として収集した貴重な史資料を整理して海外移住資料館に寄贈し、後に続く研究者の育成に貢献する活動も見られます。このように、プロジェクトが、いろいろな形で成果を一般の方々にじかに伝える役割を果たし、今後、海外移住資料館のアーカイブの充実に貢献することは確実です。

加えて、『研究紀要』に掲載された成果が海外・国内の関連諸機関との連携につながっていく例や、研究過程におけるそれら諸機関との協力の例も多々みられます。これも海外移住資料館の目的の一つであることを考えますと、喜ばしい発展です。今後、このような連携がさらに広がり深まっていくことを願う次第です。

この『研究紀要』が読者および関係者の皆様のご支援を得てさらに成長し、これを通して、海外移住資料館の重要な活動の一端が、より多くの方に認識・理解していただけますよう、願っております。

飯野 正子  
海外移住資料館学術委員会委員長  
(津田塾大学理事・名誉教授)

---

---

# 研究紀要

## 〈目次〉

はじめに 大野 裕枝  
『研究紀要』第20号の発刊によせて 飯野 正子

### 〈特別寄稿〉

われら新世界と日本社会に参加す ..... 1  
中牧 弘允

### 論文

先住民族アイヌの「忘却された〈痛み〉」・権利・表象に関する授業へ  
一人の移動が示す多様な思考と生き方から — ..... 3  
福山 文子・中山 京子

第二次世界大戦後の日本人カナダ移住の一樣相  
— 在日カナダ移民事務所開設をめぐる — ..... 21  
木野 淳子

---

### 【第六回 JICA 海外移住「論文」および「エッセイ・評論」論文部門 最優秀賞】

秋深し五七五交わす加奈陀かな  
— 戦前カナダにおける日系人俳句コミュニティの社会学的考察 — ..... 39  
天野 剛至

学術研究プロジェクト一覧 ..... 60

『研究紀要』目次一覧 ..... 70

---

---

# *Journal of the Japanese Overseas Migration Museum*

## CONTENTS

Preface	Hiroe Ono
On Publishing the Journal of the JOMM	Masako Iino

### Special contribution

---

Participating in the New World and Japanese Society	1
	Hirochika Nakamaki

### Articles

---

Towards a Class on the “Forgotten Pain”, Rights, and Representation of the Indigenous Ainu People: Diverse Ways of Thinking and Living as Shown by Human Migration	3
	Ayako Fukuyama · Kyoko Nakayama

An Aspect of Japanese Emigration to Canada after World War II — The Establishment of the Canadian Immigration Office in Japan —	4
	Junko Kino

---

### **[Grand Prize (Scholarly Research), JICA Essay Competition (2025)]**

Deepening Autumn: A Sociological Study of Prewar Japanese Canadian Haiku Communities	39
	Tsuyoshi Amano

A List of Academic Research Projects	60
Contents List	70

---

## 〈特別寄稿〉

## われら新世界と日本社会に参加す

中牧 弘允（国立民族学博物館・名誉教授／海外移住資料館・学術委員）

JICA 横浜 海外移住資料館における展示の基本テーマは「われら新世界に参加す」である。これは国立民族学博物館の初代館長をつとめた梅棹忠夫（1920-2010）が日本人ブラジル移住 70 周年を記念する国際シンポジウム（サンパウロ、1978）で提示した「われら日本人、新世界に参加す」に由来し、サンパウロのブラジル日本移民史料館の基本テーマにもなっている。海外移住資料館は 2002 年に開館したが、当初、「新世界に参加す」としていたものを監修者である梅棹から主語がないと指摘され、「われら」をくわえた経緯がある（梅棹他 2006：4）。

梅棹は開館 1 周年記念特別講演会（2003）でもこのテーゼにふれ、新世界の文明形成に参加したという文明的な位置づけが移住者にもよろこばれ、自信につながったのではないかと述べている。さらに、日本人全部が新しい文明に参加することは日本国内においても同様であり、参加できる資質は十分にありと発言している。そして、たくさんのひと、とくに若い人に海外移住資料館を見ていただき、「こういう人間の生き方があるんだな」と刺激を受けてもらいたいと結んでいる（梅棹他 2006：7）。

時はながれ、開館 20 周年にむけて海外移住資料館はリニューアルに着手し、2022 年 4 月、リニューアルオープンにこぎつけた。そこでは展示コーナーの新設や充実がはかれるとともに、体験型の展示手法が積極的にとりいれられた。花嫁たちの海外移住、リドレス運動、ララ物資、3D 写真、開墾シアター、触れるジオラマ模型、体験学習スペース等々、じつに意欲的である。また 20 年間の社会変化を反映させることと、誰もがわかりやすく理解できるユニバーサルデザインの導入を心がけたという。前者については、日系人・日系社会の現在、ならびに南米から還流した日系人の歴史がより明確に提示され、後者に関しては、手で触れる「さわる」展示が画期的である。

展示の基本テーマとの関連では、まずニッケイコミュニティの変遷についてブラジルを例に 5 期に分けてモデル化したことが注目される。第Ⅰ期は戦前の「在伯同胞社会の時代」、第Ⅱ期は戦後の「コロニアの時代」、第Ⅲ期は 1980 年代の「世代交代の時代」、第Ⅳ期は 2000 年代の「多様化の時代」と分類された。

第 2 に、1990 年代からはじまった南米日系人の「デカセギ移住」から「日本定住」に転じる変化をどう把握するかがひとつの課題となった。開館時には在日の南米人はいくつかの特定の地域に集住し、その数は増加の一途をたどっていたが、年表の末尾、あるいはまつりを中心に据えた「日本の中のニッケイ、世界の中のニッケイ」という展示コーナーでわずかに言及されるにとどまっていたからである。今回のリニューアルでは、前記の「多様化の時代」のなかで「デカセギ現象による新たな展開」「在日ブラジル人コミュニティの形成と日系人の還流」「定住化の進展と変化するアイデンティティ」というトピックのもと、統計資料や写真とともにその変遷が立項されている。

くわえて、在日外国人に関する「法制度の変遷」が 1980 年代から 2010 年代まで 10 年毎に表示さ

れ、群馬県大泉町、静岡県浜松市、ならびに横浜市鶴見区に関して詳説されている。証言映像においても「国内で活躍する日系人」5名が自分史を披露している。さらに、国内の著名な日系人としてマルシア（タレント）、セルジオ越後（サッカー）、佐々木ロベルト泉（ブラインドサッカー）、魁聖（相撲）の諸氏や、日系人と深い関わりをもつ宮沢和史（シンガーソングライター）がとりあげられている。

現在、南米の日系人は日本社会に定着化するだけでなく、母国との往来も盛んになっている。帰属意識も二者択一ではない。その意味で、梅棹にならい「われら日系人、新世界と日本社会をゆきかう」と言うこともできよう（中牧 2024）。実際、このたびのリニューアルでは日系人が日本社会に参加している実態をかなりのスペースをとって展示するようになった。したがって、「われら新世界と日本社会に参加す」と表現しても過言ではないほどである。

梅棹は開館から間もない時期に当館をおとずれ、「この資料館には魂を感じ、とても感動しました」と述べ、「日本移住者の歴史を知ることにより日本人を見直し、自信をもつことができるのではないか」と展示の意義についても指摘している（梅棹他 2006：4）。盲目の梅棹に魂を感じたと言わしめた展示は今回、さらに充実したかたちでリニューアルされ、これからも日本人の自信につながる展示でありつづけることを心からねがってやまない。

---

#### <文献>

講演者：梅棹忠夫、聞き手：中牧弘允、司会：小森毅、挨拶：鈴木信武 2006「日本人と新世界」  
『JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要・館報』1、1-16。  
中牧弘允 2024「われら日系人、新世界と日本社会をゆきかう」『季刊民族学』187（特集 境界をゆきかう日系人）、4-7。

## 〈論 文〉

先住民族アイヌの「忘却された〈痛み〉」・権利・表象に関する授業へ  
一人の移動が示す多様な思考と生き方から一

福山 文子（専修大学・准教授）・中山 京子（帝京大学・教授）

## 〈目次〉

1. はじめに
2. 前提としてのコロニアリズムとアイヌ先住民族の歴史
3. 「忘却された〈痛み〉」と先住民族アイヌの権利
4. 人の移動が示す多様な思考と生き方
5. 教材化に向けて
6. まとめにかえて

キーワード：人の移動、アイヌ先住民族、「忘却された〈痛み〉」、権利、表象

## 1. はじめに

本稿では、近年当事者より先住民族アイヌの「忘却された〈痛み〉」が提示され、先住民族の自決権や土地及び資源に対する権利の不在が指摘され、さらには先住民族アイヌに関する表象に潜む植民者側からの見方であるコロニアリズムの課題等もあらわになっている現状を直視し、アイヌ先住民族について学校教育でどのように取り上げることができるかといった授業づくりについて論考していきたい。

石原真衣（2021：1-15）は、アイヌ民族博物館が白老に開設され、認められ、憧れられ、文化のマーケット化が進む今を「アイヌにとっての光の時代」と位置付けつつ、光と不可分な現象である闇（≒「忘却された〈痛み〉」）、「その両者を知り、考え、議論につなげることでしか、次の未来を築くことはできない」とする。併せて石原は、アイヌや沖縄に関して、日本の植民地主義が現在形で進行していると述べ、問われているのは、植民地主義を自ら行使しながら忘却する「マジョリティ」側の認識の所在であると述べている（2025:90-94）。また、2019年に「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（以下、「アイヌ新法」）が成立したが、アイヌ新法については、アイヌが先住民族であることを明記してはいるものの、「『先住民族の権利に関する国際連合宣言』（以下、「国連宣言」）に規定される自決権や土地及び資源に対する権利等の集団の権利を何も保障していない」との小坂田裕子（2023:37-41）の指摘がある。

これまでアイヌ民族に係る多文化共生社会に向けた論考は、多数報告されている。特に社会科を中心に人権教育、歴史教育、文化学習の中で論じられてきた。近年では社会科という教科にとらわれずに太田満（2012:16-26）が、また広く先住民族についての学びについては中山京子（2012）をはじめとした実践家、研究者が、豊かな実践・研究を積み上げてきている。しかしながら、何れも当事者より発せられた声を起点とはしていない。当事者により植民地主義を自ら行使しながら忘却する「マジョリティ」側の認識の所在が問われ、今なお先住民族としての権利が認められず<sup>1</sup>、さらには表象に潜むコロニアリズムの問題等も指摘される状況において、先住民族アイヌの「忘却された〈痛み〉」・

権利・表象に関する授業づくりが求められるのではないか。

また、近年ダイナミックな人の移動の中で、多様な思考と生き方が示されていることを忘れてはならない。そこで、本稿では、様々な形態を取りうる人の移動が示す多様な思考と生き方に向き合いながら、先住民族アイヌの「忘却された〈痛み〉」・権利・表象に関する授業づくりについて論考する。

## 2. 前提としてのコロニアリズムとアイヌ先住民族の歴史

知里幸恵<sup>2</sup>の『アイヌ神謡集』にある言葉「その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました」からも伝わるように、アイヌ民族は「美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた幸福な民族」であった。しかしその後、アイヌ民族は苦難の歴史の中に位置づけられていく。

瀧澤正（2020：44）の「明治維新政府がアイヌとアイヌ文化を『未開』とみなし、『同化政策』を進めたことは植民地支配と本質を同じくする」との指摘を踏まえ、ここでは、15世紀以降のアイヌ民族の苦難の歴史を、コロニアリズムの視角を基盤としつつ示していく。

「コシャマインの戦い（1456）」「シャクシャインの戦いとクナシリ・メナシの戦い（1669/1789）」など、アイヌ先住民族にとって「シャモ」への不信感が募る出来事が繰り返し起こる。1855年、箱館への外国船の寄港を認めた幕府は、アイヌの人たちが日本に帰属すること、そしてその居住地が日本領であることをロシアに主張するために、交易や保護をとおしてアイヌの人たちを懐柔し、さらに松前藩が禁じていた笠、蓑、草履の着用を解禁するとともに、髪形、着衣、名前なども本州風に改めることを強要し、耳飾り、入れずみ、クマの霊送りなどアイヌの人たちの古来の風俗、習慣を禁じようとした。ロシアの南下に対する警戒とともに同化政策が実施されたと捉えることができよう。1899年に作られた「北海道旧土人保護法」による教育の重要な特徴が、和人児童との別学を原則とし、教育内容にも格差を設けていたことも忘れてはならない。瀧澤が指摘した、「未開」とみなし、「同化政策」が推し進められた経過が理解できよう。

中山（2012:28）は、ジュリアン・バージャーを引用しながら、「先住民という概念そのものが、住人たちを先祖伝来の土地から追い出し、人為的に引かれた国境線によって住人を無力な人々へと貶める植民地化という行為によって生まれるものであること」と、「先住民」という概念が含意する課題について指摘している。この指摘は、「未開」とみなし、「同化政策」が推し進められた経過と併せ、心に留め置くべきであろう。

このような「先住民」と「開拓民」の問題は、近代産業革命以降の人の移動とともに世界の至る所で発生した。アメリカの先住民は開拓民の流入によって殺戮と移動を余儀なくされ、土地も社会も辺境へと押しやられた。アイヌも開拓民の流入によって土地を追われ、彼らの価値観、システムの導入によって、差別の対象となり「土人」となった。「入植者」「開拓者」「土人」といった言葉が使用されるにつれて、文化的・民族的差異が認知されるようになる。マーク・ウインチェスター（2013:143-144）は「差異が共約可能（*commensurable*）なものとして認識できる空間それ自体が、植民地である」とし、重要なのは、「差異の蓄積過程であった」と指摘している。

アイヌ民族の歴史から学ぶべきは、だれが「先住民」を生み出し、さらに「先住民」の生存維持経済を解体し、「差異を蓄積」してきたのかという事実認識と自覚なのではないだろうか。

### 3. 「忘却された〈痛み〉と先住民族アイヌの権利

#### (1) 「忘却された〈痛み〉」

石原 (2021:1-15) は、今を「アイヌにとっての光の時代」と位置付けつつ、光と不可分な現象である闇 (=「忘却された〈痛み〉」) を忘れずに「その両者を知り、考え、議論につなげることでしか、次の未来を築くことはできない」と述べていた。では、石原の言う闇 (=「忘却された〈痛み〉」) とは何であろうか。石原は 4 つあると述べている。「『サイレントアイヌ』の物語」「アイヌの遺骨問題」「自死」「アイヌに対する排外主義」である。石原は「サイレントアイヌ」とは、数世代にわたり歴史や物語を継承できない状況のなかで、痛む身体とともに、隠ぺいや、言葉の不在、第三項の排除<sup>3</sup>による沈黙を生きる人間である」(2025:93) とする。

「アイヌの遺骨問題」は、1865 年からアマチュアの考古学者であった政府のお雇い外国人たちによって、そして 1888 年からは東京帝国大学教授の小金井良精によって盗掘がなされたことから始まる。その後も複数の研究機関により、盗掘が行われた。平取アイヌ遺骨を考える会協同代表の木村二三夫 (2021:39) は、「先人たちのことを思うと、想像力のない学者たちに腹が立ちます。旧帝国大学の学者たちは、アイヌの人権を蔑ろにして、アイヌ遺骨を盗掘し、違法な手段で持ち去った。アイヌの尊厳を踏みにじる行為を、これからも続けようとしている。先人の遺骨、尊厳、人権を盗まれたアイヌたちが、取り戻すためにエネルギーを使っている。このような状況が起きているのは、世界でも日本だけではないだろうか」と述べている。「自死」について石原 (2021:13) は、それについての統計は存在しないものの「アイヌであること」によって生きづらかった過去や、世代間継承される貧困や悲しみが少なくないアイヌに自死という運命を招いたとする。

「アイヌに対する排外主義」については、新井かおり (2021:93) が「私が物心のついた 1980 年代初頭まで、アイヌがいずれ絶滅し同化するというナラティブは、支配的な社会通念であり強い力を持っていた。背景には『アイヌの異質性は野蛮で未開であるゆえであり、いずれ文明人である日本人に同化し、アイヌは滅びゆく』という偏見がある」と述べている。新井自身、この「滅びゆくアイヌ」というナラティブに心をむしばまれて、中学生の頃「私の孫の代くらいにはアイヌという言葉がなくなっているといいな」と「願いさえした」(2021:90) と語っている。

これら「忘却された〈痛み〉」の忘却の主体は誰なのか。石原 (2025:90-94) は「他国の暴力の是正に忙しかった日本の知識人は、自分の国で何が起こってきたのかを知ることすらなく、日本にずっと存在し続けてきた被植民者であり人文学者でもある私たちの存在を無視し、その存在を『殺して』いる」と述べ、「植民地主義を自ら行使しながら忘却する『マジョリティ』の側の認識の所在」について鋭く問うている。この石原の問いは、日本の植民地主義が(決して過去のものではなく)現在進行形であること、植民地主義を進行している主体である「マジョリティ(知識人といわれる人々も含め)」が、それを認識していないこと、そして植民地主義の責任を引き受けずに済ませてしまっていることへの痛烈な批判と捉えられよう。だとするならば、先ずすべきことは、マジョリティ自身が過去の歴史に向き合い、今も植民地主義が続いていること(加害性)を認識し、そしてその過程を通して「忘却してきた」アイヌの〈痛み〉を知り、考え、議論につなげることであろう。

#### (2) 先住民族アイヌの権利 — 「国連先住民族権利宣言」とアイヌ新法 —

国連総会は、2007 年 9 月に「先住民族の権利に関する国際連合宣言」(以下、「国連先住民族権利宣言」) を採択した。採択当時、日本政府はアイヌ民族を先住民族と認めてはいなかった。しかし 2019 年に成立したアイヌ新法では、初めてアイヌ民族が先住民族と明記された。したがってアイヌ

新法成立以降、アイヌ民族の権利に関しては「国連先住民族権利宣言」に沿った政策がなされることが期待されよう。

以下、「国連先住民族権利宣言」の概要を権利の視点からおさえ、併せてアイヌ新法におけるアイヌ民族の権利に関わる箇所を示す。さらにマイノリティの権利に関わる学説を踏まえ教育に期待される役割について論じる。

#### ① 国連先住民族権利宣言における先住民族の権利に関わる記述

この宣言では、前文二四段落、本文四六条にわたって先住民族が享受できる権利が網羅されている。以下に、「前文」を一部抜粋して掲出する<sup>4</sup>。

先住民族は、とりわけ、彼／女らの植民地化と彼／女らの土地、領域および資源の奪取の結果、歴史的な不正義によって苦しみ、したがって特に、彼／女ら自身のニーズ（必要性）と利益に従った発展に対する彼／女らの権利を彼／女らが行使することを妨げられてきたことを懸念し、先住民族の政治的、経済的および社会的構造と、彼／女らの文化、精神的伝統、歴史および哲学に由来する彼／女らの生得の権利、特に土地、領域および資源に対する彼／女らの権利を尊重し促進させる緊急の必要性を認識し、－中略－以下の、先住民族の権利に関する国際連合宣言を、パートナーシップと相互尊重の精神の下で、達成を目指すべき基準として厳粛に宣言する。（下線、筆者）

この前文からは、先住民族が植民地化、資源の奪取、歴史的な不正義によって苦しめられてきた歴史的事実を認め、生得の権利、特に土地、領域および資源に対する権利を尊重しようとする強い姿勢が伝わってくる。

#### ② アイヌ新法における先住民族の権利に関わる記述

アイヌ新法は、「アイヌの人々が民族としての誇りを持って生活することができ、及びその誇りが尊重される社会の実現を図り、もって全ての国民が相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資すること」を目的としている。しかしながら、例えば「第17条漁業法及び水産資源保護法による許可についての配慮」において「許可が必要とされる場合において、当該許可を求められたときは、当該内水面さけ採捕事業が円滑に実施されるよう適切な配慮をするものとする」との文言は認められるものの、直接的に先住権について規定する条文は存在しない。アイヌ施策推進地域計画の作成に際して、事業を実施する者の意見を聞くことが義務付けられる（第10条第3項）等の条文はあるが、権利を規定したものとは言えないであろう。

このような状況の中、北海道ではサケと生きる暮らしを求めて、先住権を認めるよう裁判も起こされている。2024年4月に出された司法判断（札幌地裁）では、「サケをとる権利は数百年以上前からのアイヌの伝統や慣習によって確立された先住権で、国際的にも固有の権利とされている」との、アイヌ民族団体の請求が退けられた。海外との単純な比較は控えるべきであろうが、守谷賢輔（2005:702 - 704）によると、カナダなどでは、先住民族の狩猟や漁業に関する権利を一部認めている。

ガート・ビースタ（2021:142）は、民主化について、ランシエールの言葉を借りながら、「彼ら」を「私たち」の民主的な秩序の中に連れてくることではないとし、民主的な包摂を、その秩序の変容を必然的に伴うプロセスとして理解すべきとする。つまり、「漁業権を持たずに川でサケ漁を行うことは水産資源保護法などで禁じられている」という『「私たち」の秩序』の中に連れてくる（『私た

ち』の秩序」に従わせようとする)ことは、民主的な包摂とは言えないのである。アイヌ新法に明記されている、「アイヌの人々が民族としての誇りを持って生活することができ、及びその誇りが尊重される社会の実現」を目指すうえでも、「先住民族の権利」に関しては、「『私たち』の秩序」(≒現行法)の変容を伴うプロセスまでも視野にいった「民主的な包摂」について考える必要があるのではないか。

### ③ アイヌ先住民族にかかわる処遇を誰が決めるのか、そして教育への期待

北海道における「近代的土地所有制」の実施は、「美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた幸福な民族」に「土地権の喪失」をもたらした。国土交通省は、「この時代の土地制度の改革は我が国の経済社会の発展の基礎を築いたものといえる。また、地租改正のために、土地の調査、所有者の確定、所在地、地価の決定、地券の交付、地図・台帳の作成といった地租改正事業を行ったが、この成果は、今日の土地に関する情報の基礎となった」<sup>5</sup>と説明するが、アイヌ先住民族からの視点の弱さが指摘できよう。漁業権についても明治 16 年には十勝川の下流では漁ができなくなり、暮らしを支える大切な魚として「カムイチェブ=神の魚」と呼ばれたサケ漁はできなくなった。

マイノリティの憲法上の権利について論じている樋口(1999:94-95)は、「マイノリティに属する者は『国』すなわち『人民』のなかで一定の権利を保障されていますが、その『人民』が、『自決の権利』を持ち、いかにすれば国内でマイノリティにどんな処遇を与えるかを決定している」と述べ、マイノリティと人民との間の潜在的な対立について指摘している。そして、マイノリティの権利の保障のために推奨されうる憲法上の手段選択の論点の一つとして、義務の特別免除(教育や兵役や納税)および積極的差別是正措置を提示している。つまり、大部分が多数派で構成されている「人民」がマイノリティに関わる処遇を決定する以上、制度上の是正措置が必要だと論じているのである。一見公正に見える手続きを通して、アイヌ先住民族の処遇が劣位に置かれてきた構造が理解できるだろう。

では、教育の場でできることは何か。教育の場では、アイヌ民族の歴史を通して、だれが「先住民」を生み出し、さらに生存維持経済を解体し、「差異を蓄積」してきたのかという事実認識と自覚を促すことができる。そして、マイノリティを含め、すべての人にとっての適正な処遇を決定し得る「人民」を育てることができる。ガート・ピースタ(2021:142)は、民主化とは「もはや既存の秩序から排除された当事者を包摂するプロセス」ではないと述べる。そして、秩序を変容させることだと指摘する。

つまり、教育の場は、新しい秩序を作り出すことにこそ、自決の権利を行使できる「人民」が育つように、必要な気づきを促す場となる責任があるのではないか。

## 4. 人の移動が示す多様な思考と生き方

### (1) 移動・移住の現在

アイヌの人々は今でもその多くが北海道に居住しているといわれているが、一方で、生活基盤を北海道外に移したアイヌの人々も少なくない。北海道で差別を経験したアイヌが子孫にアイヌであることを伝えず、北海道外に拠点を移しそのまま世代が進んだ例もある。アイヌにルーツを持つことを自覚していても、特に公にすることをせず、また公共調査に協力をしない選択をした人々もいる。

2010 年から 2011 年にかけてアイヌ政策推進会議「北海道外アイヌの生活実態調査」作業部会によって「明治以降、北海道から北海道外に転居したアイヌの人々、または、その子孫」を対象に「北海道外アイヌの生活実態調査」が行われた。この調査は 241 世帯 318 名が調査対象となり、回収数

は、153世帯210名であった。その結果、「北海道内及び道外のアイヌの人々の生活実態は基本的に近似していること、そして全国状況と比較すると多くの面でなお格差が存在していることが明らかになった」となった。しかし、この調査における最も大きな課題は、アイヌの人々から調査への協力を得ることに難渋した点であったという。一方で、殆どのアイヌが今なお格差に苦しんでいるという見方は正確とは言えないだろう。アイヌであることを自覚せず、または自覚していても公にせず、調査対象にならなかった人々が、「格差」に直面しているとは限らない。

現代の若者の一部には、自らがアイヌにルーツを持つことに誇りを持ち、積極的にメディアで発信する事例もある。関根摩耶氏は北海道平取町二風谷出身でアイヌにルーツを持ち、SNSや講演会などを通してアイヌ文化の普及と伝承に取り組んでいる。大学在籍中は神奈川と平取町を移動する生活をした。関根氏は、「私たちのことを『アイヌ』と括ることによって、もうそこから私たちは他の人たちとは異なる存在に区別されている気がする。結局それがアイヌだけでなく他の多様な文化や人を区別、排除することにつながると思う」「いろいろな価値観、いろいろな人を受け入れるのが当たり前になるような社会になれば素敵なのではないかと考え、そのきっかけにアイヌが成り得るのではないかと思いながら発信を続けている」(成蹊大学 News&Topics 2021) というメッセージを示している。

1976年、阿寒町生まれの藤戸ひろ子氏は大阪で生活したのち、北海道陸別町に移住している。その経緯については、「大阪で中学に通う長男が学校に行けなくなり、大好きなお爺ちゃんの近くに住むことを希望、陸別町に移住。父は木彫作家の藤戸幸雄さん。小さい頃、アイヌのお爺ちゃん達の傍らでアイヌ文化に接し、手仕事などを受け継ぐ。大阪で立ち上げたミナミナの会に、毎月北海道の陸別町から通い続ける」(<https://mv.stv.jp/contents/5819> より) と公開している。ミナミナとはアイヌ語で互いに笑い合う、微笑み合うという意味で、2007年にミナミナの会を創設し、2022年にミナミナ工房に改名。現在、関西6会場、北海道2会場、東京1会場でアイヌの手仕事を教える教室を定期開催している。藤戸ひろ子氏は、関西在住のアイヌについて下記のように述べる。

「18年の中で嬉しい出来事も沢山ある中で色々な出会いがありました。その出会ってきた中で関西在住のアイヌを隠されてきた方達が今もいます。誰にも相談することができず、家族やパートナーにさえもアイヌである事を言えずにおられる方たちがいます。その中の1人の方から少し前にご相談がしたいと連絡をうけ、お話をしてきました。」(<https://minaminakoubou.jimdosite.com> より)

藤戸ひろ子氏は、北海道と大阪に拠点を置きながら、関西のアイヌの拠り所ともなっている。北海道と大阪を移動し続ける活動や考えについては、『先住民族アイヌを学ぶ 藤戸ひろ子さんに聞いてみた』(日本機関紙出版センター、2022) に詳しい。

1983年帯広生まれの酒井美奈氏は2001年に大学に入学し、国連「先住民作業部会」でスピーチをした経験を持ち、2006年に関東在住の若者による「アイヌレブルズ」を結成し、音楽とダンスのパフォーマンスを展開した(2010年解散)。高校生の頃は自分の容姿にコンプレックスがあり、長い前髪で顔を隠し、高校の授業でアイヌに触れることが予測される日には学校を休んだという。レブルズとは英語で「反逆者」を意味し、アイヌをカッコよく、楽しく表現したいという思いを込めた。全国の人権団体や行政から講演の依頼に求められるままに差別の経験を話し、舞踊や楽器演奏を披露した。しかし、次第にそんな日々には焦りを感じるようになったという。「『アイヌ』や『差別』という部分ばかりが目立っていて、このままだと自分は活動家になってしまうと思った。一人の表現者として認められるようになりたかった」(朝日新聞 Globe+ より) という。2010年、酒井氏は講演活動を断り、アイヌレブルズを解散した。現在は「イメルア」というユニットで国内外で表現活動をしている。

父が北海道出身のアイヌ民族で20代の頃から沖縄に暮らす玉城美優亀氏は、1982年に沖縄出身の男性との結婚を機に県内へ移住し、息子の寿明氏が生まれた。玉城氏は「今も出自を隠す親戚も

いる。だけど、小さい頃から見えてきたアイヌの歌や踊りなどの文化が好きで誇りを持っている。この素晴らしい文化を失いたくない」(琉球新報 2023)としている。親子で日本の周縁で生きるマイノリティーのアイヌ民族と沖縄の人々の交流促進を模索する。糸満市真栄平にある沖縄戦で亡くなったアイヌ民族を含む兵士や住民の遺骨が納められた「南北之塔」を通じた双方の絆を強める活動をしている。寿明氏は「アイヌ民族とウチナンチュの血が流れている。沖縄でアイヌ民族のために何かをやるのは自分に与えられた使命だと感じている」と話した。

以上複数の当事者の言葉からは、様々な場所でルーツに誇りを持ち活動をしている様子が看取できよう。アイヌは北海道に住んでいる、北海道で土地や文化を守り生きている、差別と闘っていると言うステレオタイプを払拭すべきではないか。もちろんそうした人々もいるが、移動と移住が自由な現代のアイヌの人々は自由で、ダイナミックで、自己を表現することに向き合っている人々がいる。

国を超えた先住民交流も活発化している。2022年、ハワイ州から訪問団をアイヌ民族が迎え、2023年には北海道アイヌ協会が率いる舞踊チームがハワイを訪問し、ニュージーランドからマオリが訪問した時にも迎えている。世界の先住民族との交流によって立ち位置や潮流を確認する機会も増えている。

## (2) アイヌ×沖縄の文化交流と変容、保持

東京の中野北口広場で1994年から始まった「チャランケ祭」がある。チャランケ祭は、アイヌと沖縄人の東京での出会いがきっかけとなり、文化を通して人と人がふれあい、沖縄とアイヌの文化交流を深めることを目的に毎年秋に行われてきた。「チャランケ」は、話し合う行為を意味するアイヌの言葉で、沖縄には「チャーランケー」という「消してはいけない」といった意味の言葉がある。祭りは「カムイノミ」というアイヌの儀式からはじまり、「旗あげ」という沖縄の大綱曳きを元にした参加団体全員で取り組む儀式的のち、2日間、歌と踊りがくり広げられる。

2024年のチャランケ祭では、琉球系の出演者が多い印象であったが、エイサーグループも、アイヌグループ(二つのグループが歌と踊りを披露)も、若い人や、子どもたちを含み、伝承への意識を感じた。アイヌグループは、若者を札幌からも動員していた。アイヌグループには、いわゆるアイヌではない日本人や、外国人も含まれていた。また、アイヌの「色男の舞」では、琉球の方が途中から参加する展開となった(写真1参照)。最後の旗を降ろす儀式では、琉球のドラが鳴り響く中、琉球空手のようなパフォーマンスだけでなく、アイヌの弓の踊りが披露されていて、互いの文化を尊重する空気のようなものが感じられた。このように東京ではアイヌと琉球の交流が実践的に継続されている。

2024年4月21日、沖縄県立芸術大学において「二風谷・アイヌ×沖縄県立芸術大学『あしびとういけー』プロジェクト」が開催された。北海道沙流郡平取町二風谷から「アイヌ古式舞踊」の継承に携わる若手6人を講師に迎え、二風谷で伝承されてきたアイヌ古式舞踊を体験し、北の大地で培われたアイヌの文化、歴史、人と自然との関わりを学ぶ機会として、同大学の呉屋淳子氏が企画した。「前半は二風谷のアイヌ古式舞踊「エムシリムセ」(剣の舞)、「チャビヤク」(アマツバメの踊り)ほか2曲を披露した後、参加者全員が踊りを体験。後半は同大学教員、学生、卒業生、琉球芸能の継承に関わる若手が歌三線と沖縄の踊りでリードし体験交流した。企画した呉屋氏は「会場の皆が歌や踊りで交流することで、より身近に感じ、ディスカッションでどんなことを考え、文化の継承に携



写真1 2024年10月6日  
チャランケ祭にて筆者撮影

わっているかも伺うことができた。汗をかき対話することで、身体を通じて互いの文化について『考える』機会を持てたのではないかと思う。北と南の芸能の交換を今後も継続していきたい」（北海道ニューズリンク 2024）と述べている。

社団法人北海道アイヌ協会の竹内渉氏は、沖縄の季刊市民雑誌『けーし風』（新沖縄フォーラム刊行会議発行）の「北の風・南の風」欄に15年にわたって寄稿してきた。竹内氏は1954年に埼玉の被差別部落に生まれ、大学時代にアイヌ民族問題に出会った。「アイヌの女性と結婚し、その間に四人の子どもを授かっており、非アイヌではあるが、アイヌの血を引いた子の父でもある。日本人（和人）ではあるが、被差別部落民というマイノリティの一員でもある」（竹内 2009:186）と自らを語り、「被差別部落出身で、アイヌ『社会』内部に暮らし、アイヌ・沖縄・被差別部落、そして反差別について少しでも感じていただけたら幸い」（竹内 2009:3）と、研究報告や書籍を示している。竹内氏は1977年からアイヌ問題に関わるようになり、1978年に心に誓ったことは、「同じ被差別者という立場でアイヌと接するのではなく、シャモとして、加差別者の一人として、アイヌと信頼関係を築いていく」（2009:205）ということであったという。

糸満市真栄平には、北からきた兵士、南からきた兵士、地元住民を供養する「南北の塔」がある。実数は不明であるが、ウタリ協会の調査で43人のアイヌ兵士が沖縄で戦死している。ウタリ協会は、1981年から概ね5年ごとに「南北の塔」前でアイヌの伝統作法でイチャルパ（供養祭）を行っており、地元の人々が準備から後片付けまで活動している。竹内氏はその様子を『北の風 南の風 一部落、アイヌ、沖縄、そして反差別-』（2009）に詳細に語っている。

竹内氏はアイヌ協会理事の秋辺日出男氏の考えを尊重している。秋辺氏は「アイヌは差別があってもなくてもアイヌである」とし、本州方面から北海道に来て研修会などが開かれると定番のように「アイヌ差別について学ぶ」ことがテーマになり、参加者はアイヌ民族を被差別集団としてのみ認識するようになることを指摘しているという。竹内氏（2009:222）によると、秋辺氏は「アイヌは泣くときもあれば、笑うときも、怒るときも、悲しむときもある。また新たな文化も日々創造している。差別だけを取り上げてアイヌ民族のことを考えないでほしい」と述べているという。

文化交流・変容が進む一方で、「保持」の側面もある。2024年9月7日平取町工房つとむにてアイヌの伝統工芸品である平取イタ（盆）の作家であり、大英博物館や国立民族学博物館に作品が所蔵されている、貝澤徹氏に話を伺った。貝澤氏は1958年、二風谷に生まれ、工芸家の父（貝澤勉）やその仲間の職人に囲まれて育った。曾祖父の貝澤ウトレントクは、明治時代に名工といわれた二人のうちの一人である。その曾祖父から引き継ぐ伝統を重視しながら、独自の感性と技術をとけ込ませ、独創的な作品作りに取り組んでいる。貝澤氏の作品であるフクロウが彫られたイタについて「アイヌ模様は自然の中から生まれるもので、水ながれ、アイウシと呼ばれる棘表現、神の目、蕾、魚の鱗と呼ばれる模様、アイヌ紋様は棘表現と曲線をいかに上手く出すか、なんです。この全体を合わせた顔がコタンコロカムイ、集落を守るカムイです。このシマフクロウです。僕のこだわりは、鱗の一つ一つが丸くなっているところです。（中略）僕の作品は大英博物館の日本コーナーに常設展示されていますよ。」と説明をしていただいた。

貝澤氏は、雑誌の取材でも次のように語っており、若い世代のアイヌ語の保持の様子が見て取れる。

「僕は自分がアイヌであることを、特別強調したくはないです。インタビューでアイヌの衣装を着るとかもしない。みなさんと同じように普通に暮らしているんだもの。わざとアイヌの衣装を着たら、本当じゃないでしょう。アイヌならアイヌ語が話せて、ユーカラを語れて、踊りもできて……、と思われているのはちょっと。『じゃあ、あなたは

日本の踊りを何か踊れるの?』と言いたくなりますよ。僕のおばあちゃんは明治の生まれだからアイヌ語は話せたけれど、家でも日本語を使っていました。アイヌ語を使うのは、お年寄り同士でおしゃべりするときくらい。親の世代は単語をいくらかわかっていただけです。すっかりアイヌ語を奪われたのは、僕たち世代。今はアイヌ語教室とかいろいろやっているから、若い子たちのほうがすごいですよ。」

(ダイワハウス プレミスクラブ「木彫家 貝澤徹『アイヌネノアンアイヌ』」より)

また、ウポポイでパフォーマンスを披露している方々からは、「白老のお婆さんが作ってくれたものを何年も着ていますよ。腰の刀は古いもので 50 年、60 年はたっています。この刀の音が悪い神様を追い払うんです。この刀で人は殺せないけれど、この錆が重要でこの錆びているので魔物を切り付けるとそこから再生できなくなるんです。刀の柄の部分を見ると誰が彫ったのか分かりますよ。」「踊りもそうだけど、着ているもののデザインは集落によって異なるんです。ここで踊っている人は皆自分に関わる由来のものを着ているので、それぞれ異なるんですよ。統一のユニフォームなどは要りません。自分が受け取ったものを着ているんですよ」といった話を聞いた<sup>6</sup>。

以上に紹介した人々の声は断片的であり、すべてのアイヌの人々を代弁するものではないが、文化交流や保持に努める人々の意識として、授業づくりへの視点となる。



写真 2 2024 年 9 月 7 日  
白老町ウポポイにて筆者撮影

### (3) 発展するツーリズムの中で

一般的に多くの観光客はステレオタイプに基づくイメージの先住民の姿を求め、満足する。国内外のホテルのディナーショーなどで見られる光景を、その例として挙げるができるだろう。そこにはコロナリズムが潜んでいる。20 世紀後半の「アイヌ観光」も同様で、「われわれ」とは異なる「アイヌ」を見てみようと言った感覚が罷り通り、北海道のホテルでアイヌの芸能ショーが行われていた時期もあった。しかし近年、ツーリズムのあり方が大きく変化し、より目的意識をもった交流型・体験型の観光などオルタナティブなツーリズムが普及しつつある。これまでアイヌが経験した過酷な偏見や差別の歴史、織物や彫刻などの工芸品などを主としてきたアイヌ関連の展示を継承しつつも、変わりつつあるツーリズムへの対応が模索されている。アイヌは「過去に生きた人々」ではなく、現在を生きる人々でもある。過去に閉じ込めない展示のあり方、ステレオタイプを助長しない表現が求められているのである。先住民への眼差しは敬意を含むものになりつつあり、学びを求める観光客が増えている中で、以下に述べるような北海道平取町における取り組みや北海道という空間から移動し当事者が主体的に「アイヌ文化」の見せ方に関与する事例もある。

平取町立二風谷アイヌ文化博物館では、木彫・刺繍体験を二風谷民芸組合の協力を得て実施、民族舞踊体験・ムックリ演奏体験を二風谷観光振興組合体験学習部会の協力を得て実施している。平取町アイヌ文化情報センターでも情報発信だけではなく、伝統工芸品の体験学習している。取町アイヌ文化振興公社は、毎年全国の大学生・大学院生を対象に、アイヌ文化を体験し、アイヌ文化や地域振興策を考える滞在型の「大地連携ワークショップ」を開催している。萱野茂二風谷アイヌ資料館周辺の施設も含めて、地域一体型の学びができる空間が広がっている。豊かな空間であるが交通の問題や近隣にレジャーの場がないこともあり、訪問者の多くは修学旅行などの教育目的であるようだ。

ウポポイは、年間来場者数 100 万人を目指すこととされたが、令和 4 年度の来場者数は約 37 万人

にとどまる。令和5年7月のアイヌ政策推進会議において、これまでにない思い切った取組や新たな誘客戦略の策定等について関係省庁へ指示された。イベントやメディアを通してのウポポイの宣伝を増やしている。「踊り」というパフォーマンスは目をひくため、主な宣伝のツールとなっている。結果的に、その踊りがある場や文脈を離れ、「踊り」が切り離されて各地のイベント会場などで披露されることもある。世界で広がっている先住民ツーリズム (Indigenous Tourism) とは、先住民の文化に焦点を当てた観光形態を表す。足立照也 (2016) によると、文化的ツーリズムとは、芸術作品や工芸品、食べ物や飲み物、言葉や祭りなどのさまざまな文化要素によって表される文化的に異なる人びとの生活を、旅行者がオーセンティックな環境下で実際に観て体験するツーリズムである。より多くの観光客が、自分とは異なる文化に浸り、その文化での習慣や伝統を体験できる有意義な経験を求めている。先住民ツーリズムは「原住民ツーリズム」「アボリジナル・ツーリズム」「エスニック・ツーリズム」などとも呼ばれる。またネイティブ (native)、トライバル (tribal) などの用語をつけて呼ばれることもある。

アイヌの人々や関係者が北海道という空間から移動して文化的バックグラウンドから切り取られた場でアイヌ文化を披露する。一方で観光客は北海道という空間にアイヌを学び感じに来て、それぞれの生活の場に戻る。ツーリズムによって「アイヌ文化」は動態となり、アイヌの北海道外への移住に伴う文化の移動とは異なる形で、各地に「アイヌ文化」が突如として現れ、消えるという事象が起こっている。例えば、ウポポイによって、2025年3月5日に東京・恵比寿で伝統芸能上演「イノミ」を含む特別公演が開催された。北海道外での「イノミ」の公演は、2023年から続いている。ウポポイによると「アイヌ民族の儀礼『イヨマンテ (熊の霊送りの儀礼)』を題材に、ストーリー性のある演出で伝統の歌と踊りを披露するほか、会場内では衣服や儀礼の道具などの展示やアイヌ語に触れることができるブースを展開するなど、アイヌ文化を体感できる特別な一日となります」 (<https://ainu-upopoy.jp/specialevent/inomi-ebisu-2025/>) とある。発展するツーリズムの中で、もはやアイヌ・アイヌ文化は「そこで見られる」ものではなく、「何を、どこでどう見せるか」という主体を伴うものになり、移動を伴うものにもなっている。観光客数が伸びることが良いことではなく、質の豊かさ、訪問者の学びの深さを、創出することの価値を求めたい。

## 5. 教材化に向けて

### (1) 先行研究の検討

「アイヌ民族の位置づけを中心に、多民族学習としての小学校の歴史カリキュラムを提言」した太田 (2012)、中学校の社会科教科書 (歴史的分野) を分析対象とし「(生徒が) アイヌの文化・社会に対する『未開』視を克服する相対的視点を獲得する叙述」について検討した瀧澤 (2020)、そして、先住民民族についての学びについての先駆的研究と位置付けられる中山 (2012) の論考から示唆を得ていきたい。

太田 (2012)<sup>7</sup> は、「多民族学習としての小学校歴史学習－アイヌ史の位置づけを中心に－」において、アイヌ文化振興・研究推進機構 (公益財団法人 アイヌ民族文化財団) の「アイヌ民族も昔から日本列島に住んできた」ことがわかる歴史学習を小学校からするべきだという主張をくみ取り、アイヌ史を位置づけた小学校の歴史学習内容として、アイヌの北方交易とそこでの交易によってもたらされたモノが江戸時代の文化に与えた影響を考える学習、明治以降アイヌ社会がどのように変容したのかを考える学習、大正・昭和期に活躍したアイヌの人々についての学習、現代のアイヌ民族の活動についての学習の4つを求めている。

瀧澤 (2020:46) は、1899 年の「北海道旧土人保護法」による「土人学校」の開設以来、教育がアイヌ民族の培ってきた文化の深部にまで食い込んで、その消去に有効に機能したと述べる。そして、教育が、かつて担った「同化」の機能からどれだけ脱却し得ているかが問われているとし、学習指導要領、教科書におけるアイヌ民族の位置や、叙述について分析、検討を行っている。そして、中学校 2 年で履修されることになる〔歴史的分野〕の「1 目標」(1)において、「我が国」が 3 度現れるだけでなく、「愛されるべき対象」の位置を占めていること、さらにその結果「2 内容」の各歴史段階ごとの項目に、日本列島の北と南で形成された独自の地域＝蝦夷地と琉球が、学習内容として位置づけられていないと指摘している。一方で、過去数次にわたる「アイヌ」に関する教科書の記述は、学習指導要領と教科書検定の枠内に拘束されながらも、近年の北方史研究の進展、世界における「先住民」の権利主張の高まり、教科書編集者・執筆者の努力が反映され、前進してきたとも評価している。ただし、分析対象とした 3 社の教科書のすべてにおいて、「北海道旧土人保護法」に言及はしているものの、共通して「アイヌに土地（農地）を与え」と表現していることに疑問を呈し、北海道における「近代的土地所有制」の実施が、アイヌに「土地権の喪失」をもたらしたことに留意が必要と論じている。

中山 (2012) の研究は、文化人類学において展開されたポストコロニアル議論の成果を教育研究に活用しようとした従来にはない取り組みである。中山は、平山、スチュワート・葉月、菊地をはじめとする先行研究から、アイヌ学習において「アイヌ民族の文化と歴史分野にのみ偏って取り扱う傾向がみられ」ることや、授業で扱うことによってアイヌ文化は「滅びゆくもの」「古いもの＝不便なもの＝劣ったもの」というイメージを付与し、むしろ偏見を再構築する結果を招く危険性があるとも指摘している。併せて先住民に対する日本の子どもたちの認識には偏りがあるだけでなく、その見方そのものに問題性を指摘することができると述べている。そしてそれは、歴史上、支配、植民する側になってきたものの見方に大きく起因すると論じている。

以上、三者それぞれアプローチの方法は異なるが、アイヌ社会と文化が解体させられる過程に向き合い、歴史上、支配し植民してきた側からの見方を乗り越えようとしていると考えられる。

## (2) 授業づくりへの視点

以上、アイヌ民族の苦難の歴史、「忘却された〈痛み〉」、先住民族の権利に関わる世界の動向、移動・移住の現在、アイヌ×沖縄の文化交流と変容、保持、さらには発展するツーリズムの中での可能性について論じてきた。ここでは、これまで論じてきたことをもとに授業作りへの視点を示す。

授業づくりを考える時、まずアイヌが経験した過酷な歴史に関する学び、アイヌからの告発である「痛み」を知る必要があるだろう。従来の社会科教育などの中で扱われてきたことと重なる歴史事項・権利として以下のことが挙げられる。

- ・明治維新政府がアイヌとアイヌ文化を「未開」とみなし、「同化政策」を進めた。
- ・アイヌの北方交易とそこでもたらされたモノが江戸時代の文化に影響を与えた。
- ・松前藩は国後島や道東部のアイヌを制圧し、支配に組み込んだ。
- ・「平民」として戸籍を作成し国家に編入したが、「旧土人」と呼び、差別的扱いを続けた。
- ・アイヌが利用してきた土地や資源を取り上げて国の財産だとした。
- ・「北海道旧土人保護法」により、日本語や和人風の習慣による教育を行うことで、アイヌ民族を和人に同化させた。
- ・知里幸恵、遠星北斗、萱野茂らの理念、活動。

## 先住民族の権利

- ・教科書では「アイヌに土地（農地）を与え」と表現されているが、そもそも北海道における「近代土地所有制」の実施がアイヌに「土地権の喪失」をもたらしたのである。
- ・「先住民族の権利に関する国際連合宣言」（2007年）では、生得の権利、特に土地、領域および資源に対する権利を尊重しようとする強い姿勢が示されている。（先住民の権利に係る世界の動向）

そして、従来の学習には含まれてこなかったアイヌの側からの学びの視点の要素は以下である。

### 「忘却された〈痛み〉」

- ・サイレントアイヌ：痛む身体とともに、第三項の排除等により沈黙を生きること。
- ・遺骨返還のために闘わなければならない。
- ・「アイヌであること」により生き辛かった過去や世代間継承される貧困や悲しみが少なくない。アイヌに自死という運命を招いた。
- ・アイヌに対する排外主義：「アイヌは滅びゆく」という偏見など。

### 沈黙を生きる「サイレントアイヌ」

- ・長く差別にさらされてきたことにより人口統計調査が進まず日本国内での広がりが明確でない。
- ・アイヌであることを自覚せず、または自覚していても公にせず調査対象にならなかった人々が、「格差」に直面しているとは限らない。
- ・石原真衣「〈サイレントアイヌ〉とはなにかー植民地主義/レイシズムの忘却と痛む身体」の考え。

上記のアイヌの側からの突きつけられる「マジョリティ」への問題としての授業づくりの視点は以下である。

### 植民地主義を自ら行使しながら忘却する「マジョリティ」

- ・アイヌや沖縄に関して、日本の植民地主義は現在形である。
- ・他国の暴力の是正に忙しかった日本の知識人は、自分の国で何が起こってきたのかを知ることすらなかった。
- ・植民地主義の責任を引き受けずに済ませてしまっている。
- ・だれが先住民を生み出し、先住民と移民の生存維持経済を解体し、差異を蓄積してきたのかという事実認識。
- ・多数派がマイノリティに関わる処遇を決定する以上、先住民族の処遇が劣位に置かれることは、構造的課題といえる。
- ・先住民という概念は人為的に引かれた国境線によって住人を無力な人々へと貶める植民地化という行為によって生まれる。

### マイノリティとマジョリティ

- ・民主化とは「彼ら」を「私たち」の秩序の中に連れてくることではない。
- ・マイノリティと「人民」との間に潜在的な対立がある。
- ・先住民と開拓民、移民の問題は、人の移動とともに世界で発生した。
- ・移民の流入とともに土地も社会も辺境へと押しやられた。
- ・「移民」と「先住民」の共通経験としての生存維持経済の解体があった。

アイヌ先住民族について学ぶ場は学校教育だけではない。博物館などの社会教育の場や、近年学び

の場として大きな機能を持つようになってきたツーリズムがある。近年のツーリズムでは、一過性の娯楽を満足させつつ、知的な学びや交流を重視するようになってきている。アイヌ先住民族をめぐるツーリズムは、ウポポイができたことにより脚光を浴びたが、学習としてツーリズムと先住民族について学ぶべき、以下のような視点がある。

### ツーリズム

- ・20 世紀後半の「アイヌ観光」は、「われわれ」とは異なる「アイヌ」を見てみようと言った感覚が罷り通っていた時期もあったが、現在は先住民への眼差しは敬意を含むものになりつつあり、学びを求める観光客が増えている中で、知的な学びができる観光がある。
- ・「踊り」と言うパフォーマンスは目をひくため、主な宣伝のツールとなっている。しかし、その踊りがある場や文脈を離れ、「踊り」が切り離されて各地のイベント会場などで披露されることもある。
- ・発展するツーリズムの中で、もはやアイヌ・アイヌ文化は「そこで見られる」ものではなく、「何を、どこでどう見せるか」という主体を伴うものになり、移動を伴うものにもなっている。
- ・アイヌは「過去に生きた人々」ではなく、現在を生きる人々でもある。過去に閉じ込めない博物館展示のあり方、ステレオタイプを助長しないパフォーマンスや表現が求められている。

このようにアイヌの歴史、痛み、マイノリティとマジョリティの問題、ツーリズムの観点から授業づくりの視点を示した。しかし「アイヌ」と括ることによって、複層性、多様性がみえにくくなる。学習を通して、アイヌは北海道に住んでいる、北海道で土地や文化を守り生きている、差別と闘っていると言うステレオタイプを払拭すべきである。もちろんそうした人々もいるが、移動と移住が自由な現代のアイヌの人々は自由かつダイナミックで、自己を表現することに向き合っている人々がいることを理解することも重要である。以下に、前掲した人々について授業で触れるために短く整理する。

関根摩耶さん：平取町二風谷出身でアイヌにルーツを持ち、SNS や講演会などを通してアイヌ文化の普及と伝承に取り組んでいる。「私たちのことを『アイヌ』と括ることによって、もうそこから私たちは他の人たちとは異なる存在に区別されている。」

藤戸ひろ子さん：北海道と大阪に拠点を置きながら、関西のアイヌの拠り所ともなっている。北海道と大阪を移動しアイヌの手仕事を教える教室を定期開催する活動や考え。ミナミナの会を立ち上げてから 18 年目。

酒井美奈さん：国連先住民作業部会でスピーチをした経験を持つ。「『アイヌ』や『差別』という部分ばかりが注目されて、このままだと自分は活動家になってしまうと思った。一人の表現者として認められるようになりたかった」

玉城美優亀・寿明さん親子：マイノリティのアイヌ民族と沖縄の人々の交流促進を模索する。「アイヌ民族とウチナーンチュの血が流れている。沖縄でアイヌ民族のために何かをやるのは自分に与えられた使命」

竹内渉さん：埼玉の被差別部落出身でアイヌの女性と結婚し、非アイヌではあるがアイヌの血を引いた 4 人の子の父でもある。「同じ被差別者という立場でアイヌと接するのではなく、シャモとして、加差別者の一人として、アイヌと信頼関係を築いていく。」長く沖縄と交流を続けている。

秋辺日出男さん：差別だけを取り上げてアイヌ民族のことを考えないでほしい。

貝澤徹さん：アイヌの伝統工芸品の作家。自分がアイヌであることを、特別強調したくない。インタビューでアイヌの衣装を着るとかもしない。みなさんと同じように普通に暮らしている。

以下のような学習の流れをもとに授業をつくることを提案したい。もちろん、学習者の発達段階や科目、時間配分などによって可能なことと不可能なことがあることは想定できる。しかし、この「知識の整理→アイヌの痛みを知る→マジョリティに属する自分に気づく→アイヌへのまなざし→多様な生き方」というプロセスを通すことで、アイヌ先住民理解を総体的に深めることができるだろう。

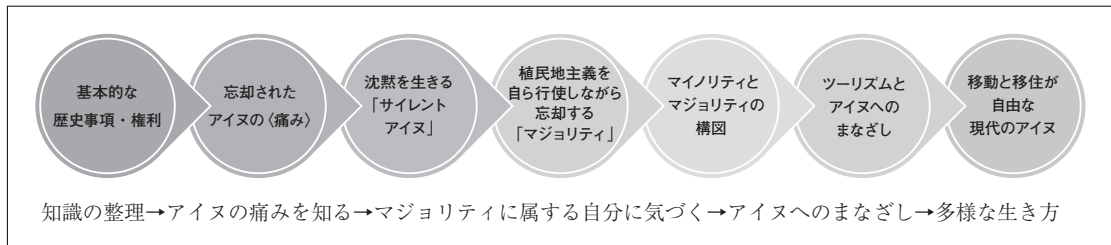


図1 アイヌ先住民に関する学習の流れ

日本の先住民アイヌについてこうした学びを経験することで、他国の先住民に出会ったり、世界の先住民について考える機会に遭遇したりした時、被植民者としての先住民という見方ではなく、彼ら/彼女らの痛みや沈黙に寄り添おうとし、またマジョリティとの関係性の中で彼らを捉え、ツーリズムの中でその妥当性を思考し、現代の彼ら/彼女らの生き方を理解して尊重しようとするだろう。アイヌ理解学習にとどまらず、国際理解教育としての先住民学習のモデルとなる。

## 6. まとめにかえて

本稿で示された、先住民アイヌの「忘却された〈痛み〉」・権利・表象に関する授業づくりを通して、「自決の権利を持つ人民」の変容が促されるかについては、今後検証が必要であるが、当事者より発せられた「忘却された〈痛み〉」を起点とし、論考を進めたことには、一定の意義が認められよう。石原に「先住民の問題を、文化とアイデンティティの問題に矮小化する構造は、植民地主義の責任と、レイシズムの是正という多数派に課せられる負担を免罪する装置である。－中略－誰が誰に行使した暴力によって、そうした状況が生まれたのかを可視化する契機はまったくない」(2025:93)と言わしめた現実から目を背けてはならない。マイノリティが被った暴力は誰が行使したのか、問われ続ける必要があるだろう。

一方で、痛みへの対応は不可欠ではあるものの、人の移動の視角を通して、多様な思考と生き方、そして文化表象のあり方が確認され、光と闇が、厳密には個人によって異なるという事実も見えてきた。「差別だけを取り上げてアイヌ民族のことを考えないでほしい」との声もまた、当事者から発せられたものである。光と痛みの両者を知り、考え、議論につなげることに加えて、ダイナミックな移動に伴う、「現在」の光、そして、理解の前提としての日本国家への編入と土地や資源のはく奪の歴史を学んだうえで、痛みを固定化することなく、感受しようとし続けることが求められるのではないか。

本稿で示された授業づくりの視点や学習のプロセスは、アイヌ民族の歴史を通して、だれが「先住民」を生み出し、さらに「先住民」の生存維持経済を解体し、「差異を蓄積」してきたのかという事実認識と自覚を促す可能性がある。そして、マイノリティを含め、すべての人にとっての適正な処遇を決定し得る「人民」を育てることに繋がるといえるだろう。

## 註

- 1 2024 年 4 月 18 日の判決で札幌地裁の中野琢郎裁判長は「アイヌの人々は遅くとも江戸時代以降、サケ漁をしており、サケ漁がアイヌの生活、伝統、文化などと密接に関わるものと認められる」と指摘し、そのうえで、「そうした歴史的背景を踏まえたとしても河川は公共のものでありサケは天然の水産資源であることを鑑みると特定の集団が排他的に漁業を営む権利を有すると認めるのは困難だ」などとして訴えを退けている。
- 2 1903 年に登別に生まれた知里は、アイヌで初めてアイヌの物語を文章化した『アイヌ神謡集』の著者として知られている。
- 3 今村仁司は、その著書『排除の構造』の中で、「私の命名にかかる『第三項排除』の社会的論理は、人類学の用語を借りて言えば、ブク・エミッセール効果（またはスケープゴート効果）とも言い換えられる」と述べている（p.119）。
- 4 日本弁護士連合会 HP に掲出されていた「先住民族の権利に関する国際連合宣言（仮訳）」より。  
[https://www.nichibenren.or.jp/library/ja/kokusai/humanrights\\_library/un/data/UND\\_RIP.pdf](https://www.nichibenren.or.jp/library/ja/kokusai/humanrights_library/un/data/UND_RIP.pdf)（2025 年 3 月 2 日取得）
- 5 国土交通省「明治期からの我が国における土地をめぐる状況の変化と土地政策の変遷」より。  
<https://www.mlit.go.jp/common/001237700.pdf> 2025 年 3 月 23 日取得。
- 6 聞き取りの内容は、写真 2 の方によるものである。
- 7 太田は、この論文の中で、アイヌ民族の歴史を、日本史に付加するのではなく日本列島の歴史を構成する一つとして捉え直すことを目指すと述べている。そして、マジョリティの歴史や文化をどのように相対化するのかという多民族学習の観点から、小学校の歴史学習のあり方を考えようとしており、アイヌ文化振興・研究推進機構の主張をくみ取りつつ実践を展開している。

## &lt;引用文献&gt;

- 足立照也 2016 「北西太平洋岸先住民社会における先住民ツーリズムに関する研究ノート－文化力の観光活用－」 阪南大学『阪南論集社会科学編』Vol. 51 No. 3、105-122。
- 新井かおり 2021 「百五十年、胸に去来するもの」 石原真衣編著『アイヌからみた北海道 150 年』北海道：北海道大学出版会、90、93。
- 石原真衣 2021 『アイヌからみた北海道 150 年』北海道：北海道大学出版会、1-15。
- 石原真衣 2025 「〈サイレントアイヌ〉とはなにか－植民地主義 / レイシズムの忘却と痛む身体」『世界』2025 年 3 月号、東京：岩波書店、90-94。
- 今村仁司 1985 『排除の構造』東京：青土社、119。
- 太田満 2012 「多民族学習としての小学校歴史学習－アイヌ史の位置づけを中心に－」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.117、16-26。
- 小坂田裕子 2023 「『先住民族の権利に関する国連宣言』とアイヌ施策推進法を巡る議論」国際人権法学会『国際人権』No.34、37-41。
- ガート・ピースタ 2021 『教育にこだわるということ－学校と社会をつなぎ直す』東京：東京大学出版会、142。

木村二三夫 2021「過去に目を閉じる者に、未来はない」石原真衣編著『アイヌからみた北海道 150年』北海道：北海道大学出版会、39。

公益財団法人アイヌ民族文化財団 2024『アイヌ民族～歴史と文化』

瀧澤正 2020「教科書に記述されたアイヌ民族」公益社団法人部落問題研究所『人権と部落問題』No.932、44。

竹内渉 2009『北の風 部落、アイヌ、沖縄。そして反差別』大阪：解放出版社、3、186、205、222。

知里幸恵 1978『アイヌ神謡集』東京：岩波書店。

中山京子 2012『先住民学習トポストコロニアル人類学』東京：お茶の水書房

樋口陽一 1999「マイノリティの憲法上の権利」『法律時報』Vol.71 No.12、東京：日本評論社、94-95。

藤戸ひろ子 2022『先住民アイヌを学ぶ 藤戸ひろ子さんに聞いてみた』大阪：日本機関紙出版センター。

マーク・ウィンチェスター 2013「移民と先住民のあいだ」伊豫谷登士翁編『移動という経験－日本における「移民」研究の課題－』東京：有信堂高文社、143-144。

守谷賢輔 2005「カナダにおける先住民の憲法上の権利－漁業権・土地権を素材に－」関西大学法学会『關西大學法學論集』55(3)、687-738。

#### <ネット関連資料>

朝日新聞 Globe+ (2018)「かっこよさを追求し、やがて出会う民族の誇り。深く、広く、新たな表現を探して」2018.10.10 公開 <https://globe.asahi.com/article/11547250> 2025年8月1日取得  
公益社団法人北海道アイヌ協会「アイヌの生活実態」<https://www.ainu-assn.or.jp/ainupeople/life.html>  
国土交通省「明治期からの我が国における土地をめぐる状況の変化と土地政策の変遷」より。  
<https://www.mlit.go.jp/common/001237700.pdf> 2025年3月23日取得

成蹊大学 News&Topics「アイヌ民族文化財団から現役大学生の講師をお招きし、対面ゼミ・慶應大学との合同ゼミを開催 2021年7月5日」[https://www.seikei.ac.jp/university/news\\_topics/2021/11110.html](https://www.seikei.ac.jp/university/news_topics/2021/11110.html)

ダイワハウス プレミストクラブ「木彫家 貝澤徹『アイヌネノアンアイヌ』」[https://www.daiwahouse.co.jp/mansion/premistclub/premist\\_salon/vol34\\_p2/](https://www.daiwahouse.co.jp/mansion/premistclub/premist_salon/vol34_p2/) 2025年8月1日取得

日本弁護士連合会 HP「先住民の権利に関する国際連合宣言（仮訳）」より。[https://www.nichibenren.or.jp/library/ja/kokusai/humanrights\\_library/un/data/UND\\_RIP.pdf](https://www.nichibenren.or.jp/library/ja/kokusai/humanrights_library/un/data/UND_RIP.pdf) 2025年3月2日取得

北海道ニュースリンク「互いの文化や歴史学ぶ 二風谷・アイヌ×沖縄県立芸術大 歌や踊り通じて交流【平取】 2024.5.21 日高報知新聞より」。<https://hokkaido-nl.jp/article/34005> 2025年8月1日取得

琉球新報「沖縄で願う「アイヌ」の未来 「差別、貧困の窮状知って」 ルーツを持つ親子の思い」 2023年3月30日記事 <https://ryukyushimpo.jp/news/entry-1686238.html> 2025年8月1日取得

# Towards a Class on the “Forgotten Pain”, Rights, and Representation of the Indigenous Ainu People: Diverse Ways of Thinking and Living as Shown by Human Migration

Ayako Fukuyama (Senshu University) • Kyoko Nakayama (Teikyo University)

This study examines the development of lessons on the “Forgotten Pain”, rights, and representation of the indigenous Ainu people, while addressing the diverse ways of thinking and living that human migration reveals.

This study shows some perspectives for developing lessons that enable children to learn about the indigenous Ainu people's history of suffering, their rights, and the colonialism surrounding their representation. At the same time, the study confirms that diverse ways of thinking, living, and cultural representation can be observed from the point of view of human migration.

The perspectives on lessons outlined in this study have the potential to promote awareness and recognition of the facts regarding those who identified the “indigenous Ainu people”, dismantled their subsistence economy, and discriminated against them throughout their history.

Students who take such lessons are expected to become “citizens” capable of determining appropriate treatment for all, including minorities.

Keywords: Human Migration, The Indigenous Ainu People, “Forgotten Pain”, Rights, Representation



## 〈論 文〉

第二次世界大戦後の日本人カナダ移住の一樣相  
—在日カナダ移民事務所開設をめぐる—

木野 淳子（東京外国語大学・兼任講師）

## 〈目次〉

はじめに

- I. 第二次大戦後の日本の海外移住政策概観 —「海外移住事業団」創設を中心に
- II. 日本人のカナダ移住促進に向けた日加の動き
- III. 在日カナダ移民事務所開設をめぐるメイラス移民官と日本側の協議
- IV. 在日カナダ移民事務所開設に向けて
  1. メイラス移民官の調査報告と移民省内の反応
  2. 移民事務所開設に向けた最終調整
- V. 在日カナダ移民事務所開設とマルシャン移民大臣訪日  
おわりに

キーワード：日系カナダ人、戦後日本人カナダ移住、日加関係、在日カナダ移民事務所、  
カナダ大使館査証事務所（査証部）

## はじめに

2027年に建国160周年を迎えるカナダは、2021年の統計によると、人口の23%に当たる約830万人が外国生まれすなわち移民で、時代に応じて規制の度合いは異なっても、建国当初から移民を受入れてきた<sup>1</sup>。現在、カナダは移民受入れのため世界中に移民事務所（査証事務所）を設置しているが、その歴史は建国とほぼ同じである。建国翌年の1868年に、カナダ連邦政府はイギリスやヨーロッパからの農業移民誘致のため、ロンドンと欧州大陸に移民事務所を開設し、その後必要に応じイギリス及び欧州各地に代理人を置いた。1899年、クリフォード・シフトン（Clifford Sifton, 1896.11.17 - 1905.2.28）内務相は農業移民誘致のため積極的な宣伝活動を行い、イギリス、欧州に加えアメリカ合衆国からの移民誘致のため、合衆国内での移民事務所や代理人ネットワークを拡大し、また中欧・東欧からの移民も誘致した<sup>2</sup>。つまり、移民事務所開設は、望ましい移民を誘致するための重要な策であった。例外は、1923年にアジア初の移民事務所として開設された当時イギリス領の香港での移民事務所である。香港移民事務所の目的は、同年制定された中国人移住を禁じた法の下、カナダ人移民官が査証を厳重実施して労働移民を絶対的に禁止することにあった<sup>3</sup>。同事務所は、第二次世界大戦中の中断を経て1949年に再開されたものの、カナダにとって英米や欧州からの移民が望ましい状況が長く続く中、なぜ日本に移民事務所が開設されたのか。

第二次大戦前のカナダにおいては、日本人を含むアジアからの移民は規制され、特に日系カナダ人は、第二次大戦中に強制収容・移動、財産没収、戦後のカナダ東部への移動ないし日本への「強制送還」と大変な困難を強いられた。さらに戦後の日本からのカナダ移住も事実上禁止されていた。この状況は、1952年の日加間の外交関係再開以降、両国の経済関係の活発化により変化してきた。1961年には、池田勇人、ジョン・ディーフェンバカー（John Diefenbaker, 1957.6.21 - 1963.4.22）両首

相の相互訪問で、限定的ながら日本人受入れが始まった。さらに、1962年の移民法施行規則改正により、カナダは移民の人種差別規定を撤廃した。一方で技術移民として期待された日本からの移民は増加しなかった。日加双方で日本からの移民受入れ策が講じられるようになるのは、1965年にカナダ市民権・移民省（Department of Citizenship and Immigration、以下移民省）の移民官が東京に派遣されてからであった<sup>4</sup>。

日本人のカナダ移住に関する研究は、多くが第二次大戦前に移住した日本人や日系カナダ人を対象としており、第二次大戦後については、日系カナダ人のロッキー山脈以東での再定住や、1970年代以降の「リドレス」運動について検討されているものの、戦後の日本人カナダ移住についての言及は限定的である<sup>5</sup>。また、「新移民」とも言われる戦後の日本人移民に関する研究では、彼らのカナダでの定住を中心に扱い、戦後の日本人カナダ移住再開をめぐる政策について論じたものはごく一部に過ぎない<sup>6</sup>。カナダでは、アジア系移民に関する数多くの著作があるパトリシア・ロイ（Patricia Roy）が、戦前から戦後に至るまでの日系カナダ人を扱った著書を出版している<sup>7</sup>。また、ロイは第二次大戦後の日本人のカナダ移住再開に向けた日加の動向を詳細に検討した論文で、在加日系カナダ人が、第二次大戦勃発により日本に残された、あるいは戦後日本に「強制送還」された親族の呼び寄せのため如何に尽力したかも明らかにしている<sup>8</sup>。しかし、日本での移民事務所開設をめぐる日加間の交渉については深く言及していない。そこで本稿では、1966年にアジアの独立国として初めて東京に開設された在日カナダ移民事務所について、前年に派遣された移民官の活動を軸に日加の交渉を検討し、日本での開設の理由と経緯を明らかにし、そこから見える事務所開設の意義を検討したい<sup>9</sup>。

## I . 第二次大戦後の日本の海外移住政策概観 —「海外移住事業団」創設を中心に

第二次大戦後、日本政府は狭い国土に過剰な人口を抱え、またそれを労働力として吸収する産業の復興がまだ進まないため、海外移住の推進を図り、移住者の大量送出をいわば国策として行った。これにより、ブラジルを中心にボリビア、パラグアイ等中南米諸国への農業を主体とする集団移住が行われ、1950年代半ばより、海外移住を推進するための組織も整備された。しかし、1957年にピークを迎えた移民数は、国内経済の安定と雇用回復によって、1962年には1万人を切った<sup>10</sup>。

1962年12月5日、総理府付属の諮問機関「海外移住審議会」は、移住及び移住政策に関して広範な分野にわたる答申を提出した。その中で、移住政策の理念として「国民に海外での創造的な活動の場を与え、その結果として相手国への開発協力と世界の福祉とに対する貢献」を掲げ、集団移民からの転換に加え、移住実務機関の合理化を答申した<sup>11</sup>。そこで、1963年7月15日、移住者の募集、送出、渡航費の貸し付け等を行った「財団法人日本海外協会連合会」と、唯一の政府系移民会社「日本海外移住振興株式会社」の業務を統合し、外務大臣の監督下に「海外移住事業団（Japan Emigration Service (JEMIS))」（以下、事業団）を設置した<sup>12</sup>。事業団は、海外移住に関する公的実務機関として、移住者の援助及び指導その他海外移住の進行に必要な業務を、国内外を通じて一貫して効率的に行うことを目的としていた。また、1964年7月1日には各都道府県の地方海外協会の主要業務を吸収し、全46都道府県に事業団地方事務所を設置した<sup>13</sup>。同年10月1日には、外務省から横浜、神戸の移住斡旋所を譲渡され、事業団移住センターとして傘下に収めた。さらに海外では、リオデジャネイロに中南米代表部を置き、サンパウロなど8か所の海外支部、及びサンフランシスコに駐在員事務所を置き、中央、地方、海外を一貫する事業団の組織作りが完了した<sup>14</sup>。

1961年以降になると、中南米への移住もそれまでの農業移住ではなく、技術移住の斡旋を行うようになり、技術者の継続的送出に努めた。しかし、中南米移住の最盛期は1954 - 61年で、1962年

以降は、中南米への移住は減少の一途をたどった。すなわち、事業団創設時には、すでに日本の移民政策は、南米への農業移民の大量送出から技術移民の送出に代りつつある時期で、中南米に替わる新たな送出先を模索していた。

## II. 日本人のカナダ移住促進に向けた日加の動き

1960年代に入ると、欧州の景気回復に伴い、欧州からカナダへの技術や技能を持った移民が激減した一方、カナダ経済の後退により、専門職や実業家などがカナダからアメリカへ移住した<sup>15</sup>。カナダの新聞各紙も、カナダ人知識人や技術者のアメリカ流出を憂慮した<sup>16</sup>。これに対し日本側は、日本人のカナダ移住再開に向け、「移民はカナダの国内問題」とするカナダ側を刺激しないよう慎重な態度を取りつつも、早くも1958年に、萩原徹在加日本大使がエレン・フェアクロー（Ellen Fairclough, 1958.5.12 - 1962.8.8）市民権・移民大臣に対し、人道的見地から在日日系カナダ人親族の呼び寄せへの配慮を求める一方で、日本側にはカナダに日本人移民を大量送出する考えはないと明言していた<sup>17</sup>。さらに1961年には、萩原は同大臣に、日本にはカナダが望む技術移民を出す余力があり、カナダ側が門戸を閉ざしていることが問題であると指摘した<sup>18</sup>。

そこでディーフェンバーカー進歩保守党政府は、技術移民受入れのため、1962年移民法施行規則で、一部を除いて人種差別規定を撤廃し、日本からの移民にも門戸を開いた<sup>19</sup>。1963年に政権を取ったレスター・ピアソン（Lester B. Pearson, 1963.4.22 - 1968.4.20）自由党政府は、受入れが限定的だった日本企業の要員を無制限で移民として認め、また、日本に「強制送還」された在日日系人のカナダへの帰国の待機時間の短縮にも努めた<sup>20</sup>。しかしながら、日本からの移民数はごくわずかであった<sup>21</sup>。カナダ側は、日本からの技術移民受入れのため、1964年1月には日本に移民官を常駐させるとの見解を日本側に示していた<sup>22</sup>。それを前進させたのが、1964年4月に訪日したルネ・トレンブレイ（トランブレ）（René Tremblay, 1964.2.3 - 1965.2.14）市民権・移民大臣と大平正芳外務大臣との会談であった。この会談で、日加双方でカナダへの日本人の専門職、技術職労働者の移住について、より具体的に検討することとなった<sup>23</sup>。

トレンブレイ・大平会談後、日本側はさっそくカナダ移民省の諸外国における移民事務所や海外駐在移民官について調査し、同年7月にはカナダ移住に関する当面の方針を立てた<sup>24</sup>。その方針では、カナダへの移住を「先進国移住」と位置づけ、これまでの中南米移住と異なる方針で行うべきこと、戦前から日系カナダ人が長年かけて築いてきた社会的地歩を乱さないこと、さらに海外移住事業団の協力を得て外務省が直轄することとした<sup>25</sup>。よって、すでにこの段階で事業団の協力がカナダ移住を進める上での前提となっていた。10月13日には、外務省は関係13省庁を集めて第25回海外移住連絡協議会を開催し、カナダ移住を進める方針を述べ賛同を得た。

事業団は、さっそくカナダ移住を進めるために動いた。1か月後の64年11月には、『カナダ国の概要と日系人』と題し、カナダ理解のための冊子を「未定稿ながらとりあえず発刊」した。その内容は、カナダの自然と住民、歴史、政治と外交、経済、社会と文化、各州の特徴、及び日系人の歩みまで多岐にわたり、またむすびには1962年の移民法施行規則改正の解説まで書かれている<sup>26</sup>。同年12月8 - 9日には、移住希望者への対応に備えるため、事業団は横浜移住センター（現 JICA 横浜）において地方事務所担当職員講習会を開催し、カナダ移住のための移住相談要領の説明を行った<sup>27</sup>。この講習会では、地方事務所担当職員に大量の資料を配布してその利用方法を説明し、移住相談員の養成に努めた。さらに翌65年1月、事業団はカナダへの移住希望者に応えるため、一般向けの案内書『カナダ移住の案内』を刊行した<sup>28</sup>。それだけでなく、5月にはカナダ労働省発行の『カナダの就業と

生活状況』を要約して仮訳を刊行、9月には移民省発行の『カナダ移住の専門職案内』の翻訳も刊行し、移住相談に応じる体制を整えた<sup>29</sup>。

カナダ移住に関する日加の動向は、次のように報道もされた。1964年10月8日付の『日本経済新聞』は、夕刊1面で「カナダに技術者移住」と題し、カナダ側からの移住呼びかけがあったこと、これまでの中南米への農業移住に対し、カナダへの移住は「先進国移住」であり、「民間外交の進行役として相手国の経済開発に貢献」するため、日本政府も積極的にカナダ移住を取り上げる方針を固めたと報じた。さらに、11月17日付『朝日新聞』の記事では、カナダ政府が日本人技術者を積極的に誘致するため、「来春、移民省東京事務所を設置する方針」であり、さらに事業団が12月中旬には移住相談に応じることが出来るようにすることも報じた<sup>30</sup>。事業団の様々な活動に加え、こうした報道でも、カナダ移住への関心は大きく高まった。

カナダ側も、64年8月14日、下院においてトレンブレイ大臣が、カナダが求める技術移民受入れのため世界的に宣伝活動をする 것과併せ、日本はカナダが望む技術移民を輩出できる国であるとして、日本からカナダへの移民を促進させると明言した。その上で、日本が戦前行ってきた集団移住ではなく、カナダ式の個人単位での移民受入れ策で行うこと、また日本も経済が活況で技術者を必要としている状況から、日本からの大量移民の心配はないと強調した<sup>31</sup>。

トレンブレイ発言に対し、同年8月25日付『グローブ・アンド・メール』紙の社説は、さらに踏み込んで論じた。日本がカナダ移住に無関心なのは、まずカナダに関する情報不足と、長年にわたる日本人・日系人排斥で、カナダが信頼されていないためと指摘した。さらに、日本は教育、科学、技術において最も進んだ国の一つであり、カナダとの経済関係も緊密になっているので、欧州諸国と同様に、移民募集のため東京に移民事務所を設けるべきと論じた。また、日系カナダ人がカナダの生活に順応し、様々な専門的職域で成功しているとして、日本人移民のカナダ社会への同化には問題がないとの展望を示した<sup>32</sup>。戦前日系人が集中して居住し、反日感情が強かったブリティッシュ・コロンビア（以下BC）州の世論は、すでに1961年には「日本人移民歓迎」に転じており、カナダ世論は、日系人のカナダ社会への順応ぶりから、技術を持つ日本人移民の受入れに積極的になっていた<sup>33</sup>。

1964年9月初めには、日加間で東京への移民官の派遣に同意しており、カナダ外務省と移民省の間でも、移民官の派遣及び将来的な移民事務所開設は「論理的ステップ」と認識していた<sup>34</sup>。さらに同外務省は、日本側が在日カナダ大使館への申請書提出前に適格な移住申請者を選択することに協力的な態度を示していることも移民省に伝えた<sup>35</sup>。加えて、12月にはカナダ外務省は同大使館宛に将来の移民事務所のため、東京での貸スペースの有無も照会していた<sup>36</sup>。しかし、その後のカナダ側の動きは鈍く、同年秋にピアソン首相が日本人移民受入れに対するBC州の反応に懸念を示したことや、翌年2月に市民権・移民大臣がジョン・ニコルソン（John Nicholson, 1965.2.15 - 1965.12.17）に交代するなど、様々な要素が重なって移民官派遣決定までさらに時間を要した<sup>37</sup>。ようやく1965年4月2日（オタワ時間）、ヴァイタス（ヴィタス）・メイラス（Vitas Meilus）を移民担当官（Immigration Attaché）として在日カナダ大使館に派遣することが日加同時に発表された<sup>38</sup>。

### Ⅲ. 在日カナダ移民事務所開設をめぐるメイラス移民官と日本側の協議

日本に派遣されたメイラスは、欧州大陸でのカナダ移民事務所本部であるケルン移民事務所の移民官を務め、経験豊富であった。メイラスの任務は、日本からの移民の可能性と在日カナダ移民事務所開設の必要性を調査することであった<sup>39</sup>。6月19日に東京に着任したメイラスは、まず在日カナダ大使館内の移住業務に関する調査を始め、同29日には、移民省在外業務部長ブノワ・ゴドブー（Benoit

Godbout) への報告で、移民関連の業務がカナダ大使館員の業務を圧迫していると指摘した。また、日本人移民はある程度数が見込めるが、大使館での現状の移住相談の手続きは不十分として、早期の移民事務所開設が必要と報告した<sup>40</sup>。また、大使館側も、近年の移民申請数の増加により大使館に大きな負担がかかっている現状を訴え、移民事務所の即時開設を強く望んだ<sup>41</sup>。

メイラスは、着任 5 日後には日本外務省を表敬訪問し、翌週には同外務省との協議も始めた。その際、一貫して問題となったのは、設立されたばかりの海外移住事業団の移住業務への関与をめぐってであった。前述したとおり、日本側はこの事業団を通してカナダへの「先進国移住」を進めようとしていた。事業団は、メイラス派遣決定前の 1964 年 12 月にカナダ大使館に接触し、日本人移住希望者の面接やカナダ移住申請などにおいて援助が可能であると申し出ている。さらに、II で触れた、同年 12 月 8 - 9 日に事業団が開催した地方事務所担当職員向けの講習会の全日程に、カナダ大使館職員も出席していた。この大使館職員は、講習会では事業団地方事務所担当職員に詳細な情報が提供されており、適格な移民の確保に役立つと上司に報告し、この報告はカナダ外務省にも伝えられた<sup>42</sup>。カナダ外務省は、日本側がカナダ移住に事業団の関与を求めていることを認識してだけでなく、移民省にも日本側が移住前の移民選別に協力的である旨を伝えていた<sup>43</sup>。それを踏まえて、移民官メイラスはどのように日本側と交渉したのか、両者の協議の記録から見ていきたい。

1965 年 7 月 5 日、メイラスと外務省中南米・移住局大口信夫総務課長らとの初の協議では、さっそく事業団の関与が問題となった。カナダ移住の広報活動に関しては、メイラスは既存の機関である事業団やその地方事務所を通じて行うことを支持し、カナダ側の資料提供などの協力を申し出た。しかし、移住希望者の申請書の提出経路に関し、外務省が申請書の受付や合格通知などを事業団経由で行うことを提案すると、メイラスは、移住希望者は直接カナダ大使館ないし設立予定の移民事務所に申請することを求めた<sup>44</sup>。

7 月 13 日には、メイラスは、大口とともに事業団理事長の広岡謙二とも懇談した。その際に大口からは、技能の判定はカナダ側に委ねるが、人物判定に関して事業団地方事務所の支援を提案した。大口は、「我々としてはカナダにおける日系人の好評判を穢さないよう少しでも良質の移住者を送りたい」と述べるとともに、日本人の移住後のフォローのためにも地方事務所経由の申請書提出を再度提案した。メイラスは、彼個人としては日本側の事情は理解でき、また人物判定の点は非常に助かるが、他の国でも原則としてその国の機関を通じる申請のやり方は取らないと述べた<sup>45</sup>。

7 月 23 日、メイラスは、すべての申請書を事業団経由とすることは、カナダの「移住の自由 freedom of immigration」の原則に反するので認められないとの態度を堅持し、この要望は自分の立場を著しく困難にするのでこれ以上固執しないよう、大口に懇願した。他方、将来申請者数が増加した場合には、地方からの申請者の予備審査を地方事務所に依頼する可能性があること、また日本側が提案した人物の推薦については好感触を示した<sup>46</sup>。

7 月 30 日、大口はさらに踏み込んで、事業団は移住実務を一貫して行う目的で設立されたので、カナダ移住に関し事業団を除外するのは「事業団の prestige にもかかわり、一つの国内問題にもなりかねない」との日本側の事情に理解を求めた上で、申請書の提出先を申請者の自由として、カナダ大使館と事業団地方事務所のいずれの提出でも良いということにしてはどうかと提案した。メイラスはこの提案は受諾可能として、本国政府に具申すると述べた<sup>47</sup>。

こうして、両者の間では、事業団の協力に関する方向性が定まったかに見えたが、メイラスはこの件を移民省には直ちに報告しなかった。

## IV. 在日カナダ移民事務所開設に向けて

### 1. メイラス移民官の調査報告と移民省内の反応

メイラスは、着任して約8週間後の8月16日にゴドブー在外業務部長に詳細な調査報告書を提出し、日本側との協議内容を伝えるとともに、大使館への問い合わせや申請件数の増加はカナダ移住への関心の高まりを示しており、日本の現状の調査、移住希望者との面接などの結果から、在日カナダ移民事務所開設を推奨した。日本からの移民数については、2,000人の目標は通常の条件下では現実的だが、事務所を開設した初年度では、500 - 600人が妥当との日本側の見解を紹介した。また、メイラスは、日本側がカナダ移住への関与を望むのは、伝統的に日本政府主導で移住を行ってきたためと、中南米への移住が減少する中、設立されたばかりの事業団を維持するためと指摘した。さらに、日本側は、カナダ移住のための宣伝用資料や申請用紙の事業団への提供、事業団による申請者の事前相談の許可、地方事務所担当者によるカナダ側への申請者の人物紹介、その見返りに事業団東京本部に申請者全員の氏名と合否の氏名の提出を求めているとした。それは、個人からカナダ側への直接の申請は一切受け付けず、すべての申請は事業団経由でカナダ側に渡すことになるので、メイラスはこのような条件は一切受け入れられないとの移民省の方針を伝え、その後日本側が取り下げたと報告した<sup>48</sup>。

しかし、メイラスは、事業団の協力なしに日本での移住業務は成功できないとの考えを述べた。事業団による事前相談を通せば、カナダ側にとって受け入れ難い移住希望者の申請を思いとどまらせ、不要な事務作業を省くことができ、また彼等も直接「我々〔カナダ側〕に拒否されるという恥をかかずにすむ」と述べ、むしろ事業団経由での申請を支持した<sup>49</sup>。メイラスは、着任10日後には、面接に来た移住希望者のうち「英語力がまあまあなのは30%そこそこ、フランス語を話せるものはほとんどいない」と、日本人の語学力不足を指摘し、日本からの技術移民を得るには事業団の協力が不可欠と認識していた<sup>50</sup>。この調査報告書で、メイラスが7月30日の日本側が譲歩した大口との合意にあえて言及しなかったのは、可能ならば事業団経由での申請を認める方が、現実的に日本での移住業務を進めやすいと認識していたためと考えられる。

メイラスの調査報告を受け、翌8月17日、ゴドブーはR・カーリー (R. B. Curry) 移民次官補に、日本側のカナダ移住への関心も高く、また日本人はカナダが望む技術移民であると報告した。移住に関しては日本外務省の所管だが、公的実務機関である事業団が、主に移民事務所と対応する予定であり、その事業団の役割として、地方事務所経由の申請書の提出と仮承認、申請者の推薦、情報活動や相談などを挙げた。さらに、日本側が申請者の全情報、合・不合格者のリストと不合格理由の情報提供を望んでいるとも述べた<sup>51</sup>。その上でゴドブーは、スペインやポルトガルでは現地の移住団体経由の申請手続きを行っているとして、事業団の協力がある程度必要な日本で、同様の手続きを導入することを提案した<sup>52</sup>。これに対し、クロード・イスビスタ (Claude M. Isbister) 移民次官は、移民の質の低下につながりかねないとの懸念を表明した<sup>53</sup>。また、カーリーも、あくまでもカナダ側が申請者それぞれの入国可否を判断すべきとの態度を変えなかった<sup>54</sup>。

加えて、省内の政策企画部長ビーズリー (Beasley [first name 不明]) は、日本での移民事務所開設について、アジア地域では韓国やフィリピンを事実上無視する一方で、「大きな動きの可能性がほとんどない日本にこれほど労力を割いているのは、どこか不自然」と述べた<sup>55</sup>。さらにビーズリーは、日本側が望む事業団の関与に強く反対し、日本側が不適格な余剰人口をカナダに送り込む可能性を指摘した。また、日本からの移民数の予測 (年500人、将来的には2,000人) について、カナダ側の選考基準を満たす日本人が2万人申請してくる可能性を論じ、そうなった場合のカナダ世論や国内

への政治的影響が予想できるとして、1年以上前の内閣委員会で、日本からの移民受入れ拡大に対してピアソン首相が難色を示したことに言及し、日本での移民事務所開設への懸念を表明した<sup>56</sup>。

これに対しゴドブーは、現地の移住団体経由の手続きを取っているスペイン、ポルトガル、オランダで、各地元当局が移住希望者の格下げを招いているとの懸念は立証されておらず、また、日本側も大量移民に否定的なカナダ側の見解と立場を十分承知していると反論した<sup>57</sup>。

## 2. 移民事務所開設に向けた最終調整

移民事務所開設がなかなか決定されないため、日本側からカナダ側への疑念も生じてきた。そこでメイラスは、12月1日の大口との会談で、日本側の懸念の払拭に努めた。メイラスは、11月30日に東京に立ち寄ったニコルソン大臣が、カナダ政府の日本からの移民歓迎の態度に変わりはないと明言したこと、メイラス自身も早期の開設を望んでいることを改めて伝えた。それとともに、事業団のカナダ移住手続の関与について、申請書の提出は、事業団地方事務所経由でも、直接カナダ側でも良いとの柔軟性を持たせることへの了承を求めた。大口がこの件はすでに了承済みではと尋ねると、メイラスは本省への報告でこの点に触れなかったと打ち明けた。大口は、移住希望者の推薦状が日本側による事前選択になるとのカナダ側の懸念について質すと、メイラスは、推薦状はむしろ有益と答え<sup>58</sup>。日本の実情を十分理解していたメイラス自身は、移民省が事業団経由の申請を了承することが最も望ましいと考えていた。しかし、移民省内の反発に対応するため、省内での同意を得られうる大口との合意案を、改めてここで持ち出してきた。

大口との協議後、メイラスは直ちに、日本側がかなり軟化し、事業団への情報提供は申請者氏名とその可否のみで、不合格理由については撤回したとゴドブーに報告した。その上で、大口との協議で確認した以下の点を挙げた。すなわち、日本政府は日本でのカナダ側の業務を干渉する意図は全くなく、移住希望者の選択、相談、手続きの自由をカナダ側に与え、カナダ側の宣伝活動に全く反対しないこと<sup>59</sup>。日本側が熱望する事業団及び各都道府県地方事務所との密接な、しかし任意の協力とは、事業団による移民省作成の資料の配布、申請者の事前相談への支援やカナダ側が望む場合に人物紹介などを提供すること。また、移住希望者は直接カナダ側に申請しても、事業団地方事務所を通じて申請を出しても良いとの、大口と再確認した合意事項を伝えた。これらの条件を妥当としつつ、加えて、日本政府はカナダ側が集団移住に関心がないことを完全に理解していることも明言した。さらにメイラスは、アメリカの1965年移民法（国別割当制を廃止）制定を視野に、資格のある日本人移民を容易にカナダに呼び寄せられるとの仮定は正しくないとして、早期の事務所開設を進言した<sup>60</sup>。

カナダ外務省も、事務所開設の遅れが日加関係に悪影響を及ぼしかねないと早期開設を求めた<sup>61</sup>。移民省内でも、ニコルソン大臣に上記の条件での移民事務所開設が勧告された<sup>62</sup>。しかし、1965年12月18日の内閣改造により、新たにジャン・マルシャン（Jean Marchand, 1965.12.18 - 1966.9.30, 1966.10.1 - 1968.7.5）が市民権・移民大臣に就任したため、開設決定までさらに時間を要した<sup>63</sup>。

そこで、1966年1月に次官となったトム・ケント（Tom Kent）は、年明け早々、マルシャン宛の覚書で、これまでの経緯を説明するとともに、日本が高い教育水準を誇るアジアで最も工業化された国で、カナダが望む熟練労働者の供給源であるとして、日本での恒久的移民事務所の早急な開設を進言した。一方で、移民省が日本人の大規模な移住を促進するつもりがないことも明記した。また、事業団との協力関係については、過去1年半も日加双方で協議を重ね、満足いく形で解決したとしながらも、覚書の中では、「移住希望者は直接当方事務所に申請できる」とだけ述べ、事業団地方事務所経由の申請も可能であることには言及しなかった<sup>64</sup>。また、ケントは、ピアソン首相が1年前に移民官派遣に同意した書簡の写しも添付し、長期の遅れが日加関係に悪影響を及ぼしかねないとして、

決断が急務であると伝えた。移民事務所開設が度々先送りされることに、メディアから様々な批判も出たが、特に同年1月19日付の日系新聞『ニュー・カナディアン』紙は、「カナダが他の白人諸国で移住促進をしているのに比べ、日本を無視しているようだ」と批判した<sup>65</sup>。

そこで、1月28日付のマルシャン大臣からピアソン首相宛の覚書では、日本人移民はカナダが望む技能や資格を持っており、世界的に技術移民の受入れを目指すカナダの移民政策とも一致すると指摘した上で、日加間の協議を通して事業団との協力関係を十分検討し、移民選別に関してカナダ側の意向が日本側に受け入れられたとして、東京での移民事務所開設への同意を求めた<sup>66</sup>。2月4日、マルシャンは島津久大在加日本大使に、移民事務所の開設は間近で、自分が事務所開設を行いたいとも伝えた。さらに、現在移民法改正案を準備中なので、大使ともその件で話し合いたいとも告げ、ようやく事務所開設かと思われた<sup>67</sup>。しかし、マルシャンが日本での移民事務所開設を発表したのは、さらに1か月後の3月10日であった<sup>68</sup>。この発表で、マルシャンは、日本での事務所開設は拡大するカナダ経済が必要とする優秀な熟練労働者を広く世界に求めることを示すと述べた上で、「東京の担当者は海外移住事業団と緊密に協力する」と締めくくり、事業団の協力が明記された<sup>69</sup>。日加間協議の最大の問題であった事業団の関与は、日本側の思惑に近い形で、さらに言えばメイラスが希望した形で着地した。

## V. 在日カナダ移民事務所開設とマルシャン移民大臣訪日

メイラスは、日加親善と移住業務宣伝のため、マルシャン大臣が事務所開設に合わせて訪日することを望み、日本側も日本の状況の理解を深めてもらうためにそれを望んだ。しかし、10月に移民省を人的資源・移民省（Department of Manpower and Immigration）に改組するための準備や、1967年の移民法施行規則改正に向けての業務に忙殺されたためか、マルシャン訪日は当初予定の6月から9月に延期になった。そこで、マルシャンによる公式の移民事務所開設式に先立って、1966年6月20日、「カナダ大使館査証事務所 The Canadian Embassy Visa Office」は東京銀座で業務を開始した。日本外務省は、カナダ側が希望していた通常在外公館に与えられる特権と免責をこの「査証事務所」にも与えることとした<sup>70</sup>。また、事務所開設を記念し、有楽町交通会館ホールで11日間にわたって「カナダ移民展 Canadian Exhibition on Immigration」が開催された。カナダの経済生活や移民の歴史を表す80点の写真に加え、小麦や「エスキモーによる彫刻 carving by Eskimo [原文ママ]」のようなカナダの主要産物が展示され、初日には1,500人以上が入場し、関心の高さを示した<sup>71</sup>。

移民事務所の開設によって、カナダへの移住希望者の選考は同事務所が行うこととなり、それまでカナダ本国の審査を受けるため約6カ月を要した審査期間が大幅に短縮された。移民事務所では、移住相談、移住申請受付、審査、査証の発給などが行われ、カナダ移住手続き全般の効率化が計られた。その結果、移民事務所開設前後のカナダ移住者数を比較すると、開設前の1964年140人、1965年188人から、1966年には500人、1967年には858人とさらに増加した<sup>72</sup>。

マルシャン大臣は9月17日から21日に訪日し、19日には移民事務所の公式開設式、20日にはカナダ観光局の公式開設式に出席した。日本外務省がマルシャンを公式招待したのは、前任のニコルソンに比べ日本への関心が薄いので、「対日認識を深めることにより、カナダ移住の円滑な推進」を計り、さらに1962年移民法施行規則に残された呼び寄せ移民の差別解消のためであった<sup>73</sup>。9月19日のマルシャン大臣と椎名善太郎外務大臣の会談では、マルシャンは日加経済関係だけでなく移住においても相互協力することを念じ、対して椎名は、国際協力という立場に立ってカナダに役立つような移住者を送りたいと表明した<sup>74</sup>。

1966年10月5-6日にオタワで開催された第4回日加閣僚委員会では、日本側のたつての希望で、議題に「移民」の項目が盛り込まれた<sup>75</sup>。移民省としては、移民事務所の公式開設式も終わり、これを議題に入れることにやや躊躇していたが、日本側の意図は、移民事務所開設への感謝の意を表すこととわかり、共同コミュニケでは次のように述べられた。

「委員会は、本年東京に移民事務所が開設され、カナダへの移民の申し込み件数の増加を通じて日本国民一般が積極的の反応を示したことを歓迎した。両国代表団は自国政府が両国の相互の利益のために引きつづきこの計画の発展を助長することにつき意見の一致をみた<sup>76</sup>。」

## おわりに

カナダは、カナダが望む技術移民を日本から誘致するために、第二次大戦から約20年後の1966年に東京に在日カナダ移民事務所を開設した。特に大戦中及び戦後のカナダ自由党政府による強制収容・移動・送還などの厳しい日系カナダ人排斥を考えれば、カナダが移民受入れを世界的に広げたとのインパクトを、最も強く出せる国での開設であった。実際、一時マニラとの同時開設も検討された<sup>77</sup>。しかし、結果として東京で先に開設することになったのは、その方がカナダの移民政策が大きく転換したことを明白に打ち出せると考えたからであろう。1967年の移民法施行規則改正によるポイント制導入に先立って、その前年に東京で移民事務所が開設されたことは、それまでの白人優位の移民政策の終結に向けた大きな一歩であった。

日系カナダ人が当時のカナダ社会に受け入れられるようになっていたことも重要であった。戦後カナダに残ることを選んだ日系カナダ人が、移動した東部各地で主流のカナダ社会に同化するように生活してきたことが皮肉にも評価され、日系人はカナダ社会に溶け込みやすいとみなされることになったのである<sup>78</sup>。カナダでもまだ第二次大戦中の記憶が残っている中で、戦後もカナダに残った日系カナダ人のカナダ社会での不断の努力こそ、カナダ国内世論を日本人移民受入れの方向に変え、日本人カナダ移住の再開に大きな後押しになったと言えよう。

1960年代初めには、カナダ国内世論が日本人移民受け入れに傾いた一方、ディーフェンベーカーやピアソンが示したように日本人移民の大量流入への懸念を表す者もいた<sup>79</sup>。移民省内でも、移住業務に事業団を関与させたい日本側の思惑に対し、カナダ側が求めている集団移住につながり、ひいては移民の質の低下につながるとの警戒を生み、事業団関与への根強い反論があった。しかし、実際に日本に駐在し、日本側との協議を重ねていたメイラスや彼に近い部署は、早い段階で、事業団の協力なしにカナダにとって必要な日本人技術移民は得られないと認識していた。そこで、日本側との協議では移民省の意向を強く打ち出す一方、移民省内では事業団との協力関係の落としどころを探った。

日本の戦後の海外移住政策を大きく変えた、カナダやオーストラリアなどへの「先進国移住」は、その後高度経済成長により生活水準が向上し、また日本の労働人口が国内で吸収されたことで、関心は薄れていくことになる。しかし、戦後20年近くカナダへの日本人移住が進まない中、移民事務所開設がカナダ移住への道を開いたこともまた確かである。また、カナダにとって、事業団との協力の下で行う日本での移民誘致策は、ヨーロッパ諸国での活動とは異なるものだった。事業団は、1967年以降、横浜移住センターで英語やカナダ事情に関する35日間のオリエンテーションを行い、移住後のカナダ社会への適応を援助した<sup>80</sup>。さらに事業団は、国内での日本人カナダ移住への支援にとどまらず、移住後の日本人をフォローするため、トロントに海外移住事業団駐在員事務所の設置を試み、本来移住政策はカナダのみで行うことを前提とする移民省との軋轢も生んでいくこととなる<sup>81</sup>。

日本人のカナダ移住者数は、その後劇的には増加しないものの、日加両国の移住政策を考察する上で、日本人カナダ移住は数量以上の重要性があると言えよう。移民事務所開設後の両国の移民政策については、さらに今後の検討課題としたい。

---

## 註

- <sup>1</sup> 2021年統計は以下を参照。Statistics Canada, 2021 Census of Population, Table 98-10-0347-01, Immigrant status and period of immigration by gender and age: Canada, provinces and territories, <https://doi.org/10.25318/9810034701-eng>, 2025年11月4日閲覧。
- <sup>2</sup> ノールズ、ヴァレリー、細川道久訳 2014『カナダ移民史 — 多民族社会の形成』、東京：明石書店、92-94、116-117。
- <sup>3</sup> 原口邦紘 1978「日本・カナダ関係の一考察 — 「ルミュー協約」改定問題 —」『国際政治』1978(58)、50。ノールズ、175-176。
- <sup>4</sup> 戦後の日本人のカナダ移住再開に向けた1960年代前半までの日加の動向については以下を参照。木野淳子 2025「第二次世界大戦後の日本人カナダ移住政策をめぐって—日加の動向—」『JICA 横浜移住資料館研究紀要』19(2024年度)、87-96。同稿及び本稿で使用した史料は、2021年から3年間にわたったJICA 学術研究プロジェクト(飯野正子代表)「日系カナダ人の経験を通してみる戦後の日加関係」の下、外務省外交史料館及びカナダ図書館・公文書館(Library and Archives Canada)で収集した。収集史料の内容は以下を参照。飯野正子、高村宏子、原口邦紘、木野淳子 2022「戦後カナダ移住に関する基礎史料—外務省外交史料館所蔵史料—」『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』16(2021年度)、131-151。同 2024「戦後日本人カナダ移住に関する基礎資料—カナダ図書館・公文書館、外務省外交史料館所蔵資料—」『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』18(2023年度)、53-85。
- <sup>5</sup> 戦前の日本からの移民及び日系カナダ人について扱った代表的著書として、飯野正子 1997『日系カナダ人の歴史』東京：東京大学出版会、和泉真澄 2020『日系カナダ人の移動と運動 — 知られざる日本人の越境生活史』東京：小鳥遊書房。
- <sup>6</sup> 「新移民」研究の一例は、山田千香子 2012「ヴァンクーヴァー日系社会の現在 — 新移住者を中心として」飯野正子・竹中豊編著『カナダを旅する 37章』東京：明石書店、275-284。戦後の日本人カナダ移住再開については、木野、前出、及び飯野他 2022、飯野他 2024において、〈資料紹介〉に付随して記載がある。
- <sup>7</sup> ロイは以下の三部作で、カナダにおけるアジア系移民に関し、移住初期から1967年のポイント制導入による「ホワイト・カナダ」政策終結までを検討している。Roy, Patricia, 1989 *White Man's Province: British Columbia Politicians and Chinese and Japanese Immigrants, 1858-1914*, Vancouver: University of British Columbia Press. Roy, Patricia, 2003, *The Oriental Question: Consolidating A White Man's Province, 1914-41*, Vancouver: University of British Columbia Press. Roy, Patricia, 2007 *The Triumph of Citizenship: The Japanese and Chinese in Canada, 1941-1967*, Vancouver: University of British Columbia Press.

- <sup>8</sup> Roy, Patricia, “Reopening the Door: Japanese Remigration and Immigration, 1945-1968,” in Donaghy, Greg and Patricia Roy (eds.) 2008 *Contradictory Impulses: Canada and Japan in the Twentieth Century*, Vancouver: University of British Columbia Press, 158-175.
- <sup>9</sup> 在日カナダ移民事務所の名称は、外交史料館史料で「東京移民事務所」、「カナダ移民官事務所」、「在日カナダ大使館査証事務所」、「在京カナダ政府査証事務所」、「カナダ大使館査証部」など、表記が一定していない。本稿では、「在日カナダ移民事務所」ないし「移民事務所」で統一する。本文中「 」でくくられているものは、史料に記載の名称である。
- <sup>10</sup> 外務省 1985「第 3 章 戦後の日本外交と 1984 年の我が国の主要な外交活動 第 5 節 官約移住から 100 年の歩み」『昭和 60 年版わが外交の近況』第 29 号。柳沼孝一朗 2023「日本の海外移住政策：対ラテンアメリカ移住政策の変遷と日系社会の形成」『神田外国語大学日本研究所紀要』15、87 (222)、89 (220)。
- <sup>11</sup> 外務省、同上。
- <sup>12</sup> 海外移住事業団は、1974 年に国際協力事業団 (JICA 現・国際協力機構) となる。
- <sup>13</sup> 外務省、1964「六 海外移住の現状と邦人の海外渡航—移住態勢の整備と活動」『昭和 39 年版わが外交の近況』第 8 号。
- <sup>14</sup> 外務省、同上、外務省、1965「六 海外移住の現状と邦人の海外渡航—海外移住施策の概要」『昭和 40 年版わが外交の近況』第 9 号。柳沼、80-79 (229-230)。
- <sup>15</sup> 1961 年にカナダから合衆国に向かったカナダ人勤労者は 70,553 人、そのうち推定 25% が専門職や経営者。ノールズ、238。
- <sup>16</sup> 1963 年 2 月 18 日付『グローブ・アンド・メール *The Globe and Mail*』紙はカナダからの移入数に近い移出数があると指摘、同年 2 月 16 日付『ファイナンシャル・ポスト *Financial Post*』紙は、カナダからの知識人、技術者の流出に懸念を表明。外務省外交史料館 (以下 外史)、J1.2.0.1-4「諸外国移民法規並政策関係雑件 カナダの部」(第 3 巻)、昭和 38 年 2 月 19 日牛場信彦在加大使発大平正芳大臣宛オ G 第 232 号「カナダの移民問題に関する件」。
- <sup>17</sup> 外史、J1.1.0.2-2「本邦移住者関係カナダ移住」(第 1 巻)、昭和 33 年 7 月 11 日萩原徹在加大使発藤山愛一郎大臣宛オ G 第 576 号「フェアクロー移民大臣との会談に関する件」。在日日系人親族の呼び寄せについては、原口邦紘 2019「第二次世界大戦直後に日本に『送還』された日系カナダ人のその後—カナダ帰国・日本定住をめぐる問題—」『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』13 (2018 年度)、49-54 に詳しい。
- <sup>18</sup> 外史、J1.2.0.1-4 (第 2 巻)、昭和 36 年 6 月 16 日萩原在加大使発小坂善太郎大臣宛オ G 第 534 号「Fairclough 移民大臣と会談に関する件」。
- <sup>19</sup> アジア系とアフリカ系の親族呼び寄せは差別された。詳細は木野、90 参照。
- <sup>20</sup> Roy, “Reopening,” 167.
- <sup>21</sup> 日本人移民の数は、1962 年 141 人、1963 年 168 人、1964 年 138 人。外史、J1.1.0.2-2 (第 3 巻)、昭和 43 年 4 月中南米・移住局移住課「対カナダ移住の現況と対策」より。
- <sup>22</sup> 詳細は木野、90 参照。
- <sup>23</sup> トレンブレイ・大平会談については、木野、91、Roy, “Reopening,” 167 参照。
- <sup>24</sup> この時点で、移民省の海外駐在員派遣は 21 カ国に及ぶ。外史、J1.2.0.1-4 (第 3 巻)、昭和 39 年 4 月 14 日牛場在加大使発大平大臣宛オ G 第 437 号「カナダの移民省官吏の海外駐在に関する件」。
- <sup>25</sup> 外史、J1.1.0.2-2 (第 1 巻)、昭和 39 年 7 月 8 日移住局総務課、「カナダ移住に関する方針」。この方針では、外務省移住局事務官 (伴正一) をカナダに派遣し、基本調査を行うことも定めた。こ

の調査については、木野、91 参照。

- <sup>26</sup> 海外移住事業団 1964 『カナダ国の概要と日系人』東京：海外移住事業団。同書は 1965 年 5 月に決定稿が刊行され、はしがきに「日本人移住の門戸が解放されカナダ政府の日本人誘致策が取られた機会に日加関係はますます緊密の度を加える」との記述がある。海外移住事業団 1965 『カナダ国の概要と日系人』東京：海外移住事業団。
- <sup>27</sup> 外史、J1.1.0.2-2（第 1 巻）、昭和 40 年 3 月 1 日椎名悦三郎大臣発島津久大在加大使宛「カナダ移住に関する国内進捗状況」。同史料では、事業団本部の移住相談件数の内、半数がカナダ関係になり、外務省でも平均 1 日 10 名の相談者が来ると報告。横浜移住センターは 1971 年に海外移住センターと改称、2002 年に現在の JICA 横浜となる。
- <sup>28</sup> 海外移住事業団 1965 『カナダ移住の案内』東京：海外移住事業団。「第 1 部カナダ国概況、第 2 部受入れ職種と資格条件、第 3 部移住手続」とカナダの状況を簡単に解説した後、移住にかかわる実務的なことをコンパクトにまとめた。1 月に刊行された同書は、同年だけで 5 月、10 月と改訂を重ね、その後も新たな情報を盛り込みつつ刊行を続けた。5 月の改訂版からは「第 4 部カナダにおける生活」と定着後についても触れている。
- <sup>29</sup> 海外移住事業団 1965 『カナダの就業と生活状況』東京：海外移住事業団。海外移住事業団 1965 『カナダ移住の専門職案内、NO.1』『カナダ移住の専門職案内、NO.2』東京：海外移住事業団。
- <sup>30</sup> 「カナダに技術移住：政府、具体的準備急ぐ 開発協力要請に応じて」『日本経済新聞』1964 年 10 月 8 日夕刊。「初の先進国技術者移住：カナダから求人募集 来春、東京に事務所を開く」『朝日新聞』1964 年 11 月 17 日夕刊。
- <sup>31</sup> Canada, House of Commons, *Debates*, 14 August 1964, 6823-6824. 木野、91。
- <sup>32</sup> 外史、J1.1.0.2-2（第 3 巻）、昭和 39 年 8 月 25 日本本臨時代理大使発椎名大臣宛オ G 総第 936 号「東京に移民事務所を設置して、日本人移民の積極的招致を図るべきだというグローブ・アンド・メール紙社説送付」の中で、詳細に記事内容を報告。
- <sup>33</sup> BC 州の世論の変化についての詳細は、木野、89 参照。
- <sup>34</sup> 外史、J1.1.0.2-2（第 3 巻）、昭和 39 年 9 月 1 日本本在加臨時代理大使発椎名大臣宛第 467 号（電報）「カナダ移住に関する第一次調査の実施」、昭和 39 年 9 月 4 日椎名大臣発島津在加大使宛第 329 号（電報）「カナダ移住に関する第一次調査の実施」。
- <sup>35</sup> Library and Archives Canada（以下 LAC）, RG76 vol.745, file 510-4-578, Considerations regarding of Canadian Immigration offices in Japan, H.F. Clark（Under-Secretary of State for External Affairs 以下 USSEA）to R. B. Curry（Assistant Deputy Minister（Immigration）以下 ADM）, January 5, 1965. この件に関し両者の間で 1964 年秋から意見交換があった。Ibid., Curry to USSEA, November 23, 1964 など。
- <sup>36</sup> Ibid., External to Tokyo, December 17, 1964.
- <sup>37</sup> 詳細は木野、91 参照。ピアソンの懸念に関し、フランス系のトレンブレイ移民大臣は、同年 6 月に牛場大使に移民担当官派遣の当面の見送りを伝える際、「アングロサクソン系思想がオタワ政府では支配的」とし、先例を重視し変化がすぐには起きないと証言しており興味深い。外史、J1.2.0.1-4（第 3 巻）、昭和 39 年 6 月 11 日牛場在加大使発大平大臣宛オ G 第 667 号「トレンブレイ移民相の談話」。
- <sup>38</sup> メイラスの名前の綴り“Vitas”は、ロイの著書では“Vitus”となっている。Roy, “Reopening,” 168, *The Triumph of Citizenship*, 259. LAC 史料初出時には“Vitas Meilus”となっている。LAC, RG76 vol.745, file 510-4-578, C. M. Isbister（Deputy Minister 以下 DM）to USSEA, March 9, 1965. しかし同年 4 月 2 日のプレスリリースの原稿で“Vitus”と誤記され、それがそのまま日加に伝えられた。Ibid.,

- DRAFT PRESS LEREASE, External Affairs to Canadian Embassy, March 31, 1965. メイラス本人による“Vitas Meilus”の記載が次の史料にあり。Ibid., V. Meilus to Director, Oversea Service, Immigration Branch (以下 DOS), August 16, 1965. 日本語表記については、外史の史料で「ヴァイタス」、「ヴィタス／ピタス」が混在。外史、J'1.1.0.2-2 (第3巻)、Canadian Embassy, NOTE VERBALE, no.45, March 15, 1965, 昭和40年4月9日「口上書」。外史、J'1.2.0.1-4 (第3巻)、日付不明 [筆者注：昭和40年10月]、「出張報告 (総務課 飯塚)」など。日加同時発表の史料は、LAC, RG76 vol.745, file 510-4-578, Tokyo to External, April 1, 1965.
- <sup>39</sup> LAC, RG76 vol.745, file 510-4-578, Embassy, Tokyo to External, April 1, 1965.
- <sup>40</sup> Ibid., Meilus to DOS, June 29, 1964.
- <sup>41</sup> Ibid., The Canadian Embassy, Tokyo to USSEA, July 29, 1965.
- <sup>42</sup> Ibid., A. S. McGill to USSEA, December 24, 1964.
- <sup>43</sup> Ibid., USSEA to ADM, January 5, 1965.
- <sup>44</sup> 外史、J'1.1.0.2-2 (第1巻)、昭和40年7月5日「カナダ移住問題に関するカナダ大使館との協議録について」。
- <sup>45</sup> 同上、昭和40年7月13日「メイラス移民官と海外移住事業団幹部との会談について」。
- <sup>46</sup> 外史、J'1.2.0.1-4 (第3巻)、昭和40年7月23日「カナダ移住問題に関するカナダ大使館との協議について (II)」。
- <sup>47</sup> 同上、昭和40年7月30日「メイラス移民官との会談について」。
- <sup>48</sup> LAC, RG76 vol.745, file 510-4-578, Meilus to DOS, August 16, 1965.
- <sup>49</sup> Ibid. 同史料によると7月12、19日の報告書でも事業団の関与を認める勧告をしていたようであるが、これらの報告書はファイルにはなかった。
- <sup>50</sup> Ibid., Meilus to DOS, June 29, 1965. メイラスは、日本側にも度々語学力を向上すべきであると言及していた。外史、J'1.2.0.1-4 (第3巻)、昭和40年8月19日「カナダ移住問題に関するメイラス移民官の見解について」。
- <sup>51</sup> Ibid., DOS to ADM, August 17, 1965.
- <sup>52</sup> Ibid., DOS to ADM, October 29, 1965. この史料でゴドブーは事業団を Japanese Emigration Bureau と記載しているが、1963年創設と記述しており Japan Emigration Service の誤記。
- <sup>53</sup> Ibid. イスピスタは上記史料に手書きでコメント。これに対し、スペイン、ポルトガルで移民の質の低下は見られないとの報告があった。Ibid., R. Melnyk to DOS, November 18, 1965.
- <sup>54</sup> Ibid., DOS to ADM, November 29, 1965.
- <sup>55</sup> Ibid., Director of Policy and Planning (以下 DPP) to DOS, November 24, 1965.
- <sup>56</sup> ビーズリーは自由党政府が大戦後に大規模な日本人移民を認めなかった点も指摘。Ibid., DPP to ADM, December 2, 1965.
- <sup>57</sup> Ibid., DOS to ADM, December 3, 1965.
- <sup>58</sup> 外史、J'1.2.0.1-4 (第3巻)、昭和40年12月1日「メイラス移民官との会談について」。
- <sup>59</sup> ロイは、日本側は移民事務所による宣伝を行わせなかったと指摘。Roy, “Reopening,” 168. カナダ企業が直接新聞広告で移住者募集をすることは職業安定法に抵触するため不可とされた。外史、J'1.1.0.2-2 (第1巻)、昭和40年7月5日「カナダ大使館との協議録」。実際には、事業団地方事務所を通じて全国的に宣伝し、メイラスは様々な地方事務所で講演を行った。例えば、1965年10月18日神戸の地方事務所での講演、同、日付不明、「出張報告 (総務課 飯塚)」。1966年6月25日東京 (住友生命四谷ビル) でのメイラスによる講演と映画会の開催、同6月17日にメイ

ラスを迎えて京都での相談会。「地方事務所だより カナダ移住映画と講演」『海外移住』（海外移住事業団）230、1966年7月20日。

<sup>60</sup> LAC, RG76 vol.745, file 510-4-578, Meilus to DOS, December 3, 1965. アメリカは1965年移民法によって、西欧、北欧からの移民を優遇する国別割当制を廃止した。貴堂嘉之2018『移民国家アメリカの歴史』、岩波書店、200。メイラスは、アメリカが移民受入れの規制を外せば、日本からの技術移民がアメリカに流れることを懸念し、日本人移民受入れ策を早く講じる必要性を訴えた。

<sup>61</sup> Ibid., DPP, Memorandum to ADM, December 2, 1965.

<sup>62</sup> Ibid., Isbister, DM, Memorandum to the Minister, December 6, 1965.

<sup>63</sup> 移民省は、1966年10月1日に Department of Manpower and Immigration（人的資源・移民省）に改組された。

<sup>64</sup> Ibid., Tom Kent, DM, Memorandum to the Minister, January 13, 1966. すでに1965年12月16日にカーリー宛てのゴドブーの覚書の中でも、事業団への申請が可能な点は触れられなかった。“Japanese must be free to apply directly to our office.” Ibid., Godbout, DOS to ADM, December 16, 1965.

<sup>65</sup> “Can. Gov’t. Procrastinates Creating Tokyo Immig. Office,” *The New Canadian*, January 19, 1966.

<sup>66</sup> Ibid., Jean Marchand, Minister, Memorandum to the Prime Minister, January 28, 1966. 本覚書の全文は、飯野他2024, 79–80 参照。

<sup>67</sup> 外史、J1.2.0.1-4（第3巻）、昭和41年2月4日島津久大在加大使発推名悦三郎外務大臣宛オG第114号「マルシャン移民相との会談要旨」。島津の印象としては、事務所開設にはまだ時間がかかると報告。

<sup>68</sup> この間、ケントは再度マルシャンに、1964年4月のトレンブレイ訪日以降の詳細な説明をした上で、事務所開設への同意を求めた。LAC, RG76 vol.745, file 510-4-578, Kent, DM, Memorandum to the Minister, February 14, 1966.

<sup>69</sup> Ibid., IMM OTT, March 10, 1966. 本発表の全文は、飯野他2024, 80–81 参照。

<sup>70</sup> Ibid., Gaimusho, Note Verbale, June 1, 1966. 同事務所の場所は東京都中央区東銀座3丁目2番地。本史料にはゴドブーからカーリー宛に、この特権と免責の付与に関し「満足のいく結論になったことにご留意いただきたい」との手書きコメントがある。なお、この外務省の口上書では業務開始日が6月1日になっているが、実際の業務開始日は1966年6月20日。「カナダ大使館査証事務所正式に業務を開始」『海外移住』229、1966年6月20日。

<sup>71</sup> Ibid., “Canadian Exhibition On Immigration Opens,” *The Japan Times*, June, 1966, in C. O. Spencer, Far East Division to P. E. Quinn, Dept. of Citizenship and Immigration, July 5, 1966. 「カナダ展」開催日程は1966年6月15–25日。「有楽町交通会館で「カナダ展」幕開き」、『海外移住』229。

<sup>72</sup> 戦後のカナダへの日本人移民数は、飯野他2024、83、本稿注21 参照。

<sup>73</sup> 外史、A1.6.4.7「カナダ要人本邦訪問関係」（第1巻）「マルシャンカナダ移民大臣訪日（41.9）」、昭和41年4月27日中南米移住局総務課「主任課長会議資料」。マルシャン訪日一行は、マルシャン夫妻、ゴドブー、アメリカ・アジア・アフリカ担当地域局長（Regional Director of Immigration for the Americas, Asia and Africa）V・ミラード（Victor Millard）、移民大臣秘書B・デュフレヌ（Bernard Dufresne）。直前まで訪日予定であったケントは、1967年移民法施行規則改正（ポイント制導入）に携わっていて多忙だったと考えられる。LAC 史料によると、マルシャン個人は私的な訪問を希望していたが、日本外務省が公式招待した。LAC, RG76 vol.745, file 510-4-578, External to Tokyo, August 23, 1966. ノールズ、247–250。

<sup>74</sup> 外史、A1.6.4.7（第1巻）、昭和41年9月19日中南米移住局総務課「マルシャン・カナダ移民

大臣と椎名外務大臣の会談要旨」。マルシャンは9月20日に、間もなく『移民白書』を議会で提出しカナダ移民政策から差別を撤廃すると表明、日本からの移民が歓迎されると明言した。Roy, “Reopening,” 168.

<sup>75</sup> LAC, RG26-A-1-c, vol.121, file 3-30-5, Canada-Japan Ministerial Meetings [correspondence re meetings including immigration matters], Kent, DM, Memorandum to the Minister, September 14, 1966.

<sup>76</sup> 外務省、1967「第四回日加閣僚委員会共同コミュニケ」、『昭和42年版わが外交の近況』第11号。

<sup>77</sup> LAC, RG76 vol.745, file 510-4-5781, J. D. Donaghue, Chief, Information Service, Immigration Branch to Director of Immigration, January 20, 1966.

<sup>78</sup> 木野、89 参照。

<sup>79</sup> 本稿注 19 及び木野、90-91 参照。

<sup>80</sup> 海外移住事業団『カナダ移住の案内』改訂版、東京：海外移住事業団、1970年1月、11。

<sup>81</sup> 事業団トロント駐在員事務所については、飯野他 2024、56、68-69 参照。

# An Aspect of Japanese Emigration to Canada after World War II — The Establishment of the Canadian Immigration Office in Japan —

Junko Kino (Tokyo University of Foreign Studies)

Canada effectively prohibited immigration from Japan for a long period, even after World War II. It was not until the early 1960s that Canada began accepting Japanese immigrants as the skilled workers it required. In 1964, both Japan and Canada considered establishing an immigration office in Tokyo to promote Japanese emigration to Canada. The Japanese side sought the involvement of the Japan Emigration Service (later JICA), but this was incompatible with the Canadian position that immigration was solely a Canadian matter. This article examines the negotiations between Japan and Canada, as well as reactions within Canada's Department of Citizenship and Immigration, using archival materials from both nations. It demonstrates that the proposed office's establishment signified Canada's stance of broadly recruiting immigrants worldwide ahead of the introduction of the points system in 1967, while for Japan, it represented a shift towards "emigration to developed countries."

Keywords: Japanese Canadians, Japanese emigration to Canada after WWII, Canada-Japan relations, Immigration Office in Japan, Visa Office of the Embassy of Canada to Japan



## 第六回 JICA 海外移住「論文」および「エッセイ・評論」募集の 実施結果について

国際協力機構（JICA）は、日本人の海外移住の 150 年以上の歴史に対する理解と関心を高めることを目的として、2019 年に「JICA 海外移住論文」を創設しました。

第二回募集以降、海外移住の歴史に対してより関心のすそ野を広げるため、論文部門の他に「エッセイ・評論」部門を加えました。テーマについては第一回で募集した邦字新聞を活用した研究に限定せず、広く「日本人の北米・中南米への移住」として実施してきました。

2025 年 10 月、第六回募集の審査の結果、「論文部門」の最優秀賞として天野剛至さんの「秋深し 五七五交わす加奈陀かな 一戦前カナダにおける日系人俳句コミュニティの社会的考察」が選ばれましたので、本紀要に掲載します。

## 〈第六回 JICA 海外移住「論文」および「エッセイ・評論」論文部門 最優秀賞〉

## 秋深し五七五交わす加奈陀かな

## — 戦前カナダにおける日系人俳句コミュニティの社会学的考察 —

天野 剛至（常葉大学・教員）

## 〈目次〉

はじめに— 問題の所在、研究の目的・意義

1. 理論的枠組み
2. BC 州における日系コミュニティの成立と俳句活動
  - 2.1. 林業・製材業・パルプ製造業
  - 2.2. 農業
  - 2.3. 都市部（商業、メディア、金融業など）
  - 2.4. 水産業
  - 2.5. まとめ— 俳句活動の地域性と共通性
- 3.バンクーバー「あじろ会」と社会文化的地位の再生産
4. 本国俳誌投稿にみる象徴的帰属と文化的洗練の承認  
おわりに

キーワード：日系カナダ人、俳句、集合意識、社会文化的地位、文化的洗練

## 凡例

- ・本稿では、法的地位や世代差の相違を踏まえつつも、分析上の目的に照らし、カナダ市民権を有さない「在カナダ日本人」（主に一世）およびカナダ市民権を有する「日系カナダ人」（市民権を取得した一世、ならびに二世以降）を総称して、「日系移民」または「日系人」と呼称する。また、必要に応じて、「日系社会」、「日系コミュニティ」などの表現を用いる。
- ・本文中の表記は、新字体・現代仮名遣いに統一する。ただし、引用部分については、原資料の字体に従う。
- ・本稿では、原則俳号を（ ）に入れて表記する。ただし、引用時や俳句作品において作者を示す場合には、（ ）を省略する。

## はじめに— 問題の所在、研究の目的・意義

明治中期以降、日本人が移り住んだハワイ、アメリカ合衆国（以下、米国）、カナダ、ブラジル、ペルー、アルゼンチンなどの移民地では、俳句愛好者たちによって俳句吟社が組織され、頻繁に句会が催された。句会是对面形式に限らず、現地で発行された邦字新聞俳壇への投稿を通じても行われ、こうした活動の中で無数の俳句が詠まれていった。保存・記録された俳句の一部は、今日では移民の苦難や心情を物語るナラティブとして研究対象となり、それぞれの移民地ごとに調査・分析が積み重ねられてきた。

移民地における短詩型文学の研究は、大きく二つの類型に分類することができる。第一の類型は、移民地における文学的営為そのものに着目し、特定の俳人や俳句吟社の活動・作品、あるいは俳句の現地化や発展を分析するものである。具体例としては、米国における下山逸蒼<sup>(1)</sup>や直原敏平<sup>(2)</sup>、レニア吟社<sup>(3)</sup>に関する論考・評伝（糸井, 2005, 2012, 2015; 古川, 2023）、カナダのスコット沼瀧女<sup>(4)</sup>に関する論考（山田, 2008; 坂本, 2019）、ブラジルの佐藤念腹<sup>(5)</sup>や増田恆河<sup>(6)</sup>に関する論考・評伝（蒲原, 2020; 白石 (2021a, 2021b, 2022)）などが挙げられる。一方、俳句の現地化や発展に関する研究では、特に季語に焦点を当てたものが多い。日本とは気候が大きく異なるハワイやブラジルでは、独自の季語が生まれ、オリジナルの歳時記が編纂されており、これらに関する研究も活発である（東・藤原, 2012; クラウリー, 2012, 藤原, 2012; 白石, 2021b; 久富木原, 2024）。また、ブラジルでは、俳句が増田恆河の功績により三行詩「ハイカイ (haikai)」<sup>(7)</sup>として定着し、ポルトガル語による短詩の創作・発展に大きく寄与したが、これに関する研究も数多く存在する（スエナガ, 2018; 久富木原, 2020; 白石, 2021a, 2022）。

第二の類型は、移民の定住地における歴史的経験と結びつけながら、俳句を文化史的・社会史的に分析するものである。第二次世界大戦中、米国やカナダでは日系人が各地に設けられた戦時転住センター・抑留所・収容所<sup>(8)</sup>に送られたが、そこでも俳句活動が活発に行われた。ガリ版刷りの句集が編まれ、極限状況下でも言葉による表現の営みが続けられたのである。この点に関する研究として、米国におけるフォートミズーラ<sup>(9)</sup>をはじめとする複数の抑留所での俳句活動を考察した研究（糸井, 2011）や、カナダにおけるタシメ<sup>(10)</sup>ほか複数の収容所で編集された句集の分析（Pearce and Antonio, 2020; 天野ほか, 2025; Antonio et al., 2025）が挙げられる。これらは、強制収容所で詠まれた俳句を北米日系社会の文化史的観点から考察したものである。また、この類型にはジェンダーや階級などの社会学的視座を取り入れた分析も含まれる。例えば、写真花嫁や呼び寄せ花嫁として海を渡った女性たちは、理想とはかけ離れた現実に直面し、波乱に満ちた人生を送ることとなった。彼女たちの心情を映し出す俳句は、移民女性の経験を読み解く貴重な資料である。このような視点を反映した研究には、日系女性が詠んだ俳句を含む短詩型文学をジェンダーの視点から分析した論考（高木（北山）, 2009）がある。俳句という文学形式を通じて、移民たちは自身の置かれた社会的状況を風刺的に詠み、言葉の力で現実的困難を乗り越え、自己のアイデンティティを再発見・再構築しようとしたのである。

本研究は、こうした従来の二類型的な理解とは異なるアプローチから日系移民の俳句活動を捉え直す試みである。具体的には、俳句作品そのものではなく、俳句活動および俳句コミュニティの機能に着目し、「集合意識」と「権力」という社会学的視座から分析を行う。とりわけ、第二次世界大戦前のカナダ・ブリティッシュコロンビア（以下、BC）州各地において展開された日系移民の俳句吟社とその活動を主たる対象とする。本研究の構成は、以下の通りである。まず、カナダの日系移民の俳句活動および俳句吟社を論じるにあたり、援用する社会学的理論を挙げ、理論的枠組みを提示する。次に、BC州における日系コミュニティの成立過程と地理的展開を概観し、異なる職業的背景をもつ集住地ごとに組織された俳句吟社を紹介した上で、俳句活動が集団意識の形成に資する媒介として機能していたことを検討する。さらに、バンクーバーに存在した「あじろ会」および邦字新聞俳壇に焦点を当て、俳句活動が単なる文学的営為にとどまらず、エスニック共同体内における社会文化的地位の構築に果たす役割を明らかにする。また、一部の俳句愛好者が祖国・日本の俳誌に投稿していた事例を取り上げ、その社会的意味を考察する。本研究は、カナダにおける日系移民の俳句活動および俳句吟社の文化的・社会的役割とそのダイナミズムを明らかにすることを通じて、日系移民の文化的営為に関する新たな知見を提供するものとなる。

## 1. 理論的枠組み

本研究は、第二次世界大戦前のカナダにおける日系移民の俳句活動および俳句吟社を、単なる文学的営為としてではなく、社会的・文化的実践として捉える。そのための理論的枠組みとして、本稿では主に以下の三つの視座——①集合的儀礼としての文化実践、②文化資本と社会的ヒエラルキーの再生産、③メディアを通じた共同体の想像と権力作用——を採用する。

第一に取り上げるのは、デュルケーム (É. Durkheim) の提唱した「集合意識 (仏: conscience collective; 英: collective conscience)」の概念である。デュルケームは、社会を単なる個人の集まりではなく、個々人を超えた「集合意識」によって統合される実体であると前提づけた。その上で彼は、宗教的儀式や祝祭がこの集合意識を強化し、集団の一体感やアイデンティティの形成に資する点を論じている (デュルケーム, 1975 [=1912])。この視点から見ると、日系移民の俳句吟社における定期的な句会——多くの場合月例で開催された——は、集合意識を再生産する「儀式 (ritual)」と解釈できる。俳句吟社には一種の秘密結社的な性格も見出される。例えば、句会の参加者同士が「俳号」と呼ばれる互いに通じる別名で呼び合う慣習や、吟行・選句・批評といった定型の手順の共有は独自の象徴体系を形成し、吟社を単なる文芸愛好者の集まりを超えた「準宗教的」共同体の空間として特徴づけている<sup>(11)</sup>。このような象徴的構造を補強する理論として、ミード (G. H. Mead) およびブルーマー (H. Blumer) による象徴的相互作用論 (symbolic interactionism) を挙げることができる。この理論は、社会的行為が言語や記号などの「象徴」を介して相互構築されることを強調する (ミード, 1973 [=1934]; ブルーマー, 1991 [=1969])。句会における詠作・選句・批評といったやり取りは、象徴的相互作用の過程を通じて社会的紐帯を形成する活動であり、俳句が単なる個人的創作にとどまらず、コミュニティ形成と維持における中核的な媒体として機能していたことを示している<sup>(12)</sup>。

次に、ブルデュー (P. Bourdieu) の「文化資本 (仏: le capital culturel; 英: cultural capital)」の理論は、俳句活動を日系社会内部の文化的ヒエラルキー形成と再生産の装置として捉える視点を提供する。ブルデューは、文化資本を「客体化された形態 (objectified state)」、「制度化された形態 (institutionalized state)」、「身体化された形態 (embodied state)」の三種に分類し、それぞれが社会階級の再生産に寄与することを論じた (ブルデュー, 1990 [=1979])。なかでも「身体化された文化資本」は、言語、身振り、趣味、教養といった、無意識のうちに内面化される行動様式を指し、日系俳人たちが体現した俳句作法や美的感性に深く関係している<sup>(13)</sup>。さらに、ブルデューの「ハビトゥス (habitus)」(内面化された習慣や価値観) の概念を通じて、俳句活動が日系コミュニティにおける思考様式や行動パターンの同質性を生み出す構造としても理解できる。吟社を通じて共有された審美基準やふるまいの様式は、文化的権威の源泉となり、象徴的秩序の維持に寄与したと考えられる。この文脈において、エリアス (N. Elias) の「洗練 (refinement)」も参照されるべき概念である。エリアスは、近代社会における礼儀作法や羞恥心の内面化を通じて、「洗練された振る舞い」が社会的差異を象徴する過程を分析した (エリアス, 1969 [=1939])。本研究では、俳句という実践が日系移民コミュニティ内において社会的優位性を象徴する文化的装置として機能し、文化的エリート性を構築する手段となっていた可能性を検討する。

最後に、俳句活動におけるメディア的側面と権力作用を分析するために、グラムシ (A. Gramsci) の「ヘゲモニー (hegemony)」概念とアンダーソン (B. Anderson) の「想像の共同体 (imagined communities)」の理論を援用する。グラムシは支配階級がその地位を正当化・持続するためには、物理的・経済力強制力のみならず、文化的リーダーシップを通じて被支配層の「同意 (consent)」を獲得する必要があると論じた (グラムシ, 1978 [=1977])。邦字新聞の俳壇や吟社活動を通じて形成され

る「常識 (common sense)」や文化的規範が、日系社会内における階層的秩序の再生産に果たした役割を分析する際、この理論的視点は有用である<sup>(14)</sup>。一方、アンダーソンは国民という共同体は、新聞や印刷メディアを通じた共通の時間・物語の「想像」によって構築されると論じた (アンダーソン, 1987 [=1983])。この枠組みに照らすならば、BC 州内に点在する日系移民の俳句愛好者たちが邦字新聞の俳壇を通じて相互に作品を共有する行為は、地理的距離を超えて一体感や帰属意識を醸成する「想像の吟社共同体」の形成につながっていたと考えられる。

本稿で援用する諸理論は、必ずしも同一の社会像を前提としていない。デュルケーム的視点が俳句活動の統合的機能を強調する一方で、ブルデューやグラムシの理論は、その内部に潜む差異化や権力作用を可視化するものである。これらの理論を併置的に援用することで、本研究はカナダにおける日系移民の俳句活動および俳句吟社を、「社会的空間の再編成」、「象徴秩序の構築」、「共同体的想像と規範の再生産」といった社会的営為として分析する。もっとも、これらはいずれも近代西洋社会を理論的背景として形成された概念であり、移民、人種化、植民地主義の周縁といったディアスポラの要因を十分に理論化してきたとは言いがたい。本研究の分析的枠組みは、こうした多層的な次元において、俳句という文化実践が戦前日系移民社会における社会的秩序と文化的ヒエラルキーの再生産にどのように貢献したのかを明らかにするとともに、既存理論の射程と限界を同時に照射する試みでもある。

## 2. BC 州における日系コミュニティの成立と俳句活動

1880 年代後半に日本からカナダへの継続的な移民が始まってから 1941 年 12 月の真珠湾攻撃に至るまでの間、BC 州各地にはいくつもの日系コミュニティが形成され、地理的にも広がりを見せていった。これらの集住地の多くは、特定の産業への従事を基盤とした、いわゆる「産業集落」としての性格を帯びていた。表 1 は、1920 年代から 1930 年代にかけて BC 州内に点在した日系コミュニティを主な産業および地域区分に基づいて整理したものである。当時、日系移民が主に従事していた産業は、おおよそ以下の六領域に分類される——①林業・製材業・パルプ製造業、②水産業、③農業、④鉱業、⑤鉄道敷設・保守、⑥都市部での就労 (商業、造園業、メディア、金融業など)。また、表 2 は、邦字新聞『大陸日報』に 1920 年代後半から 30 年代にかけて頻繁に掲載された句会の報告記事をもとに、各地の俳句吟社とその主要メンバーを一覧化したものである。本節では、こうした産業別に形成された日系コミュニティで営まれた俳句活動の実態を、林業・製材業・パルプ製造業、農業、都市部に分けて概観する。

表 1 BC 州内主要産業別日系コミュニティ (1920-30 年代)

産 業	地 名 [日系労働者人口]	
	地 域	
林業・製材業	バンクーバー近郊	*バンクーバー [1,000+]、ポートコキットラム [86]、ロッシュポイント (現ノースバンクーバー)
	フレイザーバレー	アボッツフォード [30]、*フレイザーミルズ [100]、ポートハモンド (現メープルリッジ)、ポートムーディー
	バンクーバー島	シュメイナス [60]、ファニーベイ、*ポートアルバーニ、*ロイストン [60]、ユニオンベイ [40]
	ガブリオラ島	サウスガブリオラ
パルプ製造業	中部沿岸部	*オーシャンフォールズ [300]、*ウッドファイバー [150]
	バンクーバー島	ポートアリス [80]

水産業	南西部	スティーブストーン (現リッチモンド) [600]
	北部沿岸部	プリンスルパート
	バンクーバー島	ナナイモ、ユキュレット
農業	バンクーバー近郊	バーナビー、ニューウエストミンスター、リッチモンド、サリバン (現サレー)
	フレーザーバレー	アボッツフォード [56]、バーキトラム、チリワック、ミッション、ポートハモンド (現メープルリッジ)、ヘイニー (現メープルリッジ) [80]、ホノック (現メープルリッジ)
	オカナガンバレー	ケローナ [200]、* オカナガンセンター (現レイクカントリー) [50]、サマーランド [40]、バーノン [80]
	バンクーバー島	コートニー [50]
	ペンダー島	ホープベイ [20]
鉱業	バンクーバー島	* カンバーランド [100]、ナナイモ
	クイーンシャーロット諸島 (現ハイダグアイ)	イケダベイ (現イケダコープ)
商業・サービス業	バンクーバー近郊	* バンクーバー
	バンクーバー島	* ビクトリア

日系労働者人口は、1926年発行『加奈陀在留邦人々名録』の「在留邦人所在地案内」(pp.175-188)による。日系労働者人口の数字がないのは不明。「数十」とあったのは一律40とした。

\*俳句吟社の存在が確認できるコミュニティ

表2 BC州俳句吟社 (1920-30年代を中心に)

産 業	地 名	俳句吟社(活動時期)	主要メンバー (俳号)
林業・製材業	フレーザーミルズ	へちま会 (1928 ごろ)、河畔句会 (1932 ごろ)	芳賀輝治 (黙堂 / 翠潮)、(皮骨)、(梅蔭)、(一曲)、(濁流)、(十穂)、(狂絃)、(酒仙)、(掬泉)、(的々)、(晩成)、(汲花)、(初子)、(久米仙)、畠山栄太郎 (仙北)
	ポートアルバーニ	かもめ会 (1935 ごろ)	竹田寅雄 (孤村)、竹田だい (露野)、(みどり)、(一谷)、(滴水)、(若水)、(翠柳)、(抱栄)、(三千代)
	ポートムーディ	ひさご会 (1932 ごろ)	(聳山)、竹田寅雄 (孤村)、(三岳)、(芳生)、(桃村)、大村 (芳野)
	ロイストン	双葉会 * (1932 ごろ)	港 (巷水)、藤井 (清泉)、(栄山)、(水泡)、(佳月)、(爲直)、(洛水)、(松風)、(一石)、(蘇山)
パルプ製造業	オーシャンフォールズ	早苗会 (1932 ごろ)	(北鴻)、(幸春)、(北浪)、(茶的)、(於村)、(自然)、井上貞蔵 (三竿井)、(太郎平)、(三九)、(悦子)、(一夢)、(青萍)、高木 (司月齋)
	ウッドファイバー	すみれ会 (1932 ~ 1936 ごろ)	中野勝見 (梅節)、(秋聲)、島田 (玉星)、(梅月)、(豊波)、(春風)、(白雨)、吉川 (梅川)
農業	オカナガンセンター (現レイクカントリー)	青葉会 (1922 ~ 1967 ごろ)	小林伝兵衛 (芳翠)、引地とめ (若子)、伊藤珍太、沢鉄治郎 (喜柿 / 蝸牛)、小林ひろ (葉子)、太地豊吉 (峰月)、太地恵以 (恵)、小林幾江 (みどり)、千葉善七 (孤月 / 孤舟)、竹中清松 (竹嵐)、宍戸英次郎 (春雨)、(砂美)、(仙北)、(仙友)、(洞貝)、(涯山)、(竹堂)、(松葉)、(吐月)、(凹坊)、(あやめ)、(眺湖)、(芳眠)、(冬閑坊)
鉱業	カンバーランド	双葉会 *	ロイストン参照。
商業	バンクーバー	あじろ会 (1926 ~ 1932 ごろ)	中澤義雄 (笛水)、宇都宮鹿之助 (孤鹿 / 一瀉風)、三宅隆吉 (春江)、岩崎興理喜 (柿花)、鈴木悦 (みをつくし)、田村 [鈴木] 俊子 (鳥の子)、山本倫由 (暁花)
		木の芽会 (1928 ~ 1930 ごろ)	あじろ会と同じ (中澤・三宅を除く)
	ビクトリア	うき草会 (1937 ~ 1941)	スコットすゞ (沼瀨女)、スコットベティ (別天女)、甲山きよ (小百合)、(かなめ)、(さつき)、(弥生)

\*ロイストンとカンバーランドは、バンクーバー島東岸のコモックスバレー地方に位置し、地理的にも隣接している。「双葉会」という俳句吟社の名称は、こうした地理的關係を象徴したものと考えられる。

## 2. 1. 林業・製材業・パルプ製造業

林業（伐木）、製材業、パルプ製造業は、戦前のBC州における日系移民にとって最も重要な就労の場の一つであった<sup>(15)</sup>。これらの労働は特別な技術を要しないことから、新たに渡加した多くの日本人移民にとって主要な就労先となった。伐木・製材・パルプ製造の産業はバンクーバー周辺にとどまらず、バンクーバー島やガブリエラ島へも展開しており、日系人が経営する伐木キャンプや製材所も現れた<sup>(16)</sup>。製材所のある各地に小規模の日系コミュニティが形成されたが、請負や短期契約といった雇用形態のもと、一つの製材所から別の製材所へと職を移る者も少なくなかった<sup>(17)</sup>。

1930年代の邦字新聞『大陸日報』には、製材所やパルプ工場を擁する地域に組織された俳句吟社からの投稿が数多く寄せられた。とりわけ製材業に従事する移民が多かった集住地——フレイザーミルズ（へちま会、後に河畔句会）、ポートアルバーニ（かもめ会）、ポートムーディ（ひさご会）、ロイストン（双葉会）——に加え、パルプ製造工場で労働した日系移民の集住地であるオーシャンフォールズ（早苗会）、ウッドファイバー（すみれ会）でも、俳句愛好者による定期的な句会の開催が確認できる。これらの記事の中には、同人によって詠まれた作品とともに、句会の雰囲気や運営の様子を詳細に伝える記事も見受けられる。例えば、1932年4月25日付『大陸日報』には、ウッドファイバーの「すみれ会」が同年4月11日に開催した句会の様子が報告されているので、これを引用して紹介したい。

當地「すみれ會」も正月<sup>そうそう</sup>匆々會員梅節<sup>(18)</sup>氏宅の火災、引き續き色々な不祥事の爲め永らく句會も開かずに居たが、ほがらかな春光に凶事も去り、人の心も浮き立つ折から、春風氏の長男出生。又豫てより建築申なりし梅節氏宅も出来上がったので、去る四月十一日午後七時より梅節氏新居に於て、兩氏の祝賀句會を開催した。

集まる俳士七名、早速席題「春の朝」について苦吟一時間、小時俳談の後、餘興として袋互選<sup>(19)</sup>をやる、苦吟、哄笑の一時間半の後、まご\／して居る玉星<sup>(20)</sup>君の前に袋全部が集まる、集まる程が氣が焦つて句が出ないと云ふ始末「何だ蛇穴を出るかむづかしいな」「あ、ニンニクが臭いな」などと興じながら、やうやく句作を終へて各出題者が袋の中の投句を清記して互選を終つたのは十一時半、それより梅節氏夫人が心盡<sup>つく</sup>しの茶菓の御馳走になりながら「すみれ會」今後の方針について協議し、或は雑談にふけり、散會したのは午前二時頃であつた。左に當夜の収獲を掲載して大方俳人の御高評を仰ぐ。

当地ウッドファイバーにおける句会は、当時の日系移民社会における慣習に則り、夕食後に開催された。この夜は梅節宅の新築と春風氏の長男誕生という二つの慶事を祝し、久しぶりに7名が集まって句会が催された。中野梅節（本名・勝見、当時31歳）は「すみれ会」の中心的存在として、この夜のホスト役を務めている。まず席題「春の朝」による約1時間の推敲と俳談ののち、4題を使った袋互選へと移行。哄笑と苦吟が入り混じる中、互選は約1時間半にわたり行われた。その後、梅節夫人による茶菓を囲みながら、今後の会の方針についての協議や雑談が深夜まで続き、散会は午前2時頃に及んだ。全体で約7時間にわたる句会の様子は、移民社会における文化的営みの熱気と連帯感をよく物語っている。他地域の俳句吟社でも同様の光景が展開されていたことは想像に難くない。

一方、バンクーバー島東岸のコモックスバレー地域には、製材所のあるロイストンと、これに隣接する炭鉦町カンバーランドの労働者による俳句吟社「双葉会」が存在した<sup>(21)</sup>。1932年7月11日付『大陸日報』には双葉会の句稿が掲載されており、その中で第18回句会が実施されたことが記されている。この情報に基づけば、月に一度句会が開かれていたと仮定した場合、同会は1931年1月以

前には結成されていたと推測される。この句会には、岸本清泉<sup>(22)</sup>、港巷水<sup>(23)</sup>をはじめ、総勢 10 名が参加し、兼題「滝」、「土用干」と、席題「日盛り」、「林檎」に取り組んだ。選句はオカナガンセンターの小林伝兵衛<sup>(24)</sup>に依頼している。

製材所やパルプ製造業の集住地における俳句吟社は、主に男性によって構成されていたが、コミュニティによっては男性会員の妻と思しき女性が句会に同席する例も見られた。ポートアルバーニの「かもめ会」は竹田寅雄（孤村）<sup>(25)</sup>を中心とするグループであり、1935 年から翌 1936 年にかけて『大陸日報』に三度、句稿が掲載されている。同会には総勢 13 名の会員が所属しており、そのうち三千代、露野<sup>(26)</sup>、日出代、光代、登代（女）、みどりの 6 名は女性と推定される俳号を用いて詠句しているのが確認できる。しかし、このように男女混合で活動した吟社は、戦前期においてはごく少数に限られていた。

## 2. 2. 農業

戦前、日系移民のうち農業に従事する者は、林業・製材業・パルプ製造業、漁業に次いで多く、全体の 1 割超を占めた<sup>(27)</sup>。彼らはバンクーバー郊外（バーナビー、ニューウエストミンスター、サレーなど）からプレーザバレー（メープルリッジ、ミッション、ヘイニー、アボッツフォードなど）にかけての広範囲にわたり農地を開拓し、主にバンクーバーに向けて出荷される野菜や果物の栽培に従事した<sup>(28)</sup>。また、BC 州内陸部では、オカナガンバレー地域（バーノン、オカナガンセンター、ケローナ、サマーランドなど）においてリンゴやモモ、サクランボなどの果樹栽培に携わる者も多かった。

このうち、オカナガンセンター（現・レイクカントリー）では、1922 年に小林伝兵衛（芳翠）を中心として、約 10 名による俳句吟社「青葉会」が結成された<sup>(29)</sup>。青葉会は戦前より『大陸日報』に句会記を投稿したり、他地域の俳句吟社の選者を務めたりする<sup>(30)</sup>などして、日系俳壇にその存在感を示していた。1935 年 2 月 12 日付『大陸日報』には、正月 5 日に行われた新年句会記が掲載され、「山と積まれた御馳走に左黨の喜ぶ物も恵まれ、唄に踊に十二分に正月氣分を味わひて」と記されている。この記述からは、彼らの俳句活動が単なる句作にとどまらず、年中行事や慶事を祝う社交的・祝祭的な側面をも併せもっていたことがうかがえる。青葉会は小林が亡くなる 1960 年代まで、40 年以上にわたり息の長い活動が続けられた<sup>(31)</sup>。

ほかに、小杉宇蔵（金盃、サリバン在住）<sup>(32)</sup>、宮崎新造（梅笑、ニューウエストミンスター在住）<sup>(33)</sup>など、戦前に農業に従事していた俳句愛好者は少なくないが、農業共同体における俳句活動の詳細は十分に明らかになっていない。

## 2. 3. 都市部（商業、メディア、金融業など）

日系移民の人口が増加するにつれ、バンクーバーやビクトリアなどの都市部では、旅館や料亭・食堂をはじめ、食料品店、衣料雑貨店、時計販売・修理店、理髪・美容店、写真館、クリーニング店、書店、靴修理店など、日系同胞を対象としたあらゆる種類の商店が営まれるようになった。これらの商店を経営する者や従業員として働く者も次第に増え、その数は第二次世界大戦前の 1938 年には約 700 名に達した<sup>(34)</sup>。また、バンクーバーでは、1920 年代には邦字新聞三紙<sup>(35)</sup>が鼎立し、小規模ながらも独自のメディア産業が形成されていた。さらに、田村新吉が経営する日加貯蓄などの金融業に加え、保険代理店などサービス業も展開されていた。

バンクーバーに俳句吟社が存在していたことを示す最古の記録は、1910 年代に遡る。戦前にバンクーバー市内で時計販売・修理店を営んでいた松林伸太郎（松峯）<sup>(36)</sup>とその家族が遺したコレクションの中に、“Photo of Nakataro Matsubayashi and Haiku Club”とキャプションが付された一枚の写真（図

1) が含まれている。写真には松林のほか、三宅隆吉（春江）<sup>(37)</sup>、長田正平（波韻）<sup>(38)</sup>の姿も確認できる。1930年に長田が亡くなった際の新聞記事には、永澤六郎（南北）<sup>(39)</sup>による追悼文が掲載されている。そこには「故長田波韻君は『木の子会』の同人として晩香坡の古い俳人の一人であ（った）」<sup>(40)</sup>と記されており、当時の吟社が「木の子会」と称していた可能性がある。



図1 バンクーバー俳句会「木の子会」？（1910年代）  
 前列左から1番目：松林仲太郎（松峯）、3番目：山崎寧？  
 2列目右から1番目：三宅隆吉（春江）  
 最後列左から1番目：茅原佐一郎？（呂憫）、3番目：長田正平（波韻）  
 Matsubayashi Family Collection, Nikkei National Museum 2019.16.1.1.58

1920年代後半から1930年代にかけて、バンクーバーには「あじろ会」と「木の芽会」の二つの俳句吟社が存在した。ただし、これら二つの会はほぼ同じ顔ぶれで構成されていた。あじろ会は1926年に結成され、中澤義雄（笛水）<sup>(41)</sup>および三宅隆吉を中心とする、カナダ俳壇の重鎮らによる吟社であった<sup>(42)</sup>。一方、「木の芽会」は、1928年2月25日、あじろ会のメンバーでもある岩崎与理喜（柿花）<sup>(43)</sup>と山本倫由（睨花）<sup>(44)</sup>によって、自由律俳句（新傾向）を研究することを目的として提唱・設立された。ただし、中澤や三宅は——おそらく彼らが伝統的な五七五の定型を重視していたことへの配慮からか——木の芽会の設立には招かれていない<sup>(45)</sup>。こうして、バンクーバーには、ほぼ同じ顔ぶれでありながらも志向の異なる二つの俳句吟社が並立するという、特異な文化的状況が生まれることとなった。

また、ビクトリアには女性だけの俳句サロン「うき草会」が存在した。ホトトギス同人のスコット沼蘊女の自宅はオークベイ大通りに面しており、そこには娘のベティ（別天女）や甲山清（小百合）<sup>(46)</sup>を中心に、複数の女性たちが集っていた。スコットランド出身の英国人の夫をもち、伝統的な日本文化にも通じていた沼蘊女と、若くして俳句の才に恵まれた別天女は、当時の教養に乏しい一般の日系移民とは一線を画し、異国における理想的なロールモデルとして多くの女性の憧れの存在であった。会の集まりでは、女性たちはともに料理を楽しみ、茶菓を囲んで談笑しながら句作に励むな

ど、定期的に午後のひとときを過ごしていた。その様子は『大陸日報』にも掲載されている<sup>(47)</sup>。1937年10月には別天女が若くして急逝するという悲劇に見舞われたものの、うき草会は1942年2月に日系人総移動令が出されるまで活動を続けた<sup>(48)</sup>。

#### 2. 4. 水産業

俳句吟社の活動が確認されている産業集住地がある一方で、戦前期に日系移民にとって最も重要な就労の場の一つであった水産業コミュニティにおける俳句活動については、現時点で確認できていない。最盛期には4,000人以上の日系移民が漁業やキャナリー（缶詰工場）での労働に従事していたとされ<sup>(49)</sup>、なかでも「サーモノポリス（Salmonopolis: サケの町）」と呼ばれたスティープストーン（現・リッチモンド市の一部）は、戦前期における日系水産業従事者の最大の拠点であった。同地では、漁業従事者の互助組合によって、日本人医師が常駐する医療施設や日本語学校などを備えた、生活基盤の整った日系コミュニティが形成されていた。しかし、これまでの調査では、『大陸日報』紙上俳壇にスティープストーンやナナイモ、スキーナ在住の俳句愛好者個人による投稿がわずかに見られるにとどまり<sup>(50)</sup>、BC州最大の水産業共同体であったスティープストーンにおける俳句活動に関しては、いまだ手がかりが得られておらず、今後の調査の進展が俟たれる。

#### 2. 5. まとめ—俳句活動の地域性と共通性

以上のように、戦前のBC州各地に形成された日系コミュニティでは、産業構造や地域的背景の違いに応じて多様な俳句活動が展開されていた。林業・製材業・パルプ製造業に従事する労働者の間では、夜間に催される句会が日常の労苦を癒す文化的な憩いの場として機能していた。一方、農業地域では、季節の移ろいや年中行事に寄り添った家族ぐるみの社交的な俳句活動が行われていた。また、都市部では、文化資本を有する人々によって、本格的な俳壇形成や自由律俳句の探究といった意欲的な取り組みが進められた。

こうした戦前の俳句活動にはいくつかの共通点も認められる。第一に、邦字新聞『大陸日報』を通じた活動の可視化である。句稿を通じて句会の様子や選句結果を投稿し合うことで、地理的に離れたコミュニティ間に緩やかな文化的ネットワークを築いた。この実践は、俳句愛好者の間にデュルケームのいうところの「集合意識」を育み、俳句を媒介とした文化的再帰性と社会的連帯を可能にした。第二に、吟社の多くが数名から十数名程度の小規模な集まりで、通常家庭や知人宅といった私的空間で活動していた。これにより、句会は俳句愛好者の生活空間に深く根ざした営みとなった。第三に、俳句は人間関係の構築や精神的な拠りどころとしての象徴的な機能を担っていた。ミードやブルーマーの象徴的相互作用論の視点からは、句会における対話的なやり取りの過程が、社会的関係を象徴的に再構築する文化実践であったと捉えられる。

### 3. バンクーバー「あじろ会」と社会文化的地位の再生産

本節では、前節で触れたバンクーバーの俳句吟社「あじろ会」に焦点を当て、その社会的役割を「権力」との関係性において検討する。

1926年に結成されたあじろ会は、邦字新聞『大陸日報』および「加奈陀日本人会」（以下、日会）と深いつながりを有していた。ここでは、両者の概要を整理しておく。『大陸日報』は、1907年6月に創刊された邦字新聞である<sup>(51)</sup>。経営難に直面していた同紙を、山崎寧<sup>(52)</sup>が1908年3月に買収した<sup>(53)</sup>。山崎はさらに翌1909年3月、バンクーバー日本街の有力商店主43名を会員として日会を発

足させ、自ら初代会長に就任した。新保満らの指摘によれば、『大陸日報』の編集方針や、それを支持する日会の構成員は日本への帰属意識が強く、カナダ社会への同化には消極的であった。その姿勢は「反同化志向」と評され、在バンクーバー日本帝国領事館との関係も深い、いわば「体制寄り」の団体であったとされる<sup>(54)</sup>。日会はあくまで日系移民の一部有志による私的団体に過ぎず、日系社会を公式に代表する組織ではなかった。しかし、第一次世界大戦中の1914～15年には、山崎を中心に日系人による「義勇兵」部隊を組織し、欧州戦線に派遣している<sup>(55)</sup>。さらに戦後の1920年4月には、スタンレー公園内に日系カナダ人戦没者の慰霊碑を寄付により建立するなど、あたかも日系社会を代表するかのような活動を展開しており、それらの動きは『大陸日報』紙上でも積極的に報じられた<sup>(56)</sup>。

1926～27年にかけてのあじろ会のメンバー（表3）を確認すると、その多くが『大陸日報』あるいは日会、またはその両方に関与していたことが明らかである。たとえば、1927年1月20日付『大陸日報』に掲載された「あじろ会の記」には、同年1月15日に開催された第三回句会の参加者として、以下の10名が記録されている（会場到着順）：山本倫由（予）、永澤六郎（南北生）、鈴木悦（村正将軍「みをつくし」）<sup>(57)</sup>、田村俊子（鳥の子）<sup>(58)</sup>、岩崎興理喜（柿花）、中澤義雄（笛水）、三宅隆吉（春江）、曲陽（小宮山高彦？）<sup>(59)</sup>、リラ（小宮山扶三〔子〕？）<sup>(60)</sup>、水戸憲道（愛川）<sup>(61)</sup>。このうち、曲陽・リラ夫妻を除く8名が『大陸日報』また日会の関係者であった。

以下に、山本倫由による句会の記録の一部を引用し、吟社活動の実態を紹介する。

去る一月十五日の土曜日の夜を晩香坡セムリン・ドライブなる予が陋屋に於て、第三回の「あじろ會」の運座を催す。

この日逡巡として雨模様なるを氣にしなが、午後六時世話掛なる南北生を伴い歸り、待つ程なく村正将軍「みをつくし」と假りに名乗り給ふて、鳥の子夫人同伴にて來られたのは珍らしい。やがて柿花、笛水相次いで來る而して晩市句会の元老春江の來るや早速にして「早春亂題」の句作に入る事とする。

この作句なかばにして曲陽、リラ夫人を伴ひて來り加はる、またこの夜大谷教會に結婚式を司り終えたる愛川氏、フロックコートにて來り會し、その何れも相寛容くつろぎて句境に入る。鳥の子夫人、春江、新進の柿花相次いで名吟を吐くも、多作家をもつて鳴る笛水僅に二句を投ずるのみ。

（中略）

ことに春江（三宅）の句「春の夢朧に浮いて汽車の揺れ」は各人の投票をひとりて集め、その人氣たるや、二十餘年昔の「夏木立」の金時計以來の出來事であつた。

この句會を終えて一同歸路についたのは、澆季溷濁の俗界、今將に明け離れんとする翌朝六時半であつた<sup>(62)</sup>。

この記録からは、10名の参加者が「早春亂題」、「木の芽」、「春の夢」の三つの季題のもと——おそらく夜食や茶菓を挟みながら——およそ12時間半にわたる句會を楽しんだ末、散會したことがうかがえる。

ところで、あじろ会はこの句會に先立つこと、1926年12月9日付の『大陸日報』紙上において、在カナダ同胞一般を対象に俳句の募集広告を掲載した。これによれば、課題は「早春亂題」で、早春に関するものであれば内容は自由、句数の制限もなく、大陸日報社内の「南北」（永澤六郎）宛に投稿するよう呼びかけられている。締め切りは1927年1月12日で、選句は1月中旬に予定されている會合にて行ふ旨が記されていた。かくして、合計104句の募集があり、1月23日金曜日に三宅、

中澤らあじろ会の重鎮メンバーが選者として集まり、評定が行われた。1月25日付『大陸日報』紙面には、評定の様子を傍観した主筆・永澤による顛末記とともに、天・地・人の三光ならびに五客を含む計24句の入選作が発表された。

『大陸日報』紙上における、あじろ会の俳句活動および主催による紙上応募句コンテストは、1930年代から戦時収容期、さらには戦後を通じて日系カナダ移民社会における俳句活動を活性化する導火線のような役割を果たすこととなった。以後、このあじろ会による紙上コンテストは、確認できる限り1932年まで継続され、通算62回を数えた。応募句数は回を重ねるごとに増加し、一つの季題に対して150～200句、三つの季題を合わせて計800句以上が寄せられることもあった<sup>(63)</sup>。紙面上で紹介される各地の入選者の名前は、俳句愛好者の間で広く知られるようになり、直接の面識がないにもかかわらず特別な連帯感を生み出す契機ともなった。1933年には、その役割を「大陸俳壇」に譲り、紙上俳句コンテストはあじろ会の手を離れることとなる。

バンクーバー「あじろ会」の俳句活動および紙上コンテストは、単なる文学的趣味の発露にとどまらない。それは、日系カナダ移民社会における社会文化的地位の再生産と象徴的承認の場であったと

表3 「あじろ会」メンバー (1926～1927)

会員名	号	生年	本貫	プロフィール
三宅隆吉	春江	1978	広島県	「加奈陀日本人会」事務局長。1909年に中西兼吉と不動産事業を始めるも、損失を招き失敗。以後、再び山林伐木事業のフォアマン(人夫長)として活躍した。
中澤義雄	笛水	1885	山梨県	商社(日加興業社)勤務を経て、パウエル街の「渋谷商店」の支配人を務める。
宇都宮鹿之助	孤鹿 / 一瀉風	1887	愛媛県	代理業(代書・一般周旋)の傍ら、婦人衣料品店を経営。日会評議員。
岩崎輿理喜	柿花	1892	岡山県	『大陸日報』支配人。大陸日報社社長山崎寧の姪の女婿。後に大陸日報社社長となる。
山本倫由	睨花	1890	高知県	『大陸日報』記者。
長田正平	波韻	1879	東京市	『大陸日報』記者。第1回句会にのみ参加。「あじろ会」の名づけ親。著作に『加奈陀の魔窟』。歌人・石上露子の若かりし頃の「不滅の恋人」。
松村松之助?	松雨	1881	和歌山県	第2回句会に参加。詳細不明。
水戸憲道	愛川	不明	不明	米国・南カリフォルニア大学で学んだ後、桑港新世界新聞に入社。カナダ入国時期不明。真宗大谷派開教師・戯曲作家。バンクーバーでは1926年11月に二回にわたって自作の戯曲による少女歌劇を上演。戯曲はたびたび『大陸日報』に掲載された。第2回～第4回句会に参加。
鈴木悦	みをつくし	1886	愛知県	1924年3月『日刊民衆』創刊、社主・主筆。元『大陸日報』主筆。第3回句会に参加。
田村(鈴木)俊子	鳥の子	1884	東京市	作家。鈴木悦の妻。第3回～第5回句会に参加。
不明	曲陽	不明	不明	第3回句会に妻リラを伴って参加。長野県出身の小宮山高彦(1885年生、俳号はほかに千曲)と推測される。
不明	リラ	不明	不明	曲陽の妻。第3回は夫に同伴して参加も見学のみ。第4回に単身で初参加。田村俊子の親友の小宮山扶三(子)(1890年生、長野県出身、戦前カナダ日系短歌界の第一人者)と推測される。
高木佐富?	司月斎	不明	不明	オーシャンフォールズ在住。第5回句会に参加。
永澤六郎	南北	1885?	宮城県	『大陸日報』編集長。一面にてコラム「世間話」を担当。東京大学出身の動物学者。人呼んで「大正の碩学」。記録者として同席するが、詠句はしない。

第1回句会は1926年の7～10月に行われたと推測されるが、実施月日不明。第2回句会は1926年11月27日開催(会場は中澤笛水宅)。第3回句会は1927年1月15日開催(山本倫由宅)。第4回句会は1927年2月12日開催(中澤笛水宅)。第5回句会は1927年6月11日(同)。

考えられる。ここでは、ブルデューの概念である「文化資本」および「ハビトゥス」に照らして、その社会的機能を分析する。

まず、あじろ会が提供した紙上俳句コンテストは、「身体化された文化資本」としての文化実践の場であった。作法や表現様式、季語に対する感性といった俳句独自の形式の習得と実践は、日系同胞の間で一種の教養と品位の証明とみなされることがあった。こうした美的感受性の共有は、集団的に内面化される「ハビトゥス」として機能し、参加者同士の相互認識や象徴的差異化を可能にしていた。また、紙上俳句コンテストやその入選発表は、「制度化された文化資本」としての側面も有していた。主催者はもとより入選者の名前が公に揭示されることで、その人物の象徴的地位が日系社会の中で承認される仕組みが形成されていた。俳句活動を通じて築かれた名声や評価は、経済資本や政治資本とは異なる軸での社会的序列や差異の構築に寄与した。これは、特定の人物群——とりわけ『大陸日報』や日会の関係者——による象徴的権威の集中と再生産を可能にしていた点でも注目される。さらに、俳句活動は日本文化の継承・再構築の手段であると同時に、日系共同体内部でのヒエラルキー形成にも寄与した。あじろ会は、ブルデューのいう「場 (champ)」として、文化的正統性をめぐる競争が展開される舞台であり、そこにおけるノモス (規範) は、俳句という形式言語の習熟度によって規定されていた。

したがって、あじろ会の俳句活動は、個人の趣味的実践という側面を超え、文化資本とハビトゥスの相互作用によって支えられた社会的秩序の再生産の場として理解されるべきである。特に、あじろ会はその象徴的ヒエラルキーの頂点に位置する組織であり、特定の人物のみが出入りを許された、いわば疑似会員制の「サロン」として機能していた。同会は『大陸日報』ならびに日会と密接に結びつくことで、日系社会における特定の社会文化的地位を創出・強化する役割を担っていたのであり、この構造はまさに、グラムシの「ヘゲモニー」概念に照らして、日系エリート支配層が文化的リーダーシップを通じてその地位を正当化し、日系コミュニティ内における「同意」の獲得を図ったことの証左であろう。

#### 4. 本国俳誌投稿にみる象徴的帰属と文化的洗練の承認

ところで、こうしたカナダ在住の日系移民俳句愛好者の中には、日本本国の俳句雑誌（以下、俳誌）に積極的に投稿を行う者も少なからず存在した。本節では、そうした本国俳壇との交流の実態を概観しつつ、それがもたらす象徴的帰属や文化的承認の意味について考察する。

米国、カナダ、ブラジルなど、海外の移民地に定住した日系人俳句愛好者がしばしば投稿先として選んだ俳誌の一つに『南柯』がある。俳句結社「南柯」は、内藤鳴雪、武田鶯塘、巖谷小波らを主宰に1913（大正2）年に創設された。その俳誌は早くから海外に移民した俳人たちに門戸を開いていたことで知られている。例として、1910年代に米国ユタ州の「和察知吟社」<sup>(64)</sup>から送られてきた俳句作品については、鳴雪自らが10～20句程度を選び、誌面の半ページ（時には3分の2ページ）を割いて掲載していた。こうした柔軟な姿勢から、『南柯』は、海外在住俳人にとって投稿しやすい環境を備えていた俳誌であったといえる。

カナダに移民した日本人俳句愛好者の中にも、「南柯」と関わりをもつ者が見られる。たとえば、前述の長田正平は巖谷小波の門下生であり、1920～30年代の「南柯」幹部とは兄弟分の間柄にあったとされる<sup>(65)</sup>。また、『大陸日報』紙上で俳句講師を務めた佐野駒蔵（未入）<sup>(66)</sup>も、「南柯」の古参同人の一人であった<sup>(66)</sup>。

1920年代後半、カナダ在住同胞の間で俳句熱が高まるなか、1932年頃より「加奈陀火曜会」のメ

ンバーによる『南柯』への投稿が活発化していく。『南柯』1932年3月号に森明星<sup>(67)</sup>——彼は戦前では数少ない帰加二世<sup>(68)</sup>の俳人だった——による「第八拾壹回會報」が掲載されており、これを月例会そして逆算すれば、「加奈陀火曜会」の創設は1926年の5月に遡ると推定される。「加奈陀火曜会」についての詳細は不明であるが、当時のBC州各地の日系集住地を結んだ通信型俳句ネットワークであったと考えられる。実際、『南柯』1933年1月号から12月号にかけて、以下の人物とその作品が確認される。八木美津朗<sup>(69)</sup>、井上三竿井<sup>(70)</sup>（以上、オーシャンフォールズ「早苗会」）、中野梅節、吉川梅川<sup>(71)</sup>、島田玉星（以上、ウッドファイバー「すみれ会」）、森明星、森本参木<sup>(72)</sup>（バンクーバー）、港巷水（ロイストン）、芳賀翠潮<sup>(73)</sup>（フレイザーミルズ「河畔句会」）、真神北斗<sup>(74)</sup>（ポートアルバーニ）、猪又織月<sup>(75)</sup>（サンベリー）、小杉金盃（サリバン）などである。これらの俳句は、それぞれの俳号に加えて「カナダ」あるいは「加奈陀」といった地名が明記され、居住地の表記を伴って誌面に掲載されていた。また、『南柯』の「支社吟と各地俳報」欄には、日本国内の各地の支社と並んで「加奈陀火曜会」の会報も収められていた。これにより、「南柯」同人の間では、カナダの日系俳句愛好者の存在は一定程度認知されていたと考えられる。

このような投稿活動には、日本本国との文化的連関を維持し、祖国との精神的なつながりを志向する象徴的帰属としての側面が認められる。他方で、それはまた、自己の俳句表現が在カナダ日系社会という限定された文化圏を超え、日本本国の俳壇にも通用することを証明する「文化的承認の装置」としての機能も果たしていた。すなわち、『南柯』への掲載は、日系俳人にとって、自らの文化的洗練——エリアスのいうところの“civilizing process”——を可視化する手段であり、それによって象徴的な社会的優位性を主張する行為でもあった。さらにいえば、このような文化的実践は、マイノリティとしての制約を受ける移民社会の中において、文化的主体性や自尊心を保持・再構築するための営みであり、排除された社会的空間の内部において自己価値を確保するための文化的戦略として理解される必要がある。俳句という言語芸術は、単なる趣味や文学的営為を超えて、彼らのアイデンティティ形成と同胞社会における社会的ポジショニングに深く関わる文化資本として機能していたのである。

## おわりに

本研究は、第二次世界大戦前のカナダBC州における日系移民の俳句活動を、従来の作品分析や文学史的アプローチにとどまらず、社会学的視点から再定位する試みであった。具体的には、デュルケームの「集合意識」論に基づき、俳句活動を準宗教的儀式と捉え、ブルデューの「文化資本」論から吟社を文化的ヒエラルキーの構築装置として位置づけ、さらにグラムシのヘゲモニー理論を援用することで、俳壇や吟社がエスニック社会内部での同意形成と規範維持に果たした役割を明らかにした。俳句を媒介とした相互作用は、職業別に形成された日系共同体内部における文化的規範の醸成に寄与したのみならず、邦字新聞俳壇を通じた地理的・越境的ネットワークを可能にし、「想像の吟社共同体」の構築をもたらしたといえる。

このような視点は、俳句ならびに俳句活動を社会的実践として捉える新たな理解を提示するものである。とりわけ注目すべきは、俳句活動が単なる娯楽や趣味の域を超え、文化的資本の蓄積と再生産を通じて、日系社会内における階層的秩序や文化的エリート性の構築に寄与していた点である。吟社の運営や俳壇での選句活動は、参加者に「洗練」された行動様式や言語感覚の習得を促し、それが移民社会における権威や地位を裏づける象徴的行為ともなっていた。また、一部の俳句愛好者が日本本国の俳誌に投稿していた事例に見るように、俳句活動は移民という周縁的存在が文化的に本国との結

びつきを模索する実践でもあり、自らの文化的優位性へのアクセスを志向する試みでもあった。こうした視点から俳句活動を捉え直すことで、それが不安定な社会的位置にある移民たちにとって、自己のアイデンティティを再確認する契機となり、文化的連帯と社会的承認を得るための重要な実践空間であったことが浮かび上がる。

---

## 註

- (1) 盛岡生まれ (1879～1935)。本名・英太郎。1903年渡米。1911年、自由律俳句の旗手・萩原井泉水が主宰する俳誌『層雲』に参加。以後、自由律俳句に傾倒し、生涯で3万句を詠む。直原敏平(註2)とカリフォルニア州アップランドに俳句吟社「紙燭会」を結成した。翌年「レモン詩社」と改名、機関句誌『れもん帖』を出版した。日系社会で俳句の普及に尽力し、帰郷することなく米国で生涯を終えた。
- (2) 岡山県生まれ (1869～1929)。号は行人。1903年に渡米し、カリフォルニア州アップランドに定住。開墾請負業を経て農場経営に携わり、発明した農業器具のいくつかで特許を取得。下山逸蒼が「レモン詩社」を離脱後は同吟社の主宰者となり、機関句誌『トシヘー』を刊行した(第2号で終刊)。
- (3) ワシントン州シアトルを拠点とする俳句吟社。川尻杏雨(慶太郎)、小池晩人(恭)らによって1934年結成。90年余を経た2025年現在も活動を継続している。
- (4) 熊本県生まれ (1886～1969)。本名・すず(鈴子)。旧姓・市来。吉岡禅寺洞から俳句の手ほどきを受け、『ホトトギス』、『玉藻』に投句した。英国人のパーシー・W・A・スコットと結婚し、朝鮮・宣川に移住する。1931年、カナダ・ブリティッシュコロンビア州ビクトリアに移住。女性だけの俳句吟社「うき草会」を主宰するとともに、邦字新聞『大陸日報』紙の「大陸俳壇」で選者を務めた。娘のベティ(俳号・別天[女])も俳句を詠んだが、1937年10月に腎臓を患い、18歳の若さで急逝した。
- (5) 新潟県北蒲原郡笹神村笹岡(現阿賀野市笹岡)出身 (1898～1979)。本名・謙二郎。少年時代から俳句に親しみ、15歳より『ホトトギス』に投句を始める。1927年、開拓移民として一家でブラジルに渡る。以後、現地の邦人に俳句の指導を続けた。
- (6) 香川県出身 (1911～2008)。本名・秀一(ひでかず)。佐藤念腹に師事し、日系移民の間に俳句を広めただけでなく、ブラジルにおけるポルトガル語の三行詩「ハイカイ」の普及にも尽力した。
- (7) 俳句が世界的に紹介され始めた19世紀末から20世紀初頭は、「俳句」という名称がまだ国際的に統一されておらず、フランスでは「ハイカイ(haikai)」という呼称が用いられた。この呼称がポルトガル語圏であるブラジルにも伝わり、現在でも「ハイカイ(haicai)」として定着している。
- (8) 米国では、一般の日系人を対象に強制的に移住・収容した施設は、公式には「戦時転住センター(War Relocation Centers)」と呼ばれた。そのほか、敵性外国人とみなされた者を収容する施設は「強制収容所(Internment Camps)」、「抑留所(Detention Camps)」と呼ばれた。一方、カナダでは、一般の日系人を対象とした強制収容施設として「収容所(Incarceration Camps)」が設置されたほか、「反抗分子」とみなされた人びとを収容する「POW Camps(捕虜収容所)」も存在した。
- (9) モンタナ州フォートミズーラ(Fort Missoula)に設置された敵性外国人抑留所。桑井(2011)は、モンタナ州フォートミズーラ抑留所、ニューメキシコ州ローズバーク(Lordsburg)抑留所、同州サンタフェ(Santa Fe)抑留所における俳句ほか短詩型文芸活動の資料を紹介している。

- (10) BC 州ホープ (Hope) の東 (現・サンシャインバレー [Sunshine Valley]) に位置する農場跡地に 1942 年から 1946 年まで設置されたタシメ強制収容所 (Tashme Incarceration Camp)。「タシメ (Tashme)」という収容所名は、日系人強制移動・収容政策を実行した BC 安全保障委員会 (BC Security Commission) のメンバー、オースティン・テイラー (Austin Taylor)、ジョン・シラス (John Shirras)、フレデリック・ミード (Frederick Mead) の各姓から頭 2 文字を取って組み合わせた造語。
- (11) もっとも、デュルケームが想定した宗教的儀礼とは異なり、俳句吟社の句会は制度化された教義や超越的存在を欠いたものである。その意味で、ここで観察される集合性は、移民という不安定な社会的条件のもとで、反復的实践を通じて暫定的に維持される、きわめて脆弱な集合意識であったと考えられる。
- (12) この点で、俳句吟社における集合性は、既成の価値体系に基づく統合というよりも、日常的相互行為の積み重ねによって都度生成される流動的な社会的現実として理解されるべきであり、象徴的相互作用論は、集合意識を所与の前提とするのではなく、その可変的な生成過程を捉え直すための分析的手がかりを与える。
- (13) ただし、ブルデューの文化資本論が主として国民国家内部における階級再生産を前提としているのに対し、戦前の日系移民社会は人種的排除や法的制約によって主流社会での社会移動が著しく制限されていた。そのため、俳句を通じて蓄積された文化資本は、外部社会への上昇移動を指向するものではなく、むしろコミュニティ内部における象徴的差異化や序列化に向けて作用していた点に特徴がある。
- (14) もっとも、日系移民社会におけるヘゲモニーは、国家権力に裏打ちされた支配とは異なり、共同体内部に限定された、常に異議申し立ての可能性を孕んだ脆弱な同意形成であったと考えられる。
- (15) 末永 (2006) によれば、1938 年時点における在カナダ日本人および日系カナダ人の人口は 22,840 人であり、そのうち労働力人口 (本業者数) は 7,601 人である。1938 年時点における就労人口が最も多かったのは伐木・製材・パルプ製造の木材関係業者で、1,804 名。
- (16) これらの製材所の中には、日系移民によって経営されたものも存在した。例えば、ガブリオラ島では新出芳松が 1919 年「サンライズ木材社」(Sunrise Lumber Co.) を設立し、またバンクーバー島ロイストンでは上西寛之助、内山健六、湊敬二らによって「ロイストン木材社」(Royston Lumber Co.) が共同経営された。さらに、同島のファニーベイには、花月栄吉が 1929 年に「ディープリバー伐木会社」(Deep River Logging Co.) を設立している。
- (17) 例えば、静岡県出身で製材工・俳句愛好者でもあった竹田寅雄 (俳号・孤村、1902～1984) は、1920 年代半ば頃にアラートベイの製材所に勤務し、1928 年頃にはウッドファイバーのパルプ製造所で、1932 年頃にはポートムーディの製材所で働いていた。その後、1930 年代後半から 1941 年にかけては、勤務先をポートアルバーニの製材所へと移している。
- (18) 本名・中野勝見 (1901～没年不詳)。福岡県築上郡椎田町 (現・築上町) 出身。弟の中野武雄 (号・雨情) は、1964 (昭和 39) 年歌会始 (御題「紙」) に寄せられた 46,886 首から選歌 12 首の一つに選出され、カナダ在住者として初めて選歌に入った。
- (19) 俳句や短歌などの作品を選ぶ際に用いられる、匿名による互選方式の一つ。
- (20) 本名・島田徳蔵。福岡県出身 (1903～没年不詳)。カスロー収容所を経て、1945 年日本に帰国。
- (21) 双葉会という名称は、両町の地理的關係性を象徴しているものと考えられる。
- (22) 可能性として、本名・勇吉。広島県出身。カンバーランドにて農業および雑貨店を営む。
- (23) 可能性として本名・敬二。和歌山県出身。ロイストン製材所に勤務。

- (24) 長野県小県郡小泉村（現・上田市小泉）出身（1978～1968）。
- (25) 静岡県安倍郡不二見村村松（現・静岡市清水区村松一丁目）出身（1902～1984）。タシメ収容所における俳句クラブの中心メンバーの一人。戦後はケベック州ファーンナムに移住した。
- (26) 本名・竹田だい（大）。竹田寅雄（註25）の妻。静岡県安倍郡不二見村村松（現・静岡市清水区幸町）出身（1908～没年不詳）。
- (27) 末永（2006）によれば、1938年時点における漁業就労人口は1,084人で、伐木・製材・パルプ製造の木材関係業者に次いで二番目に多い業種であった。
- (28) なかでもイチゴの栽培は盛んで、品質の高さと生産量の多さから市場でも高い評価を受けていた。
- (29) メンバーに、引地とめ（若子）、伊藤珍太、沢鉄治郎（喜柿）、小林ひろ（葉子）、太地豊吉（峰月）、太地恵以（恵）、小林幾江（みどり）、千葉善七（孤月）、竹中清松（竹嵐）、宍戸英次郎（春雨）など。
- (30) 例えば、小林伝兵衛（芳翠）はコモックスバレー「双葉会」の選者（『大陸日報』1932年7月11日号）、伊藤珍太はオーシャンフォールズ「早苗会」の選者（『大陸日報』1932年3月23日号）を務めている。
- (31) 青葉会創立40周年を記念して、『ニュー・カナディアン』紙上で記念祝賀句の募集が行われた。これには、カナダ在住者のみならず日本に帰国した俳句愛好者からも祝吟が寄せられた（1962年5月2日付）。
- (32) 滋賀県出身（1875～1959）。スローカン収容所を経て、トロントに移住。
- (33) 滋賀県出身（1892～1973）。カスロー収容所を経て、トロントに移住。
- (34) 末永, 2006, pp. 4-5.
- (35) 1924年3月21日に『日刊民衆』（旧・『労働週報』）が創刊されたことにより、『大陸日報』（1907年6月22日創刊）、『加奈陀日々新聞』（1923年9月9日創刊、旧・『加奈太新報』）と合わせて、三紙鼎立の体制が確立した。
- (36) 滋賀県蒲生郡金田村西庄（現・近江八幡市西庄町）出身（1878～1951）。バンクーバー市内で時計店を営む。スローカン収容所、バイファーム収容所を経て、オンタリオ州ハミルトンに移住。
- (37) 広島県出身（1878～1953）。バンクーバーで不動産事業に着手するも失敗。その後は、ラスキンで山林伐木業の人夫長（ボス）を務めた。サンドン収容所、バイファーム収容所を経て、ケベック州モントリオールに移住。
- (38) 東京市麹町区紀尾井町（現・東京都千代田区紀尾井町）出身（1879～1930）。1903年、カナダに渡る。『加奈太新報』記者を経て、『大陸日報』の記者。『加奈陀の魔窟』の著者として知られる。歌人・石上露子の若き日の「不滅の恋人」。
- (39) 宮城県古川町（現・大崎市古川）出身（1885?-1961）。京都帝国大学を経て東京帝国大学動物学専攻卒業後、同大学院理科に進学。動物学研究者にして、東京動物学会『動物学雑誌』の編集委員を務める。シアトルに留学後、バンクーバーに留まり、『大陸日報』主筆を経て、『日刊民衆』の編集主任。開戦直前の1941年3月に帰国。
- (40) 『大陸日報』, 1930年3月29日号。
- (41) 山梨県出身（1885～1965）。スローカン収容所を経て、オタワに移住。
- (42) 会の名称は長田正平（波韻）の命名によるとされる（『大陸日報』, 1930年3月29日号）。
- (43) 岡山県出身（1892～没年不詳）。『大陸日報』支配人。大陸日報社社長・山崎寧の姪と結婚し、後に大陸日報社社長となる。ニューデンバー収容所を経て、トロントに移住。
- (44) 高知県出身（1890～1946）。『大陸日報』記者。スローカン収容所からトロントへ移住途上に急

逝した。

- (45) 「木の芽会」という名称は、「あじろ会」の第 1 回『大陸日報』紙上コンテストの季題「木の芽」に由来するものと考えられる。『大陸日報』1927 年 1 月 20 日号によれば、バンクーバーの「あじろ会」は同年 1 月 15 日に第 3 回句会を開催し、その際に「鳥の子」こと田村（鈴木）俊子について、記録係の山本倫由が「四句に合計十点を得て、その豊かなる詩才を示す」と評している。そのうちの一句を以下に示す。
- 雨明るし木々の芽軽やかにのび　鳥の子
- (46) 東京府下豊多摩郡渋谷村（現・東京都渋谷区）出身（1886～没年不詳）。順天堂病院看護科を卒業後、1909 年にビクトリアに渡る。スローカン収容所を経て、ケベック州モンリオールに移住。著書に『スロー湖畔の思い出』（甲山清子名義、1959 年、ゆり歌会岡山支部発行）がある。
- (47) 『大陸日報』1927 年 3 月 29 日号（面）・30 日号（2 面）に、甲山清（小百合）による「うき草句会報」が掲載されている。3 月 21 日には、ビクトリアのピーコンヒル公園を散策しながら句作を行ったと記されており、折しも春雨に見舞われたため、即席の題として「春雨」に取り組んだ様子などが描かれている。
- (48) 『大陸日報』1941 年 11 月 14 日号（6 面）に掲載された、同月 9 日に開催された句会の様子と作品を伝える弥生（本名不詳）による「うき草句会だより」が、確認できる限り最後の掲載となっている。
- (49) Adachi, 1976, p. 47.
- (50) 須村生（スティーブストン、1927 年 3 月 25 日号）、森本参木（スティーブストン、1927 年 3 月 26 日号）、春紅（ナナイモ、1927 年 9 月 22 日付）、一美（スキーナ、1932 年 6 月 21 日）。
- (51) 『大陸日報』に先立ち、1903 年 11 月 3 日には鍋木五郎によって活版印刷による最初の邦字新聞『加奈太新報』が発刊されている（1904 年 3 月 1 日に日刊化）。
- (52) 富山藩富山町（現・富山県富山市）出身（1870～1941）。1888 年に渡米し、米国サンフランシスコに渡航。1894 年にはカナダ・バンクーバーに移住し、その後長年にわたり同地を拠点に活動した。1932 年、日本に帰国。1941 年、静岡県興津にて死去。
- (53) 新保ほか, 1991, p. 49.
- (54) 新保, 1986, pp. 86-91; 新保ほか, 1991, p. 56; 和泉, 2020, p. 79.
- (55) 新保, 1986, pp. 92-95; 田村, 1992, p. 106.
- (56) 『大陸日報』, 1920 年 4 月 9 日号（5 面）。
- (57) 愛知県渥美郡老津村（現・豊橋市老津町）出身（1886～1933）。『萬朝報』元記者。1918 年、山崎寧の招きでカナダに渡る。『大陸日報』主筆を経て、『日刊民衆』を創刊。カナダ日本人の労働組合活動を指導した。
- (58) 東京府東京市浅草区蔵前町（現・東京都台東区蔵前）出身（1884～1945）。小説家。代表作に『木乃伊の口紅』（1914）がある。1909 年に田村松魚と結婚したが、1918 年に鈴木悦を追ってカナダ・バンクーバーに移住（松魚とはのちに離婚し、悦と再婚）。1936 年に悦が死去したのを機に帰国し、その後上海へ渡り、現地で死去した。
- (59) 長野県出身の小宮山高彦（1885～1970）と思われる。バンクーバー市内のカナダ商業銀行（Bank of Commerce）にて用務員として勤務。レモンクリーク収容所、スローカン収容所、ニューデンバー収容所、ケベック州ファーナムを経て、その後モンリオールに移住。
- (60) 長野県出身（1890～1935?）の小宮山扶三たけみと思われる。夫は高彦（註 59）。歌人。太田水穂「潮音社」門下。1910 年代～20 年代初期にかけてバンクーバーで活動していた短歌作家の集団「あ

かつき会」の中心メンバー。1927年に同地で結成された「あかね会」においても中心的な役割を担った。作家・田村俊子と親交があり、扶三が病床にあった際や死去した際には、俊子が追悼の句を詠んでいる。

- (61) 出身・生没年不詳。米国・南カリフォルニア大学で学んだ後、桑港新世界新聞に入社。カナダへの入国時期は不明。真宗大谷派の開教師であり、戯曲作家としても活動した。帰国後は幼児教育に力を注ぎ、1973年に設立された敬愛学園（大阪府茨木市）では初代理事長を務めた。
- (62) 『大陸日報』1927年1月20日号（2面）。
- (63) 『大陸日報』1928年1月1日号（6面）。第四回応募句の際に、194名から836の投句があった。
- (64) 「和察知吟社」の名は、ユタ州にあるワサッチ山脈に由来する。「和察知吟社俳句」の掲載は、『南柯』1918（大正7）年2月号から1919（大正8）年10月号にかけて確認できる。
- (65) 『大陸日報』1930年3月15日号（1面）、山本倫由による寄稿「長田さんのことども」。
- (66) 1941年、武田鶯塘の七回忌に際してオーシャンフォールズの早苗会を中心に日系俳人から追悼句を募った際にも、佐野の名がその中に見られる（『大陸日報』1941年8月2日号（6面））。
- (67) 本名・勘一（1909～2003）。カナダ生まれ（本貫は滋賀県）。戦前はパウエル街の誠心堂（薬局）に勤務していた。戦後、オンタリオ州トロント郊外ストウビル（Stouffville）に移住した。
- (68) カナダで出生し、幼少期に日本の親族のもとに預けられて日本で教育を受けた後、再びカナダへ戻った日系移民二世を指す用語。
- (69) 本名・三郎（1908～没年不詳）。広島県出身。アルバータ州レスブリッジに移住した。
- (70) 本名・貞蔵（さだぞう）（1905～没年不詳）。鹿児島県出身。戦後、日本に帰国。
- (71) 本名・十郎（1899～没年不詳）
- (72) 本名・利三郎（りさぶろう）（1886～没年不詳）。和歌山県出身。『大陸日報』の印刷工。スローカン収容所を経て、日本に帰国。
- (73) 本名・輝治。生没年不詳。宮城県出身。
- (74) 本名・一三（いちぞう）または梅太郎。北海道出身。
- (75) 本名・庄太郎（1883～没年不詳）。宮城県出身。カスロー収容所を経て、戦後日本に帰国。

---

## <引用文献>

- 東聖子、藤原マリ子編．(2012).『国際歳時記における比較研究—浮遊する四季のことば』笠間書院．
- 天野剛至、ジャン＝ピエール・アントニオ、ジャクリーン・ピアース．(2025).「強制収容期における在カナダ日本人移民の俳句活動—カスロ、ニューデンヴァー、ローズベリー収容所を中心に」『常葉大学外国語学部紀要』, 41, 19-42.
- アンダーソン、バネディクト．(1987). 白石隆・白石さや訳、『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』リプロポート．[= Anderson, B. (1983). *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism*. Verso.]
- 和泉真澄．(2020).『日系カナダ人の移動と運動—知られざる日本人の越境生活史』小島遊書房．
- エリアス、ノルベルト．(1969). 赤井慧爾、中村元保、吉田正勝訳、『文明化の過程 上—ヨーロッパ上流階級の風俗の変遷』、波田節夫、溝辺敬一、羽田洋、藤平浩之訳、『文明化の過程 下—社会の変遷／文明化の理論のための見取図』法政大学出版局．[= Elias, N. (1939). *über den Prozeß der Zivilisation*. Verlag Haus zum Falken.]

- 蒲原宏 . (2020). 『畑打って俳諧国を拓くべし—佐藤念腹評伝』 大創パブリッシング .
- 久富木原玲 . (2020). 「日本の俳諧・俳句からブラジルのハイカイへ—日本文化の特異性と新展開」 『愛知県立大学文学文化財研究所紀要』 , 6, 138-120.
- 久富木原玲 . (2024). 「熱帯歳時記「アマゾン季寄せ」の特色と意義—『ブラジル歳時記』との比較を通して」 『愛知県立大学日本文化学部論集』 , 15, 158-138.
- 桑井輝子 . (2005). 「在米日本人『移民地芸』 覚書 (2) 「我が名を」 永遠に一自由律俳句と直原敏平」 『SELLA』 , 35, 15-26.
- 桑井輝子 . (2011). 「短歌・俳句・川柳が詠むアメリカ抑留所—JICA 横浜海外移住資料館所蔵短詩型文学資料紹介」 『JICA 横浜 海外移住資料館研究紀要』 , 5, 76-88.
- 桑井輝子 . (2012). 「下山逸蒼と『層雲』 再考」 『百合女子大学研究紀要』 , 48, 35-51.
- 桑井輝子 . (2015). 「北米俳句の一世紀—レニア吟社の歩みを中心に」 『言語・文学研究論集』 , 15, 1-12.
- クラウリー, シェーロ . (2012). 「アメリカの俳句における季語」 マカート純子訳, 東聖子・藤原マリ子編 『国際歳時記における比較研究—浮遊する四季のことば』 笠間書院, 155-179.
- グラムシ, アントニオ . (1978). 石堂清倫訳, 『グラムシ獄中ノート』 三一書房. [= Gramsci, A. (1977). *Quaderni del carcere*, a cura di Valentino Gerratana, Einaudi.]
- 坂本宮尾 . (2019). 「この道をかかゆく 近代女性俳人伝 (5) 異郷で俳句を詠む—スコット沼薨女」 『俳壇』 , 36 (5), 168-173.
- 白石佳和 . (2021a). 「季語をめぐる国際ハイクのオーセンティシティについての考察：ブラジルハイカイにおける増田恆河の仲介行為を例に」 『人間社会環境研究』 , 42, 49-65.
- 白石佳和 . (2021b). 「『自然諷詠』 と Kigologia をめぐって—日系俳句とブラジルハイカイの仲介者増田恆河の果たした役割」 *Múltiplas faces de pesquisa japonesa internacional: integralização e Convergência*, 251-266.
- 白石佳和 . (2022). 「ブラジル日系俳人増田恆河の連句活動の意義」 『金沢大学国語国文』 , 47, 92-78.
- 新保満 . (1986). 『カナダ日本人移民物語』 築地書館 .
- 新保満, 田村紀雄, 白水繁彦 . (1991). 『カナダの日本語新聞—民族移動の社会史』 PMC 出版 .
- スエナガ, エウニセ . (2018). 「ブラジルのハイクとハイカイ、そしてハイカイ集『百枚の花びらの菊』について—翻訳・模倣・オリジナリティー」 久富木原玲訳, 『物語研究』 , 18, 218-203.
- 末永國紀 . (2006). 「カナダ・ヴァンクーヴァーにおける日系カナダ人の居住地域と営業活動—1938年の調査と滋賀県出身者を中心に」 『経済学論叢』 57(4), 1-56.
- 大陸日報社 . (1907-1941). 『大陸日報』 . (UBC 図書館オープンコレクション) <https://open.library.ubc.ca/collections/tairikunipp>
- 高木 (北山) 眞理子 . (2009). 「俳句・短歌・川柳を通してみる一世女性の心情—ハワイ社会史の一ページとして」 『愛知学院大学文学部紀要』 , 38, 1-10.
- 田村紀雄 . (1992). 『鈴木悦—カナダと日本を結んだジャーナリスト』 リプロポート .
- デュルケム[ー]ム . (1975). 古野清人訳, 『宗教生活の原初形態』 上・下, 岩波書店. [= Durkheim, É. (1912). *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie.*]
- 藤原マリ子 . (2012). 「ブラジルの歳時記—成立の経緯と特徴」 東聖子・藤原マリ子編 『国際歳時記における比較研究—浮遊する四季のことば』 笠間書院, 386-408.
- 古川富章 . (2023.9). 「下山逸蒼と直原敏平—『レモン帖』 終刊号と『トシヘー』 創刊号」 『日本古書通信』 , 1130, 18.

- ブルデュー, ピエール. (1990). 石井洋二郎訳, 『ディスタンクシオン』 1-2, 藤原書店. [= Bourdieu, P. (1979). *La distinction: critique sociale du jugement*. Éditions de Minuit.]
- ブルーマー, ハーバート. (1991). 後藤将之訳, 『シンボリック相互作用論—バースペクティヴと方法』 勁草書房. [= Blumer H. (1969). *Symbolic interactionism: Perspective and method*. University of California Press.]
- ミード. (1973). 稲葉三千男, 滝沢正樹, 中野収訳, 『精神・自我・社会』 青木書店. [= Mead, G. H. (1934). *Mind, self, and society: From the standpoint of a social behaviorist* (C. W. Morris, Ed.). University of Chicago Press.]
- 山田閨子. (2008). 「望郷の月—スコット沼蘂女」 角川学芸出版編 『女性俳句の出発』 角川学芸出版, 207-218.
- Adachi, K. (1976). *The enemy that never was: A history of the Japanese Canadians*. McClelland and Stewart.
- Antonio, J.-P., Amano, T., & Pearce, J. (2025). Haiku activities of Japanese immigrants in Canada during the internment period: Ryukichi “Shunko” Miyake and the Sandon and Slocan haiku clubs. *Journal of Suzuka University and Suzuka Junior College* 8, 1-20.
- Pearce, J. & Antonio, J.-P. (2020). Haiku in Tashme: The legacy of Sukeeo “Sam” Sameshima. *British Columbia History*, 53 (1), 5-12.

# Deepening Autumn: A Sociological Study of Prewar Japanese Canadian Haiku Communities

Tsuyoshi Amano (Tokoha University)

This study examines the sociological significance of haiku activities among Japanese immigrants in pre-World War II British Columbia, Canada. While previous scholarship has emphasized literary expression or the localization of *kigo* (seasonal keywords), this research repositions haiku as a socio-cultural practice through the theoretical frameworks of Émile Durkheim's "collective conscience," Pierre Bourdieu's "cultural capital," and Antonio Gramsci's "hegemony." By analyzing *ginsha* (haiku groups) formed within industrial settlements—including mill camps, farming communities, and urban commercial districts—alongside the Vancouver-based *Ajiro-kai* and the Japanese-language newspaper *Tairiku Nippo*, this study demonstrates that haiku was far more than a recreational pursuit. It functioned both as a ritual practice fostering communal solidarity and as a mechanism for constructing cultural hierarchies and elite identities within the ethnic community. Furthermore, participation in Japanese literary magazines enabled symbolic affiliation with the homeland and affirmed the cultural refinement of immigrant poets. Ultimately, this study reveals haiku as a dynamic medium through which identity was reconstructed and social order maintained within the prewar Nikkei diaspora.

Keywords: Japanese Canadians, haiku, collective conscience, sociocultural status, cultural refinement

---

# 学術研究プロジェクト一覧

学術研究プロジェクトは学術委員会において企画・検討され活動している。ここでは2018年度～現在までの学術研究プロジェクトの研究概要をご紹介します。

\* 2018年度～2023年度のプロジェクトメンバー所属および肩書きはプロジェクト開始時のもの

## ■ 2018年度～2020年度

---

### (1) 第二次世界大戦直後に日本に「送還」された日系カナダ人の日加文化交流・日加友好関係増進への貢献

---

#### 【概要】

1942年、カナダ政府は、カナダ西海岸に居住していた21,000人の日系カナダ人を敵性外国人として内陸部に強制移動した。それらの日系人は、戦後、カナダに留まる者は「ロッキー山脈の東」へ移動、それを望まない者は日本に「送還」、というカナダ政府の通達による選択を迫られた。ロッキー山脈の東への移動を拒否した日系人は、カナダ生まれであっても日本に送られることになり、これは「国外追放」であると言われ、大きな混乱を生んだ。結果的には約4,000人の日系人が、戦争で疲弊した日本に到着したと記録されている。これまでの調査・研究により、これら4,000人の日系人が戦後の日本でどのように受け入れられたか、その後、定着したか、カナダへ戻ったか、についてはかなり把握されている。これらの日系人が日本との絆をどのように意識し、日本とカナダの関係にどのように関わろうとしたのかについて調査する。

#### 【プロジェクトメンバー】

代表 飯野正子（津田塾大学理事・名誉教授）  
高村宏子（元東洋学園大学教授）  
原口邦紘（元外務省外交史料館副館長）

---

### (2) 転換期における移住と日系社会の変容（1920～1950年代）

---

#### 【概要】

ベルサイユ体制からワシントン体制そして総力戦体制から冷戦体制の構築に至る時代の転換期における移住と、南北アメリカ大陸諸国における日系社会の変容とを、二国間関係や戦争といった枠組みを越えた多国間関係の史的展開の中に再配置し、参加メンバーがこれまで蓄積してきた各地域の個別事例研究を基礎に議論を重ねることを通じて、移住とエスニック・コミュニティとしての日系社会の変容について、新たなる研究地平の再構築を試みる。

**【プロジェクトメンバー】**

- 代表 柳田利夫（慶應義塾大学名誉教授）  
赤木妙子（目白大学教授）  
木村昌人（渋沢栄一記念財団研究部長）  
糸井輝子（白百合女子大学教授）  
比嘉マルセーロ（フェリス女学院大学教授）  
三澤健宏（津田塾大学教授）  
三田千代子（前上智大学教授）  
柳下宙子（元外務省外交史料館閲覧室長）

**(3) 海外交流・渡航・移住の視点からみるグローバルヒストリー****【概要】**

本プロジェクトは、前プロジェクト「海外移住 150 年を振り返る：移動する人の視点からみる国際関係」の問題意識や視座を継承しつつ、対象時期を幕末・明治初期に広げ、海外交流・渡航・移住をグローバルヒストリーに位置づけることを目的としている。従来の研究では、日米和親条約（嘉永 7 年 3 月 3 日・1854 年 3 月 31 日）以前の海外交流や渡航を偶発的・単発的にとらえ、ハワイに「官約移民」が渡航した 1885 年を「日本人移民元年」と位置づけ、そして「移民」を狭義にとらえるナショナルヒストリーの枠内で考察する傾向があった。そこで、本プロジェクトは、グローバルな人やモノの交流、移動との連鎖の観点から、多様な移住の過程で、日本人は「外国人」として、また「人種」として、どのような位置づけがなされていったのか、日本人や日本へのまなざしの変容の背景には何があったのか等について検証する。従来の研究では見落とされてきた初期の海外交流・渡航・移住の歴史について、国家間の「国際関係」の編成過程を背景とした、幕末・明治の初期移住の歴史像を解明し、研究会、公開セミナーや出版等の形で、本プロジェクトの研究成果を広く社会にアウトリーチすることとしたい。

**【プロジェクトメンバー】**

- 代表 小澤智子（武蔵野美術大学准教授）  
飯野正子（津田塾大学理事・名誉教授）  
北脇実千代（日本大学准教授）  
糸井輝子（白百合女子大学教授）  
菅美弥（東京学芸大学教授）  
長谷川寿美（慶應義塾大学非常勤講師）

---

## (4) 在日ラテン系二世の社会参加に関する研究

---

### 【概要】

本プロジェクトは、日本デカセギ25年の節目にあたる2015年から2017年までの3年間にわたって実施した学術研究プロジェクト「在日ラテン系二世の多角的分析」を通して得た知見と体験を新たな研究に生かしつつ、持続的に発展させるために提案するものである。前プロジェクトでは、「日本、南米、もしくは両地をまたにかけて、あるいは、越境という概念そのものさえも超えてゆきつつ成長している出稼ぎ二世の世代」を主たる対象として、日本各地のデカセギ南米人集住地域での調査や、JICA 横浜海外移住資料館を主会場としたイベント（ワークショップやパネルディスカッション）の場における参与観察を実施し、在日ラテン系二世たちの抱える問題や意識をあぶり出してきた。越境する彼ら在日二世のアイデンティティの問題は先行研究でもたびたび指摘されてきたが、その揺らぎは、空間的のみならず時間的なそれも含んでいると考えられ、前プロジェクト内で実施してきた「先祖探しワークショップ」のようなイベントは、研究の場であると同時に、彼らと日本とを繋ぐ役割をわずかでも果たすことが期待できるだろう。

### 【プロジェクトメンバー】

代表 赤木妙子（目白大学教授）  
アナ・スエヨシ（宇都宮大学准教授）  
拝野寿美子（神奈川大学非常勤講師）  
柳田利夫（慶應義塾大学名誉教授）

## ■ 2021年度～2023年度

---

### (1) 日系カナダ人の経験を通してみる戦後の日加関係

---

#### 【概要】

2020年度まで継続して調査・研究してきたテーマ——第二次世界大戦後に日本に「送還」された日系カナダ人の日加文化交流・日加友好関係増進への貢献——を、さらに進め、文化面・学術面から戦後の日加関係を考察する。

#### 【プロジェクトメンバー】

代表 飯野正子（津田塾大学理事・名誉教授）  
高村宏子（元東洋学園大学教授）  
原口邦紘（元外務省外交史料館副館長）  
木野淳子（東京外国語大学兼任講師）

---

## (2) 個人記録と移民史記述に関する多角的検討

---

### 【概要】

個々の移民にかかわる日記・記録・書簡・創作といった一次史料としての個人記録の収集・整理・分析作業を中心に据えつつ、個人記録を公文書等の他の一次史料群や二次的な刊行物と接合させることにより、移民史記述へと昇華させてゆく方法について、これまでの研究蓄積を総合的に確認し、多角的に分析する。この作業を通じて、一次史料としての個人記録収集・整理・利用の精緻化と、移民史記述に有機的に組み込んでゆく方法の構築とを試みる。

### 【プロジェクトメンバー】

- 代表 柳田利夫（慶應義塾大学名誉教授）  
    糸井輝子（白百合女子大学名誉教授）  
    比嘉マルセーロ（フェリス女学院大学教授）  
    赤木妙子（目白大学教授）

---

## (3) 海外への移動・移送と「絆」の視点からみるグローバルヒストリー

---

### 【概要】

本プロジェクトの目的は、前プロジェクト「海外交流・渡航・移住の視点からみるグローバルヒストリー」の問題意識や視座を継承しつつ、日本から海外（北米、ハワイ、オーストラリア）への、あるいは海外から日本への移動・移送が生み出す「絆」、そしてその「絆」に影響を受けてさらなる移動・移送へと続く現象を、グローバルヒストリーに位置づけることである。とくに、近年の研究によって解明されつつある移動の重層性や連続性に焦点を当て、「絆」の多重的な部分を明らかにする計画である。また、移動に多大な影響を与える法的な制度についても積極的に議論に含めていくつもりである。本プロジェクトが完了する 2024 年は、アメリカの 1924 年移民法（いわゆる「排日移民法」）の成立から 100 年目の年であり、移民にかかわる法的措置とその影響にあらためて注目することは意義深いと考えている。

従来の研究では、日米和親条約（嘉永 7 年 3 月 3 日・1854 年 3 月 31 日）以前の海外交流や渡航を偶発的・単発的なものとみなし、ハワイに「官約移民」が渡航した 1885 年を「日本人移民元年」と位置づけ、「移民」を狭義にとらえるナショナルヒストリーの枠内で移動・移送を考察する傾向があった。そこで、本プロジェクトでは、19 世紀半ばから 20 世紀半ばまでの人、もの、情報やリソースの移動とその連鎖について、移民法などの

---

制度面と、個人の言動（人々の主体性）の両者に光を当て、とくに移動する人を支える「絆」について、さらなる検証を進めたい。

【プロジェクトメンバー】

代表 小澤智子（武蔵野美術大学教授）  
飯野正子（津田塾大学理事・名誉教授）  
桑井輝子（白百合女子大学名誉教授）  
北脇実千代（日本大学教授）  
菅美弥（東京学芸大学教授）  
長谷川寿美（慶應義塾大学非常勤講師）

---

#### （4）海外移住資料館のリニューアル展示を活用した『学習活動の手引き』の改訂

---

【概要】

JICA 横浜海外移住資料館は、開館当初より日本の若い世代に海外移住の足跡や役割について理解を深めてもらうことを目的に、同館の展示や資料を活用した指導者向けの『学習活動の手引き』の作成を行ってきた。初版は2005年に作成され、2007年には展示の他、開発した移民学習教材（カルタ、紙芝居等）の活用も含め、それらを活用した『学習活動の手引き』の改訂を行った。今（2022）年、資料館展示が、20年ぶりにリニューアルされたことをきっかけに、『学習活動の手引き』の再改訂が求められている。

そこで、本プロジェクトでは、リニューアルされた展示、及びこれまで開発されたカルタ、紙芝居、双六などの学習教材を活用した『学習活動の手引き』の再改訂を行う。研究期間は2022～2023年度の2年間とし、並行してリニューアル展示を活用したデジタル教材開発の可能性についても検討する。

【プロジェクトメンバー】

代表 森茂岳雄（中央大学名誉教授）  
中山京子（帝京大学教授）  
織田雪江（同志社中学校教諭）  
中澤純一（東京未来大学講師）  
津山直樹（東京外国語大学非常勤講師）  
東優也（海老名市立東柏ヶ谷小学校教諭）  
吉住京子（川崎市立西高津中学校教諭）

---

**■ 2024 年度～ 2026 年度**

---

**(1) 日系カナダ人の経験を通してみる戦後の日加関係**

---

**【概要】**

本プロジェクトでは、「日加関係において日本人移民・日系人が果たした役割」のテーマで、外交史料館や新たに国会図書館移民資料室など類縁機関の所蔵史料及び、新たに判明した、戦後、日本に「送還」帰還した日系人生存者（80-90 才代）※に対する聞き取りを通じて個人資料の発掘に努力する。そして、それらの史資料を使用して、日加関係における日系人・日本人移民に関し、これまで以上に視野を広げ、扱う時期を長くした（戦前から戦後へ繋がる）テーマでの研究を深めたい。

これまで本プロジェクトが行ってきた戦後の日系カナダ人および戦後の日本人カナダ移住に関する研究から、戦前との断絶面だけではなく戦後への継続面も見えてきた。よって、今後は、カナダ政府の対日本人移民政策の戦前から戦後への一貫性や、戦前からの日本人移民が、戦後の日本人カナダ移住において果たした役割等にも注目し、戦前からの日加関係の推移の中で、研究を深めたい。

その成果を移住資料館『研究紀要』等で発表するとともに、収集した史料を今までの寄贈史料に加えることによって、広く研究に資するための更に充実した内容にしたい。

※最近のカナダ・ブリティッシュ・コロンビア州政府日系カナダ人補償プログラムによる、「日系カナダ人生存者健康福祉基金」への助成金申請を通じて、新たに所在が判明した日本在住の生存者。

**【プロジェクトメンバー】**

代表 飯野正子（津田塾大学理事・名誉教授）  
高村宏子（元東洋学園大学教授）  
原口邦紘（元外務省外交史料館副館長）  
木野淳子（東京外国語大学兼任講師）

---

**(2) 「帰国」をめぐる個人史 ー祖国・故郷・家ー**

---

**【概要】**

日米戦争を挟む、世界恐慌からはじまる 1930 年代から戦後高度成長期へ向かう 1950 年代における、日本人移住者及び二世層の「帰国」をめぐる言説・意識と実際の行動について、一次史料に基づく史的事実を再構成する作業に依拠する個人史に視点を据えて分析する作業をメンバーがそれぞれ進め、その途中経過について順次報告し、プロジェクトテーマにまとめあげてゆくための議論を深める。

**【プロジェクトメンバー】**

代表 柳田利夫（慶應義塾大学名誉教授）  
糸井輝子（白百合女子大学名誉教授）  
比嘉マルセーロ（フェリス女学院大学教授）  
赤木妙子（目白大学教授）

---

### (3) 出移民・入移民の構造変容に関わる研究

---

#### 【概要】

本プロジェクトは、日本において進行する出移民・入移民をめぐる構造変容をどのように理解し、さらにそこで得られた知見を将来的に海外移住資料館の展示にどのように反映するのか検討することにある。

日本は近代以降、移民送出国であったが、とりわけ1980年代以降、その様相が変わり、移民受入国へと変化し始めた。こうした構造変容には、日本の国際的な位置の変化と資本主義経済の展開が介在している。この構造変容の過程に着目することで、人の移動に関わる経済的な操りの糸と、これと連動する制度・政策の動きが浮かび上がる。本研究はこの構造変容とそれをとりまく諸要因、ならびに構造変容の諸影響を、抽象論としてではなく、その過程を生きた人々の営みに着目することで、生活史の視角から分析し、そこから構造変容に関わるマクロな様相を見通そうとするものである。

本研究では、この構造変容を生きた人々に関係する個人・コミュニティ・行政の資料調査、および関係者からの聞き取り調査を行う。具体的には、次の二つの局面に焦点を当てる。

まずひとつは、1990年代以降の、いわゆる「外国人労働者」の日本への流入過程に着目し、日系人の日本への出稼ぎ・定住をめぐる生活史を中心課題として、資料調査と聞き取り調査を行う。その上で、日系人以外の「外国人労働者」が諸制度の下で増加し、いわば多様化が進む今日の状況に即して考えたとき、日系人の日本への出稼ぎ・定住の経験との連続性と断絶面の双方を分析するべく、必要に応じて調査対象を拡大する。

もうひとつは、この構造変容と対照させる形で、戦前に日本から海外へ渡航した「移民」が、その過程で獲得した知見を活かしながら、後年に移民送出や植民政策に関わったケースに着目する。この対象事例を置くことにより、移住を取り巻く諸状況に対する理解を豊富化するとともに、移民史をめぐる、これを規定する国際関係や資本主義の変容と関わらせて置き直し、移民の送出国から受入国への変容までを含めた通史的な理解の創出につなげることを試みる。

#### 【プロジェクトメンバー】

- 代表 原山浩介（京都大学大学院教授）  
朝日祥之（国立国語研究所教授）  
坂梨健太（京都大学大学院准教授）  
小嶋茂（公益財団法人海外日系人協会学芸担当）

---

#### (4) 1940-50 年代の北米・ハワイにおける日本人移民の経験を再考する

---

##### 【概要】

本プロジェクトでは、前プロジェクト「海外への移動・移送と絆の視点からみるグローバルヒストリー」で得られた手法と考察を基盤とし、太平洋戦争中と戦前・戦後の時代を北アメリカやハワイで経験した日本人移民・移住者とその子孫に関する研究調査を発展させる予定である。前プロジェクトでは、日本の開国前も視野に入れることで、日米関係や日本人移民に起こった事象にみられる「絆」を従来の研究よりも長いスパンで、より広い見地から捉え直すことを試み、成果の一部を『研究紀要』に投稿済み、もしくは今年度、投稿予定である。こうした蓄積をもとに、本プロジェクトでは太平洋戦争を中心とする前後の時代を従来の研究よりも長く広く捉えて、日本人移民・日系人の経験に光を当て直す。これは、日米関係史、日本人移民史、北アメリカ・ハワイ研究において蓄積のある飯野正子と糸井輝子の研究を基盤としつつ、アメリカ合衆国の日本人移民・日系人に対する「強制収容」とその前後を新たな視点で再考する試みである。国際関係の危機という制限された状況における人びとの工夫や、多様な活動の創出にかかわる交渉、そしてその限界を前後の連続性や他との関係性の視点から見直すことで、従来の研究では看過されてきた歴史事象を発見し、新たな知見を得ることが期待される。それは同時に、国際関係の悪化が危惧される現代においてはとくに意義深い研究になると考えている。具体的には、アメリカにおける強制収容政策に対する一連の議論の見直し、収容所内外の日本人移民・日系人の日常実践、日本人移民による戦後の日本救済活動などから研究調査を開始したいと考えている。

##### 【プロジェクトメンバー】

- 代表 小澤智子（武蔵野美術大学教授）  
飯野正子（津田塾大学理事・名誉教授）  
糸井輝子（白百合女子大学名誉教授）  
北脇実千代（日本大学教授）  
長谷川寿美（フェリス女学院大学非常勤講師）

---

## **(5) 多文化共生社会に向けた教材化の可能性と魅力 —人の移動と生成された固有の文化からの学びを通して—**

---

### **【概要】**

海外から日本に移り住む人々が増加している現在、教育分野における多文化共生社会に向けた取り組みは喫緊の課題である。多文化社会において、「平等の権利を伴った生活形態の共存とは、すべての市民が差別を受けることなく、ある文化的伝統の世界の内部で成長し、また自分の子どもたちをそのなかで成長させる機会を保証することを意味する」（ユルゲン・ハーバーマス）といわれる。このような機会保障のためにも、多様な文化から学び、教育分野における多文化共生社会に向けた取り組みに活かして行くことは有意なことと考えられる。

そこで本研究では、「人の移動」に伴い継承されている多様な文化から学び、尊重しつつ教材化の可能性と魅力を探り、「差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会」を築くための一助とすることを目的とする。

3年間を通して、北海道におけるアイヌ文化、小笠原諸島における南洋踊り等、固有の文化継承の場と関連する施設等を視察し、得られた知見を論文としてまとめる。さらに、教材化の可能性と魅力を探り、「差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会」を築くための一助としていく計画である。

### **【プロジェクトメンバー】**

代表 福山文子（専修大学准教授）

中山京子（帝京大学教授）

---

## **(6) 海外移住資料館『学習活動の手引き』（第三訂版）の普及・実践及び教材開発**

---

### **【概要】**

JICA 横浜海外移住資料館は、開館当初より日本の若い世代に海外移住の足跡や役割について理解を深めてもらうことを目的に、同館の展示や資料を活用した指導者向けの『学習活動の手引き』の作成を行ってきた。2022年度の海外移住資料館リニューアルに伴い、2022年度～2023年度の学術研究プロジェクト（研究代表 森茂）において「海外移住資料館のリニューアル展示を活用した『学習活動の手引き』の改訂」を行い、プロジェクトの成果として『学習活動の手引き（三訂版）』を発行した。

本『学習活動の手引き（三訂版）』は、主に学校現場の先生方の資料館見学や授業づくりの参考になるように、海外移住資料館の展示・資料、およびカルタや紙芝居などの

教材を活用した活動案を構想している。本プロジェクトでは、『学習活動の手引き（三訂版）』を、学校での授業はもとより、NGO/NPO 関係者などの授業・ワークショップでの更なる活用・普及を目指す。

さらに、2022～2023 年度の研究プロジェクトの懸案事項であった海外移住資料館展示を活用したデジタル教材およびアナログ教材の開発についても検討・作成する。

**【プロジェクトメンバー】**

- 代表 中澤純一（東京未来大学講師）
- 津山直樹（創価大学講師）
- 岡本龍治（私立大学非常勤講師）
- 高野慎太郎（東京大学教育学部附属中等教育学校教諭）
- 岩船尚貴（柏崎市立南中学校教頭）
- 細谷邦弘（横浜市立幸ヶ谷小学校主幹教諭）
- 児玉やこ（弥富市教育委員会主幹）
- 近藤勝士（大治町立大治中学校教諭）
- 水野晴佳（JICA 東京職員）
- 森茂遥（日本語・中国語教師）

『研究紀要』 目次一覧

『研究紀要』 第10号 (2016年3月発行)

研究紀要 (目次)		<i>Journal of the Japanese Overseas Migration Museum</i> CONTENTS	
はじめに 『研究紀要』第10号(記念号)の発刊によせて	小幡 俊弘 飯野 正子	Preface On Publishing the Journal of the JOMM	Toshihiro Obata Masako Iino
〈特別寄稿〉 あるブラジル移民の軌跡 — 黒田又蔵氏の事例を手がかりとして —	1 二宮 正人	<i>Special contribution</i> <i>Path of a Japanese immigrant to Brazil — Mr. Matazo Kuroda's case</i>	1 Masato Ninomiya
論文 ハワイ日系人の正月風景にみる移民文化 — 年越しの儀式の変容と継承 —	11 島田 法子	Articles Immigrant Culture Seen in the New Year Celebration of Japanese People in Hawaii: Changes and Continuity in the Immigrants' Seasonal Rituals	11 Noriko Shimada
ハワイ日本人移民の教材づくりに関する海外スタディツアーの教育的意義 — 物語論的アプローチによる大学生の自己変容プロセスの分析を通して —	25 森茂 岳雄・津山 直樹	Educational Significance of Overseas Study Tour Program for Making Teaching Materials about Japanese Immigrants in Hawaii: An Analysis of Self-Transformation Process of University Students Utilizing Narrative Theory Approach	25 Takeo Morimo・Naoki Tsuyama
研究ノート 和歌山県における移民をめぐる取り組みと今後の展望	41 東 悦子	Research Notes Various Projects Related to the History of Emigrants in Wakayama Prefecture and the Future Developments	41 Etsuko Higashi
南洋群島における日本人小学校の教育活動 — 南洋庁サイパン尋常小学校保護者会編「さいばん」(1935年)をもとに —	63 小林 茂子	Educational Activities of Japanese Elementary Schools in Nan'yō Guntō (the South Seas): Focusing on "Saipan" edited by Parents Association in the Saipan elementary school in 1935	63 Shigeiko Kobayashi
〈調査報告〉 海外移住資料館とハワイ日系社会との関係強化について ハワイ日系社会関係促進調査(2015年10月15日-21日)の報告	75 飯野 正子・玉林 洋介	<i>Research Report</i> "Strengthening the Relationship between the Japanese Overseas Migration Museum and Nikkei Communities in Hawaii" — Report on the Research Trip Visiting Nikkei Communities in Hawaii (October 15-21, 2015) —	75 Masako Iino・Yosuke Tamabayashi
学術研究プロジェクト一覧 『研究紀要』目次一覧	87 90	Academic research projects List Contents List	87 90
資料紹介 菅野武雄「最後の手記」(四) — 日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想 —	95 柳田 利夫	Review on Scholarly Materials "Last Notes" by Takeo Sugano (4): The Life and Thoughts of a Second-Generation Japanese-American Who Has Become "Japanese" in Japan.	95 Toshio Yanagida

『研究紀要』 第11号 (2017年3月発行)

研究紀要 (目次)		<i>Journal of the Japanese Overseas Migration Museum</i> CONTENTS	
はじめに 『研究紀要』第11号の発刊によせて	朝熊 由美子 飯野 正子	Preface On Publishing the Journal of the JOMM	Yumiko Asakuma Masako Iino
論文 International, Interracial, and Multicultural Families among Japanese Immigrants in New York (ニューヨークにおける日本人移民家族: インターナショナル・異人種・多文化な家族のかたち)	1 菅 (七戸) 美弥	Articles International, Interracial, and Multicultural Families among Japanese Immigrants in New York	1 Miya Shichinohe-Suga
日系社会における継承語教育の課題と展望 — 「継承語」概念の比較検討を通して —	17 平岩 佐江子	Challenges and Prospects of Heritage Japanese Language Education in Japanese Immigrant Communities: A Comparison of the Concepts of — "Heritage Language" —	17 Saeko Hiraiwa
研究ノート 第二次世界大戦直後に日本に「送還」された日系カナダ人のその後	39 飯野 正子・高村 宏子・原口 邦敏	Research Notes The Japanese Canadians Who Were "Repatriated" to Japan Immediately after World War II	39 Masako Iino・Hiroko Takamura・Kunihiro Haraguchi
資料紹介 菅野武雄「最後の手記」(五) — 日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想 —	61 柳田 利夫	Review on Scholarly Materials "Last Notes" by Takeo Sugano (5): The Life and Thoughts of a Second-Generation Japanese-American Who Has Become "Japanese" in Japan.	61 Toshio Yanagida

『研究紀要』 第 12 号 (2018 年 3 月発行)

研究紀要 (目次)		<i>Journal of the Japanese Overseas Migration Museum</i> CONTENTS	
はじめに	朝熊 由美子	Preface	Yumiko Asakuma
『研究紀要』第 12 号の発刊によせて	飯野 正子	On Publishing the Journal of the JOMM	Masako Iino
<b>論文</b>		<b>Articles</b>	
日本人移住史とセンサス史のリンク：1860 - 1870 年	菅 (七戸) 美弥 1	Linking Japanese Migration History and U.S. Census History:1860-1870	1
アメリカの新聞報道が語るワカマツ・コロニー	小澤 智子 23	Wakamatsu Colony in the American News Media	23
ロンドン在住ブラジル人移住者と子どもたちの継承語教育	拝野 寿美子 49	Brazilian Immigrants in London and Portuguese Language Education of Their Children	49
親子関係がペルー人第 2 世代の社会進出に与える影響の検証 ～在日ペルー人 5 家族の経験～	小波津 ホセ 67	The Relationship Between Parents and Children of Peruvian Families in Japan - The Experiences and Dissonant Acculturation of Five Peruvian Families in Japan -	67
<b>研究ノート</b>		<b>Research Notes</b>	
ブラジル近代史の一頁としての「シンドウレンメイ事件」	三田 千代子 87	The Shindo Renmei Case - As One Page of Modern History of Brazil	87
田中貞吉とペルー移民事業 移民送り出しまでの前史の分析	大島 正裕 101	Teikichi Tanaka and Japanese Immigrants to Peru - Analysis of process leading up to first migration project to Peru -	101

『研究紀要』 第 13 号 (2019 年 3 月発行)

研究紀要 (目次)		<i>Journal of the Japanese Overseas Migration Museum</i> CONTENTS	
はじめに	熊谷 見子	Preface	Mitsuko Kumagai
『研究紀要』第 13 号の発刊によせて	飯野 正子	On Publishing the Journal of the JOMM	Masako Iino
<b>論文</b>		<b>Articles</b>	
大正八年一月の暴動被害と損害賠償問題 — 第一次世界大戦期の労働運動とリマの日本人移民 —	柳田 利夫 1	The damage from the riot in January 1919 (Taisho 8) and the problems of compensation for damages: labor movement during World War I and the Japanese immigrants in Lima	1
戦前の女性の越境と洋服技術の移転 — 日米で洋服を教えた小川信子の事例から —	北脇 実千代 31	Women's Transnational Mobility and the Transfer of Western Dressmaking Skills Before World War II: Nobuko Ogawa and Her Teaching Experience in the U.S. and Japan	31
<b>研究ノート</b>		<b>Research Notes</b>	
第二次世界大戦直後に日本に「送還」された日系カナダ人のその後 — カナダ帰国・日本定住をめぐる問題 —	原口 邦祐 49	Japanese Canadians Who Were "Repatriated" to Japan Immediately after WWII: Issues surrounding Re-Entry to Canada and Domiciliation in Japan	49
<b>調査報告</b>		<b>Research Report</b>	
リオデジャネイロのイリアダスフローレス宿泊所と日本人移民 — 「移民船」関連の入港書類を中心に —	比嘉 マルセロ 71	On the passage of Japanese immigrants through the Hospedaria da Ilha das Flores (Rio de Janeiro, Brazil) —Based on documentation related to the Japanese "migrant ships" of the South America East Coast Line, 1917-1932 —	71

研究紀要 (目次)	<i>Journal of the Japanese Overseas Migration Museum</i> CONTENTS
はじめに 「研究紀要」第14号の発行によせて	Preface On Publishing the Journal of the JOMM
熊谷 見子 飯野 正子	Mitsuko Kumagai Masako Iino
論文	Articles
第二次世界大戦直後に日本に「送還」された日系カナダ人のその後 — 日加文化交流・日加友好関係増進に向けての活動 —	The Japanese Canadians Who Were “Repatriated” to Japan Immediately after WWII : Their Experiences Revealed in their Oral Histories and Their Contribution to Friendly Relations between Canada and Japan
飯野 正子 高村 宏子 原口 邦祐	1 Masako Iino Hiroko Takamura Kunihiro Haraguchi
田中貞吉再考 — 日本人ペルー移住とラテンアメリカの富源 — (上)	Reconsidering Teikichi Tanaka — Japanese Emigration to Peru and Latin America as Sources of Wealth
柳田 利夫	37 Toshio Yanagida
研究ノート	Research Notes
在日ペルー系二世と「先祖探し」ワークショップ — 多文化共生の地平から —	Workshop of Second Generation Nikkei Peruvians in Japan and “Ancestor Search” — from the viewpoint of multicultural coexistence —
赤木 妙子	69 Taeko Akagi
学術研究プロジェクト一覧	List of academic research projects
86	86

研究紀要 (目次)	<i>Journal of the Japanese Overseas Migration Museum</i> CONTENTS
はじめに 「研究紀要」第15号の発行によせて	Preface On Publishing the Journal of the JOMM
熊谷 見子 飯野 正子	Mitsuko Kumagai Masako Iino
論文	Articles
Charles Wirgman's Moving Images: Mobility Portrayed in Yokohama チャールズ・ワグマンの作品 — 横浜において描かれる移動 —	Charles Wirgman's Moving Images: Mobility Portrayed in Yokohama
小澤 智子	1 Tomoko Ozawa
Carrying Mikoshi, a Portable Shrine, in Greater Vancouver: Attempts by the Rakuichi グレートヴァンクーヴァーにおける神輿 — 楽一の取り組み —	Carrying Mikoshi, a Portable Shrine, in Greater Vancouver: Attempts by the Rakuichi
庭山 雄吉	27 Yuukichi Niwayama
研究ノート	Research Notes
初期 (1897-1927) のメキシコ日本人移住者の経済地位の変化を把握する試み — 諷臥太郎「世界無比の親日国 大宝庫メキシコ」1927の記述を通して —	Understanding Trends in Economic Status among Japanese Immigrants in Mexico during the Early Period (1897-1927): By Exploring Personal Histories Described in the book of Hachitaro Taki's <i>The Great Treasury Mexico</i> (1927)
三澤 健宏	45 Takehiro Misawa
【第一回 JICA 海外移住感賞論文 優秀賞】 中南米地域の邦字新聞を活用した日本人移住に関する諸研究 — 「らぶらた報知」の創刊と「在亜沖縄県人連合会」の設立 —	【The Runner-up Award (Scholarly Research), JICA Essay Competition (2020)】 Research on Japanese overseas migration based on the Japanese-language newspapers published by immigrant communities in Latin America Launch of the “La Plata Hochi” and establishment of the “Okinawa Kenjin Rengokai” in Argentina
月野 楓子	63 Fuko Tsukino
学術研究プロジェクト一覧	List of academic research projects
80	80

『研究紀要』 第16号 (2022年3月発行)

研究紀要 (目次)		Journal of the Japanese Overseas Migration Museum CONTENTS	
はじめに 『研究紀要』第16号の発刊によせて	中根 卓 飯野 正子	Preface On Publishing the Journal of the JOMM	Suguru Nakane Masako Iino
論文		Articles	
複数の移住・移動と「家族」からみるアメリカ・センサス： 1860年のサンフランシスコにおける諸史料の検証	菅(七戸) 美弥 1	The Impact of Migrations and the Definition of "Family" on Collection of U.S. Census Data: Insights from the 1860 Census and Other Primary Sources	Miya Shichinohe-Suga 1
「ワカマツ・コロニー」以後の人の移動とネットワーク — 柳澤米子を中心に —	北脇 美千代 29	Transnational Mobility and Network after the "Wakamatsu Colony": The Life of Yoneko Yanagisawa in the U.S. and Japan	Michiyo Kitawaki 29
田中貞吉再考 — 日本人ペルー移住とラテンアメリカの富源 — (中)	柳田 利夫 49	Reconsidering Teikichi Tanaka — Japanese Emigration to Peru and Latin America as Sources of Wealth	Toshio Yanagida 49
研究ノート		Research Notes	
Locating Shipwrecked Persons in the Discussion to "Open" Japan 日本「開国」をめぐる議論にみる人の移動について	小澤 智子 105	Locating Shipwrecked Persons in the Discussion to "Open" Japan	Tomoko Ozawa 105
資料紹介		Review on Scholarly Materials	
戦後カナダ移住に関する基礎史料 — 外務省外交史料館所蔵史料 —	飯野 正子 131 高村 宏子 原口 邦祐 木野 淳子	The Documents Relating to the Japanese Emigration to Canada after World War II, in the Collection of the Diplomatic Archives, MOFA	Masaki Iino 131 Hiroko Takamura Kunihiro Haraguchi Junko Kino
【第二回 JICA 海外移住懸賞論文 最優秀賞】 異境での戦時体験を記録して — マリオ・ポテリョ・デ・ミランダと岸本昂一を事例に —	ソアレズ モッタ フェリッペ アウグスト 153	【Grand Prize (Scholarly Research), JICA Essay Competition (2021)] Recording the War as Experienced in a Foreign Land: On Mário Botelho de Miranda and Kishimoto Kōichi.	Felipe Augusto Soares Motta 153
【第二回 JICA 海外移住懸賞論文 優秀賞】 ディアスポラ・ナショナリズムとしてのカチマケ抗争再考： バストスとレジストロの比較を通じて	柴田 寛之 171	【The Runner-up Award (Scholarly Research), JICA Essay Competition (2021)] Manifestation of Diaspora Nationalism Revisited: Rethinking Kachi-make conflicts through the comparison between Bastos and Registro	Hiroyuki Shibata 171
学術研究プロジェクト一覧	190	List of academic research projects	190

『研究紀要』 第17号 (2023年3月発行)

研究紀要 (目次)		Journal of the Japanese Overseas Migration Museum CONTENTS	
はじめに 『研究紀要』第17号の発刊によせて	中根 卓 飯野 正子	Preface On Publishing the Journal of the JOMM	Suguru Nakane Masako Iino
論文		Articles	
コロナ禍における外国人住民の「移動できないこと」の意味 — 集住地域在住の中高年ニューカマー外国人のライフストーリー分析から —	坪谷 美咲子 1	The Significance of Immigrant Residents Being "Unable to Move" During the COVID-19 Pandemic: Based on Life Story Analysis of Middle-aged and Older Newcomers in a Highly Concentrated Area in Kanagawa Prefecture	Mioko Tsuboya 1
研究ノート		Research Notes	
移住地をつなぐ記憶の共有と再構築 — ブラジルの県連「移民のふるさと巡り」を事例として —	長村 裕佳子 19	Sharing and Reconstructing Memories among Japanese Settlements: The Case of the "Migrants' <i>Furusato</i> Tour" of the Federation of Japanese Prefectural Associations in Brazil	Yukako Nagamura 19
第2次世界大戦後のペルーの日本語教育 — ペルー日本語教師会誌「アンデス」を事例に —	小波津 ホセ 33	Japanese Education Post -World War II A Case Study of the Periodical "Andes" of the Japanese Teacher's Association in Peru	Jose Raul Bravo Kohatsu 33
資料紹介		Review on Scholarly Materials	
松宮家所蔵南米移民関係資料 (その1)	根川 幸男 53 ガラシーノ・ファクンド	The Matsumiya Family Papers: Documents Related to Emigration to South America (Part One)	Sachio Negawa Facundo Garasino 53
調査報告		Research Reports	
紛争下を生きるファミリービザ・ミンダナオの日系人 — 5家族の足跡をたどる —	玉林 洋介 65	The Nikkeijin Surviving in Conflict-Affected Areas in Mindanao, Philippines — Footprints of Five Families —	Yosuke Tamabayashi 65
旅券調査報告 展示中の四種類の旅券からわかったこと	柳下 宙子 87	Passport Investigation Report — What we learned from the four types of passports on display at the Museum —	Hiroko Yagishita 87
【第三回 JICA 海外移住懸賞論文 優秀賞】 ブラジル移民促進のために使われた幻燈スライドと野田良治	田中 和幸 97	【The Runner-up Award (Scholarly Research), JICA Essay Competition (2022)] Magic lantern slides used to promote Brazilian immigration by Diplomat Ryoji Noda	Kazuyuki Tanaka 97
学術研究プロジェクト一覧	118	List of academic research projects	118

研究紀要 (目次)		<i>Journal of the Japanese Overseas Migration Museum</i> CONTENTS	
はじめに 『研究紀要』第18号の発行によせて	大野 裕枝 飯野 正子	Preface On Publishing the Journal of the JOMM	Hiroe Ono Masako Iino
<b>論文</b>		<b>Articles</b>	
環太平洋の移動とマイノリティをめぐる史料 — 漂流者の見た/聞いたアメリカ —	菅 (七戸) 美弥 1	Historical Sources on Transpacific Migration and Minorities: Reality of America as Seen and Heard by Japanese Castaways	1 Miya Shichinohe-Suga
沖縄系としての生活史と「定住」の模索 — 横浜市鶴見区の南米系移民の事例から —	藤浪 海 19	Life History as Okinawan Descent and the Seeking of "Settlement": A Case Study of South American Migrants in Tsurumi Ward, Yokohama City	19 Kai Fujinami
ウチナンチュとしての在日ペルー人の「ネットワーク」と「継承」 — 世界のウチナンチュ大会への参加動機から —	小波津 ホセ 35	"Networks" and "Inheritance" of Peruvians in Japan as Uchinanchu Motivation to Participate in the Worldwide Uchinanchu Festival	35 Jose Raul Bravo Kohatsu
<b>資料紹介</b>		<b>Review on Scholarly Materials</b>	
戦後日本人カナダ移住に関する基礎史料 — カナダ図書館・公文書館、外務省外交史料館所蔵史料 —	飯野 正子 高村 宏子 原口 邦紘 木野 淳子 53	The Documents Relating to the Japanese Emigration to Canada after World War II, in the Collection of the Library and Archives Canada and the Diplomatic Archives, MOFA	53 Masako Iino Hiroko Takamura Kunihiro Haraguchi Junko Kino
「ブラジル東山農場」所蔵史料の紹介	柳田 利夫 87	Introduction to the Historical Materials in the Collection of the "Brasil Tozan Farm"	87 Toshio Yanagida
松宮家所蔵南米移民関係資料 (その2)	ガラシーノ・ファウンド 根川 幸男 123	The Matsumiya Family Papers: Documents Related to Emigration to South America (Part 2)	123 Facundo Garasino Sachio Negawa
海外移住資料館に収蔵されている JICA 海外移住事業関係資料と デジタル化作業	渡邊 由紀子 137	Materials Related to JICA's Overseas Migration Project in the Japanese Overseas Migration Museum and Their Ongoing Digitization	137 Yukiko Watanabe
学術研究プロジェクト一覧	165	List of academic research projects	165

研究紀要 (目次)		<i>Journal of the Japanese Overseas Migration Museum</i> CONTENTS	
はじめに 『研究紀要』第19号の発行によせて	大野 裕枝 飯野 正子	Preface On Publishing the Journal of the JOMM	Hiroe Ono Masako Iino
<b>論文</b>		<b>Articles</b>	
アメリカン・フレンズ奉仕団から収容所の母親と新生児への贈り物	小澤 智子 1	American Friends Service Committee's Gifts to Incarcerated Mothers and Babies	1 Tomoko Ozawa
20 世紀前半の洋裁教育にみられる日米間の女性の移動性とキャリア形成 — 広島県出身の上井田阿佐代を事例として —	北脇 実千代 25	Western Dressmaking Education and Japanese Female Mobilities between the U.S. and Japan: The Professionalization of Asayo Doida, 1912-1953	25 Michiyo Kitawaki
博学連携における構成主義的学習の意義と課題 — JICA 横浜 海外移住資料館の展示を活用した移民学習の実践を事例として —	津山 直樹 高野 慎太郎 41	The Significance and Challenges of Constructivist Learning in Cooperation between Schools and Museums: A Case Study of the Practice of Immigration Learning by Utilizing the Exhibition of JICA Yokohama Japanese Overseas Migration Museum	41 Naoki Tsuyama Shintaro Takano
<b>研究ノート</b>		<b>Research Notes</b>	
『南米行』：堀内新泉の<立志小説>における 20 世紀初頭の南米への日本人移住体験をめぐる	比嘉 マルセロ 59	<i>Nanbei-yuki (South America Bound):</i> Horiuchi Shinsen's Novel and the Narrative of <Self-Improvement> in the Japanese Migratory Experience to South America in the Early 20th Century	59 Marcelo G. Higa
第二次世界大戦後の日本人カナダ移住政策をめぐる — 日加の動向 —	木野 淳子 87	Canada's Immigration Policy towards the Japanese after World War II: Trends in Canada and Japan	87 Junko Kino
ブラジル・トメアスー移住地における日系人の俳句活動と課題 — トメアスー移住地俳句協会誌を事例として —	半澤 典子 97	Haiku Activities and Issues of Nikkei in the Tomé Açú Settlement in Brazil: A Case Study of the Tomé Açú Migration Area Haiku Association Magazine	97 Noriko Hanazawa
<b>資料紹介</b>		<b>Review on Scholarly Materials</b>	
『川柳研究 筏』	象井 輝子 109	A Report on <i>Senryu Studies: Raft</i>	109 Teruko Kumei
松宮家所蔵南米移民関係資料 (その3)	根川 幸男 ガラシーノ・ファウンド 119	The Matsumiya Family Papers: Documents Related to Emigration to South America (Part 3)	119 Sachio Negawa Facundo Garasino
<b>調査報告</b>		<b>Research Report</b>	
カンボグラデ沖繩県人会における「混血者」のインタビュー調査	野入 直美 131	Interviews with "Mixed-Race" Members of the Campo Grande Okinawan Association	131 Naomi Noiri
学術研究プロジェクト一覧	143	A List of Academic Research Projects	143

## 執筆者一覧 Authors

中牧 弘允 (国立民族学博物館・名誉教授 / 海外移住資料館・学術委員)  
Hirochika Nakamaki  
(National Museum of Ethnology / Academic Advisory Committee, JOMM)

福山 文子 (専修大学・准教授)  
Ayako Fukuyama (Senshu University)

中山 京子 (帝京大学・教授)  
Kyoko Nakayama (Teikyo University)

木野 淳子 (東京外国語大学・兼任講師)  
Junko Kino (Tokyo University of Foreign Studies)

天野 剛至 (常葉大学・教員)  
Tsuyoshi Amano (Tokoha University)

# JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 20

## 2025 年度

---

発行：国際協力機構横浜センター  
Japanese Overseas Migration Museum  
海外移住資料館  
発行年月：2026 年 3 月

### 問い合わせ先

JICA 横浜 海外移住資料館  
〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港 2-3-1 JICA 横浜 2 階  
Tel 045-663-3257 / Fax 045-211-1781  
Web : <https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/index.html>  
E-mail : [jicayic\\_jomm\\_info@jica.go.jp](mailto:jicayic_jomm_info@jica.go.jp)

本研究紀要は、海外移住資料館『研究紀要』執筆要領に則り編集を行っています。  
ただし、原稿の特質、執筆者の意向等を尊重し、一部異なった体裁・表記の部分が  
あります。

*Journal of the Japanese Overseas Migration Museum*  
*JICA Yokohama*

**Vol. 20**

2025

**Special contribution** \_\_\_\_\_

Participating in the New World and Japanese Society

Hirochika Nakamaki

**Articles** \_\_\_\_\_

Towards a Class on the “Forgotten Pain”, Rights, and Representation  
of the Indigenous Ainu People:

Diverse Ways of Thinking and Living as Shown by Human Migration

Ayako Fukuyama · Kyoko Nakayama

An Aspect of Japanese Emigration to Canada after World War II

— The Establishment of the Canadian Immigration Office in Japan —

Junko Kino

---

**[Grand Prize (Scholarly Research), JICA Essay Competition (2025)]**

Deepening Autumn: A Sociological Study of Prewar Japanese Canadian  
Haiku Communities

Tsuyoshi Amano

